
撃剣乱舞 / 斎藤伝鬼 ~ おゆうさんって、カッコいい

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

撃剣乱舞／斎藤伝鬼〜おゆうさんって、かつこいい

【Nコード】

N1324E

【作者名】

りきてつくす

【あらすじ】

塚原ト伝最後の弟子、斎藤伝鬼坊。己の剣を極めるため旅立った彼は、やがて謎の女性ゆうと出会い、波瀾万丈の修行生活を送ること。さらに兄弟子真壁暗夜軒との因縁は、美貌の少年剣士桜井霞之助との宿命的な対決へと彼を導く……。

金ちゃんゝ其の切なき事初恋の如し（1）

空蝉^{うつせみ}を運ぶ蟻の列が陽炎に揺れている。

暑い……。

つい昨日までは、身を切るような雁渡^{かりわた}しが吹き荒れていたというのに、夜が明けると一転、夏に逆戻りしたかのようなこの残暑である。

時折、青臭い風とともに甘ったるいような土の匂いが舞い上がり、思わず噎せ返りそうになるのだ。

しかし、金平は嬉しそうであつた。

空が高い……。

ただそれだけで、もう金平の心には、生きている喜びがひしひしと沸き上がってくるのだ。

それだけでなくも彼は、ふくよかな頬に愛らしい笑窪を浮かべては、それはもういつだつて嬉しそうな顔をしているし、薄紅葉に彩られた錦木のこずえに鶉^{ひよどり}が群をなす頃には、もう楽しくって楽しくって仕様がなといったふうに、ただでさえ細い目をよりいつそう細めて微笑むのであつた。

いったい、お前さんは何がそんなに嬉しいのだ？

誰もが一度は彼にそう尋ねてみたくなるのだが、それは当の本人にも分からない事であつて、強いて言うならば、そういうふうに生まれついてしまっただけの事かもしれない。

しかし、うなじを炙^{あぶ}る初秋の陽射しをものともせず、彼は今日もすこぶる元気なのであつた……。

金平の姓は斎藤という。常陸の國は井出村という小さな農村で、侍の子として生まれた。

天文十九年というから、足利十三代將軍義輝が三好長慶らによって京から近江へ追い落とされた頃で、早い話が戦国期の真っ只中である。

彼の父親は、小番衆として北条氏康に仕えていた。

その父の手解きで幼少より武芸の修練を積んだのだが、これが子供ながらに膂力は一倍、おまけに動きに機敏な所があるというので、父の朋輩の薦めもあり、鹿島の神職ういへ卜部吉川道場の門を叩く事となった。

鹿島神宮の御祭神は、建御雷之男神たけみかづちのおのみである。天孫降臨てんそんこうりんに先立つて葦原中国を平定した武神である。ゆえに鹿島の神人には刀槍の扱いの巧みな者が多くいた。中でも特に秀でた七人を鹿島七流という。卜部吉川家は、この鹿島七流の一つで鹿島中古流『神妙剣』を代々伝えていた。

さて、この吉川家出身の武芸者には、かの有名な塚原卜伝がいた。彼は金平を一目見るなり、その非凡な才能と邪氣のない心を看破し、これを弟子の一に加えて可愛がった。

金平十二才、塚原卜伝はすでによわい齡七十を超えていた……。

「ねえ、金ちゃん。ちょっと、お願い……」

鹿島宮中にある卜部吉川屋敷の裏庭で、金平の名を呼ぶのは女中のお幸である。彼女は鹿島城主通幹に仕える下級武士の妻であったが、早くに夫と死別し十九という若さで後家となっていた。色白でおっとりとした見目の良い女である。

金平は、十四になっていた。上背は既に立派な大人で、がっしりと恵まれた体格の少年であった。

彼は、生来、勇敢で、豪気で、純粹で、そして楽天家であった。

些^{いさ}か脳天気なきらいはあつたが……。

「お、お、お幸さん。俺あの事呼んだがい？」

タライに張った水で洗濯をしていた金平が振り向く。

「ごめんね、金ちゃん。これ、お願い」

お幸は、庭にあるナナカマドの枝に物干し竿を架けるのに手を焼いていた。金平は足早にやってきて、造作も無くひよいと竿を引っ掛ける。お幸は、目を睜^{みは}った。

「大きくなつたわねえ……。ここに来てまだ二年だというのに」

「お、大きい事は良い事だつぺ？」

「ふふふ……。そうね。でも乱暴者になつては駄目よ」

「そそ、それは大丈夫。俺、心が優しいもの……」

お幸は、くすりと笑った。

「いずれは、塚原の大殿様みたいに立派な人になるのよ」

「どひゃあ。そ、そんな大層なものになるのは無理だつぺ」

お幸は、金平の広い背中をぽんと叩いた。

「そういう気概を持ちなさいって事！」

「あい……」

「おいこら、金平。いつまで洗濯やってんだあ！」

兄弟子の呼ぶ声がした。

「あとは私がやっておくから、行つてらっしゃい」

そう優しく微笑むお幸にぺこりと頭を下げ、金平は走りだした。

「そうだわ。金ちゃん、お稽古が済んだら家にいらっしゃい」

「あーい」

走り去る金平に声を掛けておいてから、お幸は、深い溜息をついた。

「可哀相に。あれじゃあ、下男と一緒にだわ……」

も^も塚原ト伝は、ト部吉川家の次男として生まれ、後に塚原土佐守安^{やす}

幹の養子となり塚原城主となった。しかし、老いた今は養嗣子の彦四郎に跡を譲り、気の向くまま吉川道場で弟子達に教えていたのである。

彼は、生涯の中で、三度の廻国修行にのぞみ、三十七度戦に出陣してそのつど輝かしい武功を立て、十九度の真剣勝負にことごとく勝利した無敵の剣豪であった。

ト伝の興した鹿島新当流の弟子には師岡一羽をはじめ、足利三代將軍義輝、伊勢の国司北畠具教、室町幕臣細川藤孝（幽斎）、小田讃岐守氏治（天庵）、真壁安芸守氏幹（道無）、太田美濃守資正（三樂斎）など、そうそうたる武将とその家臣達が名を連ねていた。金平のような足輕の倅は、兄弟子達から見れば小者同然の取るに足らない存在であった……。

磨き込まれた道場の板敷きの上で、塚原ト伝は飄々と木太刀を構えている。

ト伝は、七十四歳。老いてなお隆々たる筋肉を両肩に踊らせ、日焼けした顔には精気が漲り、鋭い目はただならぬ眼光を放っていた。彼は、ぐつと腰を沈めて両足を大きく踏ん張り、背をやや丸め加減にして臍の辺りから木太刀を下青眼に突き出している。鎧武者を叩き斬るための剣、すなわち介者剣法の典型的な構えである。戦国時代の剣の流儀は大概この介者剣法で、これには、敵が纏う鎧の間を素早く正確に攻撃するという卓越した技倆が要求されるのだ。

「硬いな。もっと肩の力を抜け」

「は、はい」

神妙な面持ちで老師と対峙しているのは金平だ。刺子の胴着の下に継ぎはぎだらけの軽衫袴を履いている。

「顎を引いて、丹田に氣力を込めるのじゃ」

「……はい」

剣の高みに達した武芸者の目は、厳しさの中にも慈愛の光を湛えていた。ましてや、孫ほども年の離れた内弟子である……。

「うむ、そうじゃ……、それで良い。よし、参れ！」

「はい」

三間の間合いをおいて師と全く同じ構えで対峙する金平が、流れるような摺り足でその間合いを徐々に詰めていった。

「やあ！」

金平が床板をだんと踏み鳴らして打ち掛かると、ト伝は、緩慢な動作ですつと僅かに身体を引いてこれを躲した。鼻先ぎりぎりの所を、木太刀の切っ先がぶうんと唸りを上げて掠める。ト伝の動きが緩慢に見えるのは、彼の体捌きに全く無駄がないからであって、その敏捷性は獣のごとく研ぎ澄まされていた。

「やつ！」

更に一撃……。これもト伝の鼻先を掠める。金平の身体は、ふらふらと前に泳いだ……。

「よいか金平、これが一寸の見切りじゃ」

木太刀を下ろし佇立したト伝が金平を見下ろす。金平は、僅か二三合の打ち込みで息が荒くなっていた。

「いかに剣術の強者巧者と言えども、刃の届く間合いには限りがある。敵の刃先の一寸外に身を置けば、決して敗れる事はないのだ。すなわちこの無敵不敗の妙境を一寸の見切りと言っ……」

ト伝はゆつくりと顎髭を撫でながら厳かに言った。その威厳に満ちた師の姿に、金平はひれ伏して懇願した。

「わ、わ、私にも、その一寸の見切りというのを教えてくれろ」

ト伝の吊り上がった眉がぴくりと動く。

「一寸の見切りは伝授するものではない。長い年月を修行に費やし、己の身をもって体得するものじゃ」

「は、はい……」

ト伝は、緩やかに木太刀を振り上げると、腰を据えて再び下青眼にびたりと構えた。

「よし。もう一度、参れ！」

「はい！」

金平は立ち上がって額の汗を袖で拭うと、木太刀を握って力一杯打ち込んだ。

「やつ！」

ト伝は、それを造作無く躲す。

「踏み込みが甘い！」

「はい！」

再度打ち掛かるのを、ト伝は天狗のようにひらりと受け流しておいて金平を叱咤した。

「そんな事では、何時まで経っても兄弟子達には遠く及ばぬぞ」

金平の目がきらりと鋭い光を放った。

「でやあつ！」

裂帛の気合いとともに、金平の疾風のごとき斬撃が唸りをあげてト伝に迫る！ 老師は、体捌きでは躲しきれずに初めて自らの木太刀を振るった。カンという乾いた音を響かせて金平の太刀行きが逸れ、振り下ろした木太刀の勢いそのままに、彼は、つんのめって床に転がった……。

ああ吃驚した、ああ吃驚した……。こやつ、思った以上に剣が伸びるわい。これは、ひよっとすると儂が考える以上の大器かも知れんな……。

剣聖、塚原ト伝は、内心の動揺を微塵も表に出さず、極めて厳かに言った。

「今日は、これまで」

孟秋の空が見事な夕焼けに染まった。北浦を飛び発つ鳴の群れがゆつくりと視界を横切る。うす桃色の合歡の花が夕陽を受けて紅に燃えていた……。

すっかり、遅くなっちったどや！。

金平は、胴着の袖で玉の汗を拭いつつ、早足にお幸の家を目指していた。兄弟子達から言いつけられた雑用をこなしているうちに、すっかり日が傾いてしまったのである。

お幸の家は、鹿島城二の丸に隣接する射の馬場の南側に外堀を隔てて広がる、閑静な農地の一角にあつた。裕福な百姓家を買取つて改造したもので、生け垣に囲まれた小さな茅葺きの家である。

亡夫の母と二人つきりで暮らしていたのだが、先年その義母が亡くなってからは、女一人の侘住いとなっていた……。

金平は、例によつて丸い頬に笑窪を作り、細い目をさらに細めていた。これまでもお幸の家に夕餉を呼ばれた事は何度かある。彼女は、常日頃から金平のことを弟のように可愛がつてくれていた。

うつとりするような虫時雨に包まれ、お幸の優しい笑顔を思い浮かべつつ、浮き浮きした足取りで歩を運ぶ金平であつたが、彼女の家を目前にして不意にその歩みを止めた。

夕暮れの空に、力強い馬の嘶きが吸い込まれるのを聞いたのだ……。

金平が垣根越しに中を覗くと、いつもはひっそりとしているはずの厩に美事な黒毛の戎馬が繋がれていた。金平には見覚えのある馬だ。

あの馬は確か……真壁の殿様の……。

真壁安芸守氏幹は、またの名を暗夜軒という。

彼は、常陸の豪族真壁家の十七代当主であり、また塚原卜伝門下

の高弟の一人でもあった。

金平にとつては兄弟子に当たるのだが、その技倆も身分も天と地ほどの違いがあり、ともに話が出来るとな相手ではなかった。さらに彼は、一見ただけでも近寄りがたいような峻烈さと冷徹さを兼ね備えた鬼神のような武将でもあった。

人は彼をこう呼んで恐れた。

夜叉真壁……。

なんして真壁の殿様が、お幸さんの家に……？

金平は一瞬戸惑いの表情を見せ、今日のところは引き返そうかとも思ったが、しかしやはり、お幸に会いたい気持ちには勝つ事が出来ずに大きな体を丸め狭い木戸を潜った……。

「……ああ………あああつ………」

お幸さん、いんのげ？ という言葉を、金平はすんでの所で飲み下した。家の中から女の喘ぎ声が聞こえたからだ。お幸に違いなかった……。

「……ああ………どうか、………どうか、もうそれ位で………」

金平の体は凍り付いた。この暑さにもかかわらず、こめかみに冷や汗が伝った……。

どしたんだー？ ……なーよ、お幸さん お幸さん、

どしたあよー？

鼓動が高鳴る……。

金平は、息を殺し足音を忍ばせて裏庭の方へ回り、濡れ縁ぬれえんから声のする奥座敷の中を覗き込んだ。

薄闇に紛れ、蚊帳かやの中で絡み合う男女の姿が見えた。ぼんやりと射し込む西日に照らし出された浅黒く逞しい背中、恐らく真壁暗夜軒であろう。そして、彼の首に細い腕を巻き付け、白い太腿で男の腰を挟み込んでいるのは、紛れもなくお幸であった……。

「あああ……。そんな………そんなにされては………、体が保ち

ません……」

金平は、我知らず拳を強く握りしめていた。暗夜軒に対する憎しみの念が沸き上がるのを抑えられない。

その時突然、暗夜軒の腰の動きが止まり、その広い背中越しに凄まじい殺気が一直線に金平の体を射た。虫の鳴く声が急速に静まり、金平は一瞬目眩めまいを感じた……。

気付かれた！

金平は、音もなく数歩後退ると、そのまま踵を返し、一目散に外へ駆け出した。

今まさに消えようとする陽光が、鹿島城本丸を覆う木々の枝葉を燃えるように紅く踊らせていた。その上には、すでに満天の星空が広がり始めている……。

金平は、どういう表情をしていいか分からなかった。

何か大切な物を失ってしまったような思いにかられ、焼けた鉛を飲み込んだように胸がつまる。

そして、上気した頬にぽろぽろと涙がこぼれ落ちるのを感じた……。

続く。

金ちゃん、其の切なき事初恋の如し（2）

「思つた通りだわ……」

お幸は、嬉しそうに目尻を下げた。

今日も、足下から照り返す陽射しに目を細めねばならぬほどの秋晴れで、鹿島宮中にある吉川屋敷の裏庭では、そちこちでキリギリスの鳴き声が勢いを盛り返していたが、頬を撫でる風は充分に澄み渡っており、そこはやはり秋というものをひしひしと感ぜずにはいられなかった。

「金ちゃんに、ぴつたり」

「こそ、そうがい……？」

金平は、ご褒美を貰った犬みたいに、でれつと表情を緩めた。彼は、ずんぐりとした体をゆっくりと回転させながら、身に付けた真新しい渋染の小袖と、ぱりつと折り目の付いた萌黄地に菖蒲韋模様の山袴をお幸に見せた。

「……うん、似合うよ。惚れ惚れするわぁ」

お幸は、何やら遠い目で金平のそんな姿を見るともなく見ていた……。

三年前に死んだ彼女の夫も、ずんぐりとした体つきで丸い顔に笑みを絶やさないう気立ての優しい男であった。金平がいま着ている小袖と袴もこの夫が着ていたもので、そこにはやはり、いくらかの思い出も染み込んでいるのであろう、お幸の顔には懐古の情と一抹の寂しさが滲み出ていた……。

昨日、金平を自宅に呼んだのは、彼が思いも掛けず大きく成長している事に改めて気付き、亡夫の残した着物が彼の体格にちょうど合うのではないかと思いついたからであつた。

「お、お幸さん、これ……本当に貰つてもいいのげ？」

「金ちゃんが大事に着てくれれば、あの人もきっと喜んでくれると思うの」

「あ、あ、ありがとう」

金平は、いつものように丸い頬に笑窪を作り、腫れぼったい目を細めて笑っていたが、内心はどきまぎしていた。昨夜見たお幸の痴態が頭から離れないのである。

真壁暗夜軒の獣じみた厳つい身体に組み伏せられた小さな肩や、毛深い猪首にくねくねと絡めたしなやかな腕、そして、激しく動く男の腰にがつしりと巻き付けた白い太腿……、それらは、普段金平が目にする清楚で可憐なお幸の姿からは想像もつかないような、あられもなく寝乱れた女の姿であつた。

しかし、昨夜の濡れ事など露ほども顔に表さず天女のように微笑むお幸に、金平は女という生き物の不思議を改めて思い知つた心持ちであつた。

「さあ、そろそろ道場のほうに行かないと、また恐ーい兄弟子様に叱り飛ばされるわよ。あとは私がやっておくから、早く行つてらっしゃい」

「う、うん………」

涼やかな秋風がお幸の黒髪をかすめ、甘く生臭い女の匂いとともに金平の顔にまわりついた……。

「……………お幸さん」

「なーに？」

金平は、ぎゅっと拳を握りしめた。

「何でもね」

金平は何故だか急にそこに居たたまれなくなつて走りだした。そして、走りながら振り向かずにもう一度だけありがとうと言つた……。

人気の絶えた道場の板敷きに端座して、金平はしきりに首を捻つていた。

稽古中、ト伝老師から『力任せの剣ではいけない』と叱られ、次のような宿題めいた言葉を託されたのだ。

強きとてをのが力に任せつつ柳の枝に雪折れはなし

この意味を考えよと言われたのだが、しかし金平には何の事やらさっぱり分からなかった。どだい彼には考える事なんて無理なのである。目を閉じて『柳の枝……柳の枝……』と思案を巡らせても、やがて頭の中に浮かぶのはお幸の白い肌ばかりで、煩惱を振り払おうとぶんぶん首を振ったあげくに、うなだれて深い溜息をつく始末であつた……。

俺あには、こいな難しいのは無理だつぺ……。

金平は、昔から悩みを持続させる事が出来ない質たちであつた。耳を澄ませば格子窓の向こうから椋鳥むくどりの賑やかな囀りが漏れ聞こえる。すると、もうそれだけで金平は何だか浮き足だつてしまい、思わず丸い顔がほころんでくるのであつた……。

その時である。

「どれ……、ひとつ、儂が稽古をつけてやろう」

不意に、開け放った道場の入り口から感情を押し殺したような低い声が金平の背後に投げられた。彼はびくと肩を震わせ、同時に全身からぶわつと冷や汗が噴き出すのを感じた。

この声は！

金平が恐る恐る振り向くと、そこには巖いわのような武士の黒い輪郭が、入り口から燦々と射し込む秋の陽射しを遮っているのが見えた……。

「ま、ま、真壁の……お殿様……………」

真壁暗夜軒うじま氏幹。

常陸國真壁城主にして塚原卜伝の高弟でもある彼は、今年四十一歳の壮年だが、若年の頃より戦乱に揉まれ、鍛えに鍛え抜かれた身体には褐色に光る鋼のような筋肉が躍り、尖った鼻と鋭い炯眼もつは猛禽類きんのような獰猛さを見る者に印象付けた。

ほんのひと月ほど前まで、漆黒の愛馬に跨る彼の姿は血風舞い上がる戦場の中にあつた……。

戦の発端は、常陸國筑波の豪族小田氏治が上杉輝虎（謙信）との盟約を破り、秘かに北条氏康の調略に応じた事にあつた。激怒した輝虎は、越後が誇る毘沙門天から拝領した軍勢を引き連れ、峻険な三国峠を越えて関東の地になだれ込むと、佐竹義昭と相呼応して山王堂に布陣する小田氏治を強襲した。

この時、佐竹の宿将である真壁暗夜軒も上杉勢に加わり、小田方の信太頼範や菅谷政貞らの軍勢を蹴散らし敗走させていた。

後に小田天庵（氏治）が、剣の師である塚原卜伝に語ったところによると、真壁暗夜軒の戦いぶりは、まさに『夜叉真壁』と呼ぶに

ふさわしいのもであつたという。

身の丈六尺豊かの暗夜軒は、漆黒の愛馬に激しく縄鞭を入れると砂塵を巻き上げながら敵陣に突っ込み、筋金入りの六角棒を振り回して、徒士であろうが騎馬であろうが当たるを幸い胴を薙ぎ払い頭を砕いて打ち殺した。

彼が手にした武器は、長さ一丈二尺（約3メートル63センチ）の檜でできた極太の六角棒に鉄の筋金を渡したもので、これに尖った鉄鉋をびつしりと隙間なく植え付けた、まさに殺人兵器であつた。彼の駆け抜けたあとには、首や手足が不自然にねじ曲がった死骸や、頭蓋が潰れ眼球の飛び出した死骸が延々と連なり、終いには暗夜軒の姿を見留めただけで敵兵が悲鳴を上げて逃げまどう始末となつた。

まさに荒ぶる鬼神のごとき武者振りであつたという……。

真壁暗夜軒は、金平の前に三尺余の木剣をからんと放り投げて「拾え」と言つた。

「あやあ……私はまだ赤っあかつべた下手な初心者だもんで……とでもでもお殿様のお相手なんぞ出来らんこたにえ……」

「御託はよいから、さつさと拾わぬか！」

大音声に板壁がびいんと震えた。金平は、一瞬びくつと身を竦めたが、やがて覚悟を決めると木剣を拾い上げ、恐る恐る立ち上がった。

「遠慮は無用じゃ。どこへなりとも打ち込んでくるがよい」

暗夜軒は、右手に木剣をだらりと提げたまま目をすうつと細め、不気味な静寂をもつて立ちはだかつた。これに対して金平は、五間の間合いで右足をゆつくりと踏み出し、右偏ひとえ身となって木剣をぴたりと中段青眼に構えた。丸い頬が緊張で引きつる……。

「おい、小童……。腰が引けておるぞ」

暗夜軒が鼻で笑う。金平は、つつつと摺り足で間合いを詰めると、裏返った矢声とともに床板を蹴立て、木剣をびゅんと唸らせて暗夜軒の頭上に振り下ろした。

「やつ！」

かつんという硬く乾いた音がして、金平は思わず飛び退いた。

暗夜軒は、金平の打ち込みに対し、無造作に振り上げた剣で十文字にこれを打ち払ったのである。金平は、柄を握る両手がびりびりと痺れるのを感じ顔を歪めた。

「ふん……。馬鹿力だけは一人前のような」

暗夜軒は、左足を僅かに引いて右半身となり、切っ先が床板に付きそうなほどの下段に構えると、すると流れるような足捌きで金平に迫った。金平は、これに気圧され、木剣を八相に持ち替えたままじりつじりつと後退る……。

暗夜軒は、金平が左右に回り込まぬよう牽制しながらぐんぐん追いついて、金平は、たちまち道場の板壁を背にして、はあはあ肩で息をする形となった。

丸い顔に幾筋も汗が伝う……。

暗夜軒の双眸が不気味な光を帯びた。

「ま、ま、ま、参りました！」

なかば悲鳴に近い金平の声を無視して暗夜軒が怒濤のごとく一気に詰め寄ると、身の危険を感じた金平は反射的に木剣を振り下ろした。暗夜軒は、僅かに体を右に開いてこれを躲しざま、金平が振り下ろした剣の上におのれの剣を重ねた。

「ぎゃっ」

金平の右手首が、くの字に折れ曲がった。暗夜軒の強力な合し打ちが籠手に入ったのだ。

しかし、木剣を取り落としてうずくまる金平に対し、暗夜軒は声高に罵りながら尚も打ち据えたのであった。

「立て、この小童がっ。 ええい、立たぬかあ！」

無抵抗な金平を打ち殺さんばかりに叩きのめした後、暗夜軒は木剣をからんと放り投げ、彼を見下ろしながら峻烈な、しかし低く冷たい声音で言った。

「よいか！、今度、儂に無礼をはたらいたらこの程度では済まぬぞ」
彼は、お幸との密会を金平に覗かれた事を知っていたのだ。

「貴様には剣で身を立てる素質などない。村に帰って百姓でもするがよい」

しかし、その言葉を金平は聞いていなかった。

彼はすでに気を失っていたのである……。

僅かに開け放した障子戸の隙間から涼やかな風が吹き込み、金平の丸い頬をさらりと撫でた。

「うむ……、気が付いたようじゃ」

吉川道場の裏座敷に寝かされた金平が目を開けると、ぼんやりと霞む天井に重なって心配そうに自分を覗き込むト伝老師の顔が視界に飛び込んできた。

「……………あっ」

「これ、動いてはならん、骨が幾つか折れておるのじゃ……。苦し
かるうが、動かずにじっとしておれ」

身体のいたる所に添え木があてがわれ、幾重にもサラシを巻いて
固定しているのがわかる。身じろぎひとつ出来ない状態だった……。

老師の顔は、いつものように平常心を失わない威厳に満ちたもの
であつたが、こけた頬からまばらに生える真白い髭が金平にはいさ
さか弱々しく見え、この年老いた剣の師に少なからず心配を掛けた
らしい事に気付いて、胸がちくつと痛んだ。

ト伝老師は言った。

「ここに集う者は、みな儂の可愛い弟子達じゃ……。よいか、金平。
誰がおぬしをかような目に合わせたかは敢えて聞かぬぞ。おぬしも
決して遺恨に思つてはならん」

「……はい」

塚原ト伝は、兵法者の弟子同士が流儀の道統めぐつて陰惨な争い
を繰り返すさまを何度も見てきた。修羅の道とはいえ、自分が慈し
み育てた弟子達にだけは、そのような辛楚を極める目には合わせた
くなかつたのである……。

「金平、よく聞け……。ひとたび兵法を志したるからには、いつど
こへなりとも己の屍を晒す覚悟を持たねばならぬ。また、それが卑
怯な闇討ちや謀略、さらには飛び道具によるものであると、全て
は己の未熟がまねいた結果と悟らねばならぬのじゃ……」

彼は深く溜息をつき、節くれ立った指先で金平の額を優しく撫で
た。その顔には、戦場で創つたらしい古傷が幾筋も刻み込まれ、こ
の武芸者の波乱に満ちた生涯がいかにも過酷なものであつたかを物語
っていた……。

「おぬしの技は、未だ贅力じゆうりきをたのんでの猪兵法いのししひやうであるが、しかし、生まれながらに備わる剣てんひんの天稟てんひんには一筋の光明が見えぬでもない……。このまま修行を積めば、ひとかどの兵法者にはなれようがしかし儂には、おぬしに何か決定的なものが欠けておるような気がしてならぬのじゃ……」

金平には、ト伝老師が言わんとしている事が何となく分かるような気がした。

「金平よ……。お前さんは、どうも心根が優しすぎるようじゃのう……。そこが弱みでもあり　　また強みでもあり……」

ト伝がふふと笑うと、糸のように細めた目が顔中に刻まれたの深い皺に埋もれ、とても古今に比類なき無双の英雄と称えられた武芸者とは思えぬような慈顔となった……。

「しばらくは、起居もままならぬであろう。食事や下の世話はずべてお幸に頼んである。しっかり養生して早く元氣になれ」

金平は、枕元にお幸が膝を揃え、沈鬱な表情でかしこまっている事に初めて気付いた。

ト伝は、もう一度だけ金平の頭を撫でてからゆっくりと立ち上がり、お幸に「では、頼むぞ」と言いおいて部屋を出て行った。

「あ……」

金平は、なにか侘びや礼などを言おうとしたが咄嗟に言葉が見つからず、ついに言いそびれてしまった。

ト伝老師が座っていた場所には、彼が着物に薫たきこんでいた芳しい香の匂いだけが残った……。

「金ちゃん……」

老師と入れ替わりにお幸が金平の顔を覗き込んだ。充血し、潤ん

だ瞳からぼろぼろぼろと涙が溢れ出て、金平の顔に熱くふり注いだ……。

「ごめんね、金ちゃん……。きっと私のせいね……。ごめんね……ごめんね……」

「お、お、お幸さ……」

金平は何か言おうとしたが、その言葉はお幸が押し付けてきた唇によって遮られてしまった……。

初めて味わった女の口は、熟れた鬼灯ほおずきみたいな味がした……。。

年が明けて間もなく、お幸は近在の郷土に縁づいて、あっけなく嫁いでしまった……。

そして、金平は元服し、名を主馬之助勝秀と改めた。

続く。

秘伝、一の太刀、巨星墜つ…（１）

一つの位とて天の時なり　一つの太刀とて地の利なり　天地両儀を合比し　一の太刀にて人物の巧みに結要とす
当道心理の決徳なり……

塚原卜伝が編み出した秘伝、一の太刀は、唯受一人の相伝とされていたが、実は、彼からこの秘伝を授かった武芸者は、世に三人いた……。

一人は、室町幕府第十三代征夷大將軍、足利義輝である。

彼が、三好長慶らに追われ近江へ逃げ込んでいた頃、ちょうど廻国修行で彼の地を訪れた塚原卜伝は、琵琶湖のほとり堅田でこれに謁見した。義輝は、歴代將軍の中でも特に武芸に秀でた人物であったので、卜伝の来訪にはいたく喜び、そのまま請うて新当流の弟子となつてしまった。

熱心に修練する義輝の熱意に心打たれたのか、卜伝は、遂に秘伝一の太刀をも彼に授けたのである。

しかし、

永禄八年立夏。

三好長慶の死により権力を取り戻しつつあった將軍義輝であったが、野心あふれる松永久秀や三好三人衆らの手により京都二条御所で敢えなく討ち取られてしまった……。

彼は、押し寄せる松永、三好の軍勢に対し僅かな手勢で果敢に立ち向かい、あらかじめ畳に突き立てておいた秘蔵の名刀数十本を、取り替え引き替えに振るつては群がる敵兵を斬つて捨てた。しかし、遂には障子戸の下に押し込められた上から長槍で突かれ首を獲られてしまったのである。

武芸を愛した希代の英傑の、壮絶な最期であつた……。

いま一人、ト伝から一の太刀を相伝された者がいる。

伊勢国司、北畠具教である。

彼も義輝同様に武芸を好み、廻国修行の武芸者などを招き入れてはその教えを受けていた。そして多分に洩れず、彼もまた剣聖塚原ト伝の噂を聞き及び、領内に邸宅まで設けてこれを歓待し、その薫陶を受けたのである。

すでに新陰流の奥義に達していた具教は、最後にト伝より秘伝一の太刀を授かる事ができたのであつた。

しかし、彼もまた遠からぬ未来に非業の死を遂げる事となるのだが……。

そして、一の太刀を授かつた最後の一人が、松岡兵庫助則方であつた……。

「義父^{ちち}上は、元氣でおわしょうな？」

家人の案内ですでに客間に通されていた彦四郎は、松岡兵庫助の顔を見るなりそう聞いてきた。

「……やつと熱も引き、さきほど重湯を一椀お召し上がりになつたところですよ」

「おお、そうか。それはなによりじゃ」

彦四郎は、えらの張つた顎^{あご}をずいと突き出して、肉厚の薄い唇で神経質そうな笑みを湛えた。しかし、彼の目の奥が全く笑っていないのを兵庫助は見てとつた……。

塚原ト伝には、妻が若くして世を去つたために子が無かつた。

そのため親族である塚原義重から、跡継ぎとして養子に迎え入れたのがこの彦四郎幹重である。生来、利発な子供だった彼は、ト伝が注ぎこむ愛情と心血のすべてを一身に受けて育ったが、ついぞ、一の太刀だけは今以て伝授されていなかった……。

「薬師の見立てでは、ただ風邪を拗らせただけで、しかと養生さえすれば間を置かずに本復されるとのことです……。如何せん入道殿も、もうあの御年齢ですからなあ……」

松岡兵庫助は、陽に焼けた相好を崩し、屈託のない笑顔を投げかける。ト伝は、この実直な愛弟子をまるで小姓のように側に置き、生涯手放さなかった。

「兵庫よ……。おぬしには苦勞をかけて済まないと思っておる。わしとしては是非にも義父上を塚原の館に引き取りたいのじゃが……。、
がんとして首を縦に振らん。年齢を取ると頑固になつて困るわい」
「……老いた身なれば、賑やかな場所が幾分煩わしく感じられるの
でしょう。そこへいくと、ここは田舎ですから……」

塚原ト伝は、今年すでに八十二歳……。音に聞こえた日の本一の
武芸者もさすがに寄る年波には勝てず、今では吉川道場で教える事
もなく、昨年の秋頃よりは、松岡兵庫助の屋敷に引きこもっていた。
近頃は体力もめつきり落ちて、すぐに風邪を引いては寝込んだりし
ていた……。

「ところで兵庫……。暗夜軒が下妻高道祖の陣を払った後、突然わ
しの城を訪れてな……」

「ほう……」

兵庫助は、濃い眉をぴくんと跳ね上げた。

「修理太夫を討つために、何とか義父上より一の太刀の秘伝を授か
りたいと申しておるのじゃ……」

「……」

修理太夫というのは下妻城主多賀谷重経の事で、この頃、真壁暗夜軒はこの多賀谷氏と領地をめぐって小競り合いを繰り返していた。そして、この修理太夫もまた暗夜軒に負けず劣らずの剛の者であったのだ……。

「暗夜軒には、すでに入道殿より秘剣、霞の太刀が相伝かすみされておるはず。このうえ一の太刀まで欲するとは……」

松岡兵庫助は、真壁暗夜軒の鷹のように獰猛な風貌を思い出し眉根を寄せた。

暗夜軒の剣技の冴えは、新当流門中でも諸岡一羽斎と並び立つほどの精妙さを誇っており、ト伝の実質的な後継者の一人と目もくされていたほどであった。

しかし彼は、塚原ト伝の新当流に見切りを付けた。

そして、自ら編み出した一剣をもって霞神道流なる新たな流派を打ち立てたのだ。

暗夜軒の霞神道流は、言うなれば殺人刀。せつにんとつ疾風の速さで先の先を取り有無を言わずに斬り伏せる、神速をたのんでの金剛力剣であった……。

「暗夜軒は、もはや師を捨てたも同然の男……。万が一にも更なる教えを受ける事は叶わぬでしょうな……」

兵庫助がそこまで言いかけたとき、ささやかな酒肴が運ばれてきて、この話はいったん打ち切りとなった。彦四郎は兵庫助と僅かな時間を談笑して過ごしただけで、日の暮れる前にそそくさと辞去し塚原の館へ帰っていった……。

「ふん……………」

彦四郎が帰るのと入れ替わるように、塚原ト伝が乾いた咳せきの音を立てながらやって来て、兵庫助の前にその老いた瘦軀をどつしりと落ち着けた。

「あやつ、暗夜軒をダシに使いおつて……………」

時折、激しく咳き込むが、顔の色も良く、堂々とした居住まいで脇息にもたれる姿は、在りし日の剣豪としての姿を彷彿させていた。それに、年老いても修羅を見続けた双眸だけは、やはりただならぬ鋭い輝きを放っているのである……………。

「…………… 本當に一の太刀を欲しているのは、他ならぬ彦四郎…………… あやつ自身なのによ。やつは儂がくたばってからでは、もはや相伝を受けれぬものと焦っておるのじやろう……………。ふふふ……………、相変わらずの推参者めが」

「彦四郎殿には、もはや相伝は叶いませぬか……………？」

「他ならぬ一の太刀を修めたおぬしならば分かつておるはずじゃ……………。一の太刀は心の一法 邪な虚栄心をもつて剣名を高めようとする輩には、決して理解できぬものじや」

松岡兵庫助は、いくらか憂い顔になると腕を組み考え込んでいたが、不意に思い出したようにト伝に言つた。

「ところで、主馬之助も近頃ではなかなか力をつけておる様子。ト部うべ吉川の道場では、すでに誰一人として彼には齒が立たぬと聞きました。そろそろ、新当流の免許をお与えになつては如何かと……………」

主馬之助の名を聞いた途端、ト伝の顔が凜いだ海原のように穏やかになった。

「…………… 主馬か。 元気にいたしておるか……………」

ト伝は、何やら遠い目になって、斎藤主馬之助の丸い童顔を思い

浮かべた……。

「不思議なやつよ……。あやつには一切の邪念がない。あのように湖面に映る月影のごとく心の澄み渡った人間を、僕は今まで見た事がないぞ……。生まれながらに剣の妙奥を悟っているも同然の男じゃ……」

「それでは、然るべき日取りを決め印可状を伝授いたしましょう」
「……………いや、待て」

満面の笑みを浮かべた兵庫助を、ト伝がうち沈んだ声で制した。そして、深い溜息の後にこう続けた……。

「僕は、今では……あの者を弟子にした事を後悔しておるのじゃ……。赤児のように無垢な心を持ったまま剣の奥義に達すれば、やがては要らざる争いに巻き込まれ若い命を失う事になるじやろう。」

光源院様も、なまじ兵法など修めたばかりにあのような御最期を……。多芸御所^{たきごしょ}とて、今は逼塞^{ひっそく}しておられるが、あの御気性では、いずれ織田天魔王に抗い武門の誇りに殉じられるのが目に見えておる……………」

ト伝は、腕を組んだままそつと目を瞑った……。兵庫助は、その老いた師の姿が、まるで草蜻蛉^{くさかげろう}のごとく影の薄いことに初めて気付いた……。

ちなみに、光源院とは將軍足利義輝、多芸御所とは北畠具教の事で、どちらもト伝から新当流の奥義を授かっている。彼らは、武芸を極めたが故に、己に降りかかる災難に真正面からぶつかり身を危うくしていた。そして、その事にト伝は少なからず責任を感じていたのである。

ややあつて、ト伝は諦めにも似た笑みを作つてこつ言つた。
「主馬之助には、今しばらく免許を与えずにおこつ。恐らく、その
方がやつの為になる……………」

続く。

秘伝、一の太刀、巨星墜つ……（２）

「ひいつ」

若い女の悲鳴が途中で遮られるのを聞いた。

炎天下である。

深閑とした岨道である……。

笹藪が放つ草いきれと、そそり立つ針葉樹の梢を掠める木漏れ日とが、主馬之助の日焼けした丸い頬に玉の汗を誘っていた。不審な声に立ち止まった彼は、担いでいた柴の束ね木を降ろし、きよろきよろと辺りを見回しながら額の汗を拭った……。

斎藤主馬之助は、今年で二十歳。

六尺を越える堂々とした体躯に反して、精悍さの欠ける丸く人懐こい顔をしていた。しかし、飴色に焼けた肩や腕には引き締まった筋肉が張り、一分の隙もない所作と相まって、かなり武芸に長じた若者である事が分かる。

「や、止め………」

今度も、はつきりと聞こえた。泣き声の混ざった、切迫した女の声である。

主馬之助は、山袴の股立ちを取り、腰に差した刀の柄つかに右手を添えたまま、猫のように背を丸めて、女の声が聞こえてくる笹藪にそっと分け入った……。

はたして、そこには仙人達そまびとが束の間に使っていたらしい、崩れかけた小さな藁屋根わらの小屋があった。

その側には、死体が二つ……………。

いずれも粗末な麻の単衣を腰縄で結んでおり、一見して近在の百姓と分かる。おそらく夫婦であろう、その老いた男女の顔には恐怖の表情が貼り付き、己の血飛沫が点々と散りばめられて、この上もなく凄惨を極めていた。その脇には、山菜や薪にする雑木の枝が入った竹籠が、中身を撒き散らしながら転がっていた……。

主馬之助は、足音を忍ばせながら小屋に近づいた。中からは、押し殺したような男達の笑い声が漏れ聞こえる……。

明かり取りの小さな窓からそつと中を覗くと、男が三人……………。そして、女が一人いた。

男達は、みな尾羽打ち枯らしたような浪人風の出立ちだが、厳ついであい体つきの歴とした侍であった。女は殺された老夫婦の娘であろう、衣服を剥ぎ取られた姿で、土間に敷いた筵むしろの上に仰向けに押さえつけられていた……。

主馬之助は、まず男達の武器を目で探った。

女の頭の方に座って両肩を押さえつけている男と、女の口を塞ぎながら空いた方の手で乳房を弄んでいる男は、どちらも用心深く左の脇に野太刀風の長い刀を置いていた。

あとの一人は全裸で、少し離れた場所に脱ぎ捨てた袴と一緒に刀をうち捨てている。彼は、女の太腿を両脇に抱え込み、なかば覆い被さるようにして激しく腰を振っていた……。

主馬之助は考えた……。

不用意に斬り込めば、女まで傷つけてしまう可能性がある。ここは、なんとか外へ誘い出して……。しかし、相手がかなりの使い手だった場合、三人に囲まれて戦うのは危険すぎる。勝てるか……？ やはりここは、いきなり踏み込んで奇襲をかけた方が……。

…。

駄目である。

不毛である。

主馬之助は、考える事が何よりも苦手なのであった……。

その時、不意に女と目が合った。恐怖の為にくると宙を彷徨っていた女の視線が、真つ赤に濡れながら主馬之助の双眸をはたと射たのである。女が目を大きく見開く……。

見られたっ！

刹那、主馬之助の身体は、獲物を襲う虎のごとき獰猛さで小屋の中に飛び込んでいた。そして、男達に瞬きする間も与えず腰の佩刀を抜き放った！ 主馬之助の内なる本能が、無意識にその五体をつき動かしたのである。

女を犯していた男は、すでに昇りつめて上ずった咆哮を漏らしていたが、その首元に白刃が一閃するや、頭部が恍惚の表情を保ったまま宙を飛び、壁にぶち当たってごとりと土間に転がった。同時に首を失った体が仰け^の反って倒れ、まず白い液を放ってから、次いで赤い液が大量に土間を濡らしていった……。

残った二人は啞然としたが、しかしそれは一瞬の事で、すぐに側らの太刀を引きつけると獣のような叫び声を上げて身を躍らせた。

主馬之助は、血濡れた抜き身を引つ提げたまま小屋を飛び出していった。そして、足場の良さそうな場所を見つけるとぐつと腰を据えて剣を構える。ざざつと駆け寄ってきた二人の男は、主馬之助の前後にそれぞれ五、六間の間合いをとって腰を捻りながら抜刀した……。

初夏の陽射しに、三本の刃がギリリと鋭い反射光を放つ。遙か上の方で鳥が一斉に羽ばたいた……。

「何者だ、貴様……？」

「お前^めらなんぞに名乗りたくね」

「ふん……若造が。手足を一本ずつ順番に斬り落としてくれるわ」
「返り討ちだつぺ！」

主馬之助は、後ろ足を大きく引いて偏^{ひと}え身となり、腰をぐつと落として踏ん張った。どちらから敵が仕掛けて来ても即座に応じる事が出来るように、太刀を車に構える……。

正面の男は、幾分腰が引けており、視線も定まらず、まるで蠅が飛ぶように切っ先がゆらゆらと遊んでいた。あまり剣術の心得がない者とみえる。

一方、主馬之助の後方で太刀を上段に振りかぶる男は、腰を臼のようにどっしりと据え、隙のない美事な構えを見せている。爬虫類のように感情の通っていない目は、戦場で人を斬り慣れている証だ。かなり遣う事はまちがいない……。

主馬之助は、取りあえず正面の敵から先に片付けてしまふ事に決めた。

彼は、引き絞った弓から放たれた矢のように、熊笹の葉擦れを蹴散らして一気に敵に駆け寄った。

「ひっ！」

血刀を引っ提げて迫り来る主馬之助の迫力に色を失った男は、悲鳴にも似た掛け声を絞り出しながら三尺余の剛刀を力任せに振り降ろした。

がっという音がした。

それは、男の振るった太刀の切っ先が地面にめり込んだ音であり、また、主馬之助の難^ないだ太刀が男の胴を両断した音でもあった……。男の死骸は、上半身と下半身が折り重なるようにして地面にどさりと横たわった……。

「貴様……………剣はだれに教わった？」

残る一人が、油断無く主馬之助に歩み寄りながら尋ねる。

「お前は、どーせ死ぬ事ながら教せーてやっぺよ」

そう言つて、主馬之助は剣を八相に構え直すと、怒濤のごとく男に詰め寄った。

「よく聞け 俺の師匠は、土佐入道様だっ！」

「な、何と！ 塚原卜伝の門人か……………」

男は狼狽の色を見せながらも、間境いを越えて突っ込んでくる主馬之助に対し、剛刀を車に回して水平に一閃する。びゅんと刃が鳴り太刀が虚空を斬った……。

「何っ！？」

男の前から主馬之助の姿が消えていた……。

そして、彼が天空を見上げた時には、太陽を黒く遮った主馬之助の姿が眼前に迫っていたのだ。

「あ……………」

次の瞬間、一直線に振り下ろした太刀が男の頭部にめり込んだ！血煙が舞い、後頭部から生えた剣先に勢いよく降り注ぐ……。

「ぐうえ……………」

男の鼻から血が噴き出し、二つの眼球が飛び出してだらんとぶら下がった。

「こいは、えれえ事すた」

刀身が男の頭部に飲み込まれて、主馬之助はいささか狼狽した。

彼は、男の顔面に足を掛けて思いっきり剣を引き抜いた。

「痛でっ」

二人は、反対方向に転がった。

主馬之助は、剣を握ったまま勢いよく尻餅をつき、男は頭から脳漿と血の雨を撒き散らしながら仰向けにひっくり返った。

「ふう……………」

主馬之助は、尻に付いた土を叩きながら立ち上がると、倒れている男の衣服で刀身を汚す血と脂を丁寧に拭いた。

「……………あーたら血い出っちゃあ、知んねがった」

女は、両親の亡骸に突っ伏して泣きじゃくっていたが、やがて落ち着くと主馬之助に礼を述べ、人を呼びに村へ帰っていった……。

それを見送ったあと暫くしてから、不意に主馬之助はその場にうずくまった。

そして、胃の腑がひっくり返るほどに吐いた。

彼は、今日初めて人を斬ったのであった……………。

続く。

秘伝、一の太刀、巨星墜つ……(3)

斎藤主馬之助が修行の旅に出る決意をして、恩師塚原卜伝のもとを訪れたのは、筑波山にもそろそろ牡鹿の鳴く声が聞こえ始めた、爽涼と晴れ渡る清秋の昼下がりであつた。

客間に通された主馬之助の前に姿を現した卜伝は、十年一日のことき飄々乎とした姿でどっかりと腰を下ろし、屈託のない笑顔をこの若い愛弟子向けた。

「しばらくぶりであつたな……」

「ご、ご無沙汰いたして、も、も、申し訳ございません」

「うむ」

主馬之助は、ト伝が病に臥せっていると聞いていたので、意外にかくごやくも豊鑠とした彼の姿を見てほっと胸を撫で下ろした。

「どうじゃ……、おぬしの方は変わらないか？」

「はい。相変わらずの、ぶ、ぶ、不調法者ですが……ははは」

主馬之助は、幼少より緊張すると咄嗟に言葉の出ない質であつた。とくに、偉い人や若い女性の前では、大事な場面で流暢に話せた例ためしがない。

「じ、じつは、お、お、お、お願いの儀が、ご、ご、ご、ごぞいまして

「……」

ト伝が腕を組んでうつと目を細めると、主馬之助は、丸い顔に冷や汗を滴らせながらもじもじし始めた……。

「はっはっは！ おぬしは、器用な人間じゃ。喋らずとも全てを顔で語ることが出来る」

「……え？」

ト伝は、呵々大笑した後、急に真顔になり主馬之助を見据えた。

「おぬし、旅に出たいのであろう？」

主馬之助は、ひれ伏した。

「お、お許しくださりますか！？」

ト伝は、ぱんぱんと手を二回打った。

奥の障子戸がかりりと開くと、そこには、悠然と端座した松岡兵庫助の姿があつた。若い郎従が一人、兵庫助の手から立派な拵こしらへの太刀を押し戴くと、するするとト伝の前に進み出て、その黒鞆くろたぬの一振りを恭しく捧げた……。

「主馬……」

ト伝老師は、受け取った太刀を主馬之助の前にくいと突き出した。

「儂せんべつからの餞別せんべつじゃ。受け取るがよい」

「ええっ！？」

それは、塚原ト伝が秘蔵の名刀、備州長船左衛門尉兼光かねみつの三尺五寸であつた。

「こ、こ、こ、これを私に………？」

「精進いたせよ」

「あ、あ、有り難き……」

恐懼感激きょうくかんげきした主馬之助がそこまで言い掛けた時、塚原ト伝は、すつくと立ち上がった。

「主馬之助、その太刀を持って庭に下りよ！」

「は、はいっ」

ト伝老師は、気軽な身ごなしで濡れ縁から雪駄を突っかけて庭へ降り立った。それを見守るように松岡兵庫助が縁側にどっしりと腰

を下ろす。

主馬之助は、足袋^{たびはだし}跣足のまま、小走りで綺麗^{ほうきめ}に箆^{へら}目の付いた庭に駆け下りた。

「抜いてみるがよい」

「はい」

主馬之助は、黒漆塗りの立派な鞘から、重たい厚重ねの刀身をぞろりと引き抜いた。美事に沸^{にえ}の浮き立つ乱刃の地紋が、斜陽を鋭く反射してきらりと神々しい閃光を放った……。

備州兼光は、数ある備前刀の中でも特に雄壮な作風で知られている。なかでも、この初代小笠原兼光は、上杉謙信をはじめ多くの戦国武将が愛した希代の名刀で、乱世の鬼を滅ぼすための降魔剣であった。

主馬之助は、思わず感嘆の声を漏らした……。

刀身に梵字が彫られている。

オン マリシエイ ソワカ

摩利支天^{まりしてん}の真言である。

陽炎^{かげろう}の化身である軍神摩利支天の加護を得れば、降り懸かる災厄から身を守り戦いに勝利できるとされていた。

主馬之助は、鞘を郎従に預けると姿勢を改め、長刀を高々と振りかぶり渾身の力を込めて一気に振り下ろした。ぶうんと刃風が唸り、残身をとる主馬之助の太い腕に見る見る鳥肌が浮き上がった……。

「す、す、凄い刀だ……」

そんな様子を見て、ト伝がにやりと笑う……。
次の瞬間、彼はたと地を蹴って五尺ほども飛び上がり、頭上に

張り出した柿の枝から朱く熟した実を両手でもぎ取った。主馬之助が啞然とするほどの、天狗のごとき身軽さである。軽やかに着地したト伝は、両手に握られた柿の実を見て満足そうに微笑みながら言った。

「主馬、この柿を斬ってみよ」

ト伝が手にした実の一つを、主馬之助に向かって放り投げた。

主馬之助は、たたつと二、三步前に踏み出して「えいつ」という気合いとともに腰を捻って太刀を水平に薙いだ。きれいに真ん中から両断された柿の実は、その瑞々しさ^{みずみず}を損なうことなくぽとりと白砂の上に落ちた。鮮やかな手並みである……。

「うむ……」

ト伝は、満足そうに力強く頷いた。三尺五寸の長刀を自在に操る手練は、主馬之助の並々ならぬ臂力^{じりよく}と技倆とを示している。

「主馬よ……………」

「はい」

塚原ト伝は、主馬之助が今まで見た事もないような穏やかな笑顔で言った。

「儂の最後の頼みじゃ。今一度、この柿の実を斬ってはくれぬか……………」

「……お、お、仰せとあらば」

主馬之助が訝しんで首を捻ったその時である。

突如、ト伝の顔が鬼の形相となった！

「兵庫！」

「はっ」

計ったように、縁側に片膝立てた松岡兵庫助が、ト伝と主馬之助を隔てる地面に数十個の撒き菱^{まきひし}を放った。

な、何！？

主馬之助は、驚愕した。

撒き菱というのは、忍者が逃走するときに追っ手の足を止めるために地面に散蒔く物で、八方に荊の突き出した鍛鉄製の武器である。まともに踏み抜けば、鋭利な荊は足の甲を簡単に突き破ってしまうのだ。

今、ト伝と主馬之助を結ぶ五間ほどの道程は、凶暴な鉄の荊がまんべんなく生える針地獄と化していた。

しかしさらに兵庫助は、それとは別に数十個の撒き菱を中空へ勢いよく放っていた。飛び立った椋鳥の群のように空高く舞い上がった無数の黒い塊は、やがてその重力を取り戻し、尖った鉄の雨となつて主馬之助の前面に降り注ぎ始めた……。

「あ……………」

いつの間にか、その黒い雨の中に朱い実一つ……………。

ト伝老師は、無数の針を踏み越え、さらに天より降り注ぐ鉄の雨をもかい潜りながら、見事、柿の実を両断して見せよというのである。いかな剣術の達人であろうとも、柿の実が地面に落下するまでの僅かな合間に、足下の撒き菱を^{まきひし}除けながら間合いを詰め、なおかつ上から降り注ぐ撒き菱を除けながら、その実を斬る事は不可能である。

主馬之助の顔は、恐怖と緊張で強ばった。

ど、どうしょ？

しかし、すぐにその丸い頬に笑窪が浮かんだ。細い目がさらに糸のように細くなる……。

考げえても無駄だだよ。俺あ、柿の実さあ斬っちゃあ！

主馬之助は、^{はら}肚を括ると瞬時に意識を集中させた。

オン マリシエイ ソワカ
無意識に心の中で摩利支天の真言を唱える。

次の瞬間、不思議な事が起こった。時間の流れが徐々に遅緩し始めたのである。降り注ぐ重たい鉄の塊は、まるで風に舞う枯れ葉のようにゆっくりと落下し始めた……。

次に、彼の視界から、朱い柿の実以外の一切が消え去った。耳には、微かな葉擦れの音……小鳥の囀り……やがて五感がその機能を失い、入れ替わるように研ぎ澄まされた第六感とでもいべき新たな感覚が主馬之助を支配した……………。

見える！

彼は何の躊躇ためらいもなくその過酷な試練の中に身を投じた。手に取るように天と地が同時に見える。彼は、地面に転がる撒き菱の間を巧みに縫い、眼前を掠める黒い塊を間一髪で躲しながら、一直線に朱い実へ駆け寄った。

「やあつ！」

白刃がぎらり閃き、備前兼光の重たい刀身が確かな手応えを伝えながら風を切り裂く！

すべては、一瞬の出来事である。

一呼吸おいて、重たい鉄の塊がばたと地面を打った……と同時に、主馬之助の意識の中で、再び時間が正常に流れ始めた。

やがて、取り戻した静寂のなか、前栽に咲く竜胆そらぎの側らで添水の青竹が、こーんと澄んだ響きを湛えながら水飛沫を跳ね上げた。

「……………」

主馬之助は、身に一分の傷を負うこともなく柿の実を斬ったので

ある。

ト伝老師の足下には、綺麗に両断された朱い果実が、その切断面を艶やかに光らせながら転がっていた……。

「美事じゃ！」

「お見事でござる！」

我知らず、塚原ト伝と松岡兵庫助が、同時に叫んだ。

「主馬之助よ……。この世で唯一最強の剣技とは、何者をも恐れず、何物にも拘らず、無心に振り抜く太刀のその純粹な一閃の中にこそ存在するのだ。今、お前が見せた太刀筋、生涯忘れる事のないように深く刻み留めるがよい」

「はい」

ト伝老師は、庭の飛び石を伝って縁側に上がると、主馬之助に向き直り厳かに言った。

「口伝いたす」

主馬之助は、慌てて彼の前に駆け寄り、膝を揃えてかしこまった……。

「一つの位、一つの太刀」

「おっ！」

驚きの声を漏らした松岡兵庫助がゆつくりとト伝の側らに歩み寄り、神妙な面持ちで座り直した。ぐつと主馬之助を見据えるその厳しい瞳は、満足げな笑みを含んでいる……。

「一つ太刀、かくのごとく三段に見分けそうろう。第一は天の時。第二は地の利。人の和と工夫により天地合して第三至極、これを以てすなわち一つ太刀と致すなり……」

言い終えた後、ト伝が鋭い視線を主馬之助に落とす。

「以上、秘伝ゆえ一切の他言を禁ず。書き留める事も禁じる。以後、唯受一人の口伝を以ておのが道統と致すのじゃ」

「ははっ」

主馬之助は、平伏した。

しかし、悲しいかな……彼には老師が何を言っているのか、さっぱり分からなかったのである……………。

再び顔を上げた主馬之助は、すっかり肩の荷を下ろしたト伝老師の安堵しきった表情を見る事が出来た。

しかし、その安らかな顔を見た瞬間に主馬之助は、はっとして息を呑んだ……。彼が見上げた老師の姿は、後ろの景色が透けて見えるほどに影が薄くなっていたのである……………。

我知らず、主馬之助の頬に涙が伝った……………。

「うん……………？ おぬし、なぜ泣く」

剣聖、塚原ト伝がその波乱に満ちた八十二年の生涯を閉じたのは、翌、元龜二年の春半ば、早咲きの桜の花びらがやや恥じらいながらも白い顔を覗かせ始めた、風薫る晴天、暖かい昼下がりの事であった……………。

続く。

おゆう登場！〜比売神の化身（１）

涼しげな水音が聞こえる……。

蛇行する平川が、紅葉を浮かべた清流を湛えつつ、すぐ側まで迫り出していた。

この川を渡ると太田道灌の造った江戸城とその城下町を眺望できるが、ここは、昼間でも薄暗い鬱蒼としたブナの林である。時折、下闇に鳥獣の奇声がこだまするほかは、色づいた梢を秋風がさやかと揺らす葉擦れの音と、消え入るようなひぐらしの声が聞こえるばかりであった。

樹間を縫って射し込む秋の陽射しが、大地に降り積もった黄葉の絨毯を温める。その日溜まりの上に身を投げ出し、木の根を枕に大軒をかくのは、旅装の若武者、斎藤主馬之助であった……。

日焼けした丸顔の側らに、はらはらと落ち葉が舞い散る。その鼻先を赤トンボがついと掠めた……。

彼は、松岡兵庫助の館を発った後、恩師塚原卜伝の勧めに従い一路、鎌倉を目指していた。

鎌倉は、侍の都である。

鶴岡八幡宮には、河内源氏の氏神である八幡大菩薩が祀られている。そして、この武神の功德にあやかうと、多くの武将や兵法者が戦勝もしくは武芸上達を祈願するため参詣に訪れるのである。

中には、腕の立つ武芸者もいるであろうし、しかるべき武将の目に留まれば、仕官の道なども開けようというものである。

剣で身を立てようという若者にとって、これほどお誂え向きの修行場所はなかった。

しかし、当の主馬之助に武者修行をするという緊張感はあまり無い。もともと彼は、兵法者として名を成そうとか、高家や有力武將に腕を売り込み仕官にありつこうなどという野望は、毛の先ほども持ち合わせていなかったたのである。

只々、広い世界を旅してみたかったのだ。

鹿島の吉川道場を訪れる旅の武者から聞いた、京の都をはじめとする遠国の見聞が、主馬之助の少年のような冒険心をくすぐり続けていた。

今、ようやく念願叶って、その旅の空を仰いでいる。

二十歳の主馬之助にとって、初めて見る他所の景色は、少年が見る夢の続きであつた……。

この無垢で脳天気な男は、まだ知らないのである。

ひとたび剣術修行の道に足を踏み入れたなら、そこには、狐狸妖怪、魑魅魍魎が跋扈する^{ばつこ}とんでもない修羅の世界が広がっている事を……。

一瞬、身を切るような冷たい風が主馬之助の頬を叩いた。季節の変わり目には、突然こういう風が吹くものである。旨寝^{うまい}から引き戻された彼は、枝葉の合間を流れる白雲の眩しさに腫れぼつたい目^{しばた}を瞬きながら、がばつと身を起こした。

「……知らぬ間^まあに、すっかり睡^{ねむ}つちつた」

大口をあけて欠伸^{あくび}した主馬之助は、ぼんやりと霞む視界の中に、木の実を抱えた栗鼠^{りす}が忙しく横切るのを見て、丸い頬に例の笑窪を作って笑った……………。

その時である。

遠方より、次第に歌声が近づいてくるのを聞いた。

明らかに若い娘の……林立するブナの巨木に凜とこだまする玲瓏れいらうとした歌声がはつきりと聞こえる。

近くに山人の娘でも戯れているのかと耳を澄ませば、その高麗笛ねの音にも似た美声は、こんな詩うたを歌っていた……。

袖ふれてえ 千世や 経ぬべき 今朝さらにい 今朝さらにい
山路の秋を 霜の白菊う 霜の白菊う

主馬之助は、樹間に目を凝らしてそれらしい人影を捜したが、陽を遮って薄暗いブナ林に動くものはない。

訝しんで、彼はのろのろと立ち上がった……。

やがて、その澄んだ歌声がいよいよ近くまで迫ったとき、彼はぎよつとなった。歌は、明らかに見上げるほど高い樹上より聞こえているのである。しかも、凄い速さで木から木へと移りながら主馬之助のいる辺りを目指していた……。

立よりてえ 聞くにも 千世や 仙人のお 仙人のお 道をここに
らに 真鶴の声え 真鶴の声え

……今、歌声の主は、主馬之助の真上にいる。

彼は、呆けたように天を見上げた……。

主馬之助が背にするブナの老木は、その枝葉を笠のように広げながら風にそよいでいるが、もちろん人が身を隠せるような場所はない。その姿無き歌声は、妙音楽天の調べかと思えるほど美しく琅琅らんらんと彼の耳にとどくばかりであった……。

歌が止んだ……。

と、同時に主馬之助の首筋に、ちくりと痛みが走った。

彼が目だけを動かして見ると、いつの間にか喉元に懐剣の刃がぴたりと押し当てられている。背後から細く白い腕が主馬之助の首に巻き付き、甘い息づかいがぼんの窪あたりに吹きかけられる……。

塚原ト伝の弟子ならば、懐剣を打ち落とし、細腕をねじ上げて背後にいる者を取り押さえられそうなものであるが、しかし、彼は全く動けなかった……。

自分が僅かでも動いたならば、即座にその首は掻き切られ、落ち葉を大量の血が濡らすであろう事を肌で感じていたのだ。

こいつは、ただ者でねえ……。

主馬之助のこめかみに冷たい汗が伝う……。

背後から、あの玲瓏たる娘の声がこう言った。

「……おまえ、……伊豆者か？」

「い、い、いず……もの……？」

伊豆者が何なのか主馬之助には分からなかったが、どうやら人違いで殺されかけている事だけは間違いない。彼がごくりと固唾を飲み込むと、上下した喉仏に刃が触れて皮膚が浅く切れた。

「……その愚鈍そうな振る舞いは、世を謀るための偽りの姿か？」

「……おまえ、どこの乱波だ？」

愚鈍と言われ、主馬之助は少なからず傷ついたが、ここは事を荒立てずに一刻も早く誤解を解くことが先決である。

「お、お、俺あ、乱波なんかでねえ。……さ、斎藤主馬之助といっ

で、廻国修行の者だっぺ」

「廻国修行……？ おまえが……か……？」

首に懐剣を当てる力が少し弱まったが、しかし、彼女の声は油断

なく言つた。

「とても修行している兵法者には見えんぞ。偽りではなかるうな？」

「お、お、俺って、そんなに愚鈍に見えるかい……？」

「ああ、見えるね。それが本性だったら大戯け者さ……。ここは、忍びの者しか使わない間道なんだ。もう、いい加減に觀念して、さつさと化けの皮を剥がしちまいな」

主馬之助は、泣き笑いの表情になつて言つた。

「そーたと言われても困っちゃーど……。嘘ちくぬいでねえ、俺あ、旅の兵法者だあ……」

ややあつて、娘は軽く溜息をついた。

「どうやら嘘を言っているわけではなさそうだな……。では、大戯けの兵法者に良い事を教えてやろう。もうすぐここに、おまえが百年修行しても絶対に勝てないような凄い連中がやって来る。生きて故郷に錦を飾りたいなら、今すぐここを立ち去れ。すぐにだぞ！」

それだけを一気に言つと、突然、後ろの娘は氣配を消した。主馬之助の首に当てられていた白刃はもうない。彼は、慌てて後ろを振り向いた。

「あ……」

主馬之助は、遙か後方にそびえるブナの大樹を、重力に逆らつて垂直に駆け上がる若い娘の姿を見た。それは一瞬の事であつたが、小袖の柄がはつきりと彼の目に焼き付いた。一度見たら忘れる事の出来ない、色鮮やかな紅色の辻が花染であつた……。

思わず、主馬之助の口から感嘆の声が漏れた……。

「か、………かつこいい」

もろ人もお 及ばぬきわや 清見かたあ 清見かたあ ゆるさぬ

関を　こゆる白雲お　こゆる白雲お

再び、天より降り注ぐ清らかな歌声が、八面玲瓏、深閑とする森にこだまして、主馬之助は、神を振り仰ぐ面持ちで娘が姿を消した辺りの樹上をぽかんと見上げた……。

やがて、娘が言ったとおり主馬之助が愚鈍である事が証明された。彼の後方に、忽然としてどす黒い九つの影が並んだのである。その殺気は凄まじく、振り向く前から主馬之助の頭髪は矜羯羅童子じんがらどうしさながらに逆立った。

えれえ事すた！　ちゃっちゃと逃げれば良かった。

九人の男達は、娘が忠告したとおり、明らかにただ者とは思えぬ風体をしていた。

全身を柿色に統一した上衣、袴、胴締め、手甲、脚絆で身を包み、広めの鍔が付いた二尺ほどの直刀を斜めに背負っている、いわゆる忍び装束であった。頭をすっぽりと包んだ強盗頭巾がんどうの隙間からは、野獣のように鋭い眼光が不気味に照り輝き、主馬之助の心臓を射竦いすくめた……。

乱波とは、こいづらの事か……？

居並んだ九人の中央にいる一人だけは、頭巾を被らずに己の面体を主馬之助に晒していた。長い白髪を荒縄で束ね、縮れた白髭が汚らしく垂れ下がっている。

彼は隻眼だった。

顔面左側の額から顎にかけて、ミミズが這うように縦長の太い刀疵が走り、半開きの白目を真っ直ぐ横切っているのだ。もう片方の開いている目は、死んだ魚眼のごとく虚ろな光を湛えながら不気味に淀んでいた。

どうやら、彼がこの九人の忍者の頭目らしい……。

樹上の歌声が止んだ。

と、同時に白髪の間目、節くれ立つた指で歌の聞こえていた辺りを差し示し、聞き取れない程の小声でなにか呟いた。途端に、強盗頭巾の手下のうち六人が跳躍し、猿のごとく枝から枝へ飛び移りながら樹上高く舞い上がった。がさがたと乱暴な音を立てて樹枝が揺れ動き、千切れた飛んだ枯れ葉が主馬之助の足下にはらはらと舞い散った……。

きつと、あの娘さあ狙ってるんだ！

主馬之助が慄然と成り行きを見守っていると、頭目の老人は、今度は、その主馬之助を指差して鋭く気合いを放った。

「殺^{ころ}つ！」

すかさず応じて身を躍らせた二人の手下は、主馬之助から七、八間の距離を保ちながら、左右に分かれて樹間を一気に駆け始めた。

獣のように迅い！

しかも、枯れ葉が敷き詰められているにも拘わらず、ほとんど足音を立てていなかった。それだけでも、彼らの並々ならぬ力量をうかがい知る事が出来るが、さらに強盗頭巾の忍者どもは、走りながらも樹影に入る度にいったん足を止めていた。この走り方は、敵の目を眩ますために忍びの者が使う高度な技術で、彼らの動きを目で追っている者が、一瞬その姿を見失う為、次第に彼らの位置を見誤ってしまうのだ。

主馬之助は、刀の柄に手を掛けたまま、腰を落として慎重に身構えた……。

途端に、左右から唸りをあげて手裏剣が飛び交い、彼の鼻先三寸のところを掠めた。主馬之助は知らなかったが、手裏剣の先にはトリカブトの毒が塗ってあり、肌に軽く傷を負っただけでも卒倒し、

悶絶してしまうのだ。

突っ立ってたら、殺られっど。

主馬之助は、猫のように背を丸めて樹間を縫いながら走り始めた。しかし、その間も数本の棒手裏剣が乱れ飛び、主馬之助の体を掠めては樹の幹に突き刺さる。彼は、なるべく樹の影に身を隠すように走るが、敵は巧みに回り込み死角を作らなかった。

主馬之助は、次第に追い詰められ、かわ躲しきれない手裏剣を、抜き打ちに鞘走らせた太刀で叩き落とした。

こいな事ことつては、良がんめよ。　ちゃっちやと斬ってしまわにゃあ……。

主馬之助は、作戦を変え、太刀を引つ提げたまま猛然と敵の一人に向かつて突き進んだ。

応じて敵は後退する。

手裏剣の間合いは、およそ七間から十間で、五間より内に入られた場合は、次の一撃で確実に仕留めなければ逆にやられてしまう。

三間まで迫られたら、もう手裏剣による反撃は不可能であった。

しかし、敵は主馬之助が走るのと同じ速度で後退するため、その距離は一向に縮まらない。しかも、前後からの手裏剣による攻撃は、手を休める事がなく、主馬之助はその度に足を踏ん張って太刀を振るわなければならなかった。忍者は、退くときも蟹のように横向きに走るため、走りながら反撃できるのだ。

主馬之助は、息を切らして立ち止まった。このままでは、埒がわからない。嘲るような、敵の含み笑いが聞こえた……。

その時。

頭上から、敵の死骸が降ってきた。続けざまに二体……。

地面に激しく叩き付けられた死骸は、その衝撃で首や手足が有らぬ方向へねじ曲がったが、落下する前から絶命していたらしく、兩名とも首に三日月のような切り口を開け、そこから真っ赤な血がほとばしっていた。

樹上では、どんな死闘が繰り広げられているのか、時折、生い茂った枝葉がざわざわと揺れ動き、短い悲鳴やくぐもった呻き声が漏れ聞こえるが、あの娘と忍びの男達の姿は、主馬之助の目では確認できなかった。

「ぐわっ！」

さらに一名、ばりばりと枝を鳴らしながら頭部から激しく地面に突っ込んで、大きく弾んだあと、顔面を背中にくっつけた不自然な姿勢で地面に転がった……。

主馬之助と戦っていた忍者達が舌打ちをする。

彼らの内の一人が樹上の仲間に加勢する為、身を躍らせてブナの樹幹を駆け上がった。残った一人が、それを目で追う……。ほんの一瞬の事であった……。

しかし、彼が再び視線を落としたときには、猛然と突進した主馬之助が、右肩に太刀を担いだまま斬撃の間合いまで迫っていたのだ。「何いっ!?!」

敵の忍者は、後ろへ跳ね飛ぶと同時に、素早く背中 of 忍者刀を抜き放った。しかし、主馬之助の踏み込みは、彼が予測したよりも遥かに大きく、また通常よりも長い三尺五寸の切っ先は、容易に忍者の手首に届いたのだ。

「ぎゃっ」

自ら振るった刀の勢いそのままに、忍者の手首が両断され、刀の柄を握ったままクルクルと宙を舞った。

主馬之助は、その時すでに無我の妙境に入り込んでいた。

敵の動きが手に取るように見える。

忍者は、すかさず残った方の手で苦無くないを握って身構えたが、白刃が閃くや、その腕も千切れ飛んで地面をてんと転がり、樹幹の影に消えた……。

たまらず片膝付いた忍者の首元を、ヒュンと切っ先が掠めた。あつと仰け反った敵の首から、水芸のように綺麗な軌跡を描いて赤い血が舞い上がった……。

彼がどさりと倒れ込むのと、樹上から新たな死骸が落ちてくるのが一緒だった……。

続く。

おゆう登場！～比売神の化身（2）

なうまく　さらばたたぎやていびやく　さらばぼっけいびやく
さらばた　たらた　せんだまかるしゃだ　けん　ぎゃきぎゃき　さ
らばびきんなん　うん　たらた　かん　まん

不動尊大咒は、またの名を火界の咒という。

三千世界、一切の衆生を浄化する猛焰を呼び起こす、究極の陀羅尼なのだ。

いま、隻眼を閉じて火界の咒を唱えている老人は、その身边に異様な殺気を孕んだまま白髪を逆立てていた。その、くぐもったような怨嗟の声はこの男の不気味な存在感と相まって、主馬之助の心と体を冷たく凍り付かせていた……。

陀羅尼の詠唱にともない、ブナ林の枯葉に横たわる全ての死体から一斉に黒煙と炎が立ち上った。中にはまだ息のある者もいたらしく、己の体が燃え上がると同時に細かい断末魔の呻きを漏らしていた……。

忍者は、己の死を悟ったとき、敵に面体を知られないよう顔面を壁に叩きつけて潰したり、懐剣で顔の皮を引き剥がしたりするのだが、そのような暇もなく死んだ者は、仲間がその体を燃やしたり爆破したりして処理をする。

いま、自分の手下どもの死体を鬼神の通力を用いて焼却している白髪の頭目は、長年、非情な忍びの世界を生き抜いてきただけあって、眉一つ動かすことなく淡々と咒を唱えていたが、さらに別の死体が樹上より落下した途端、一転して阿修羅の形相となった。

「……おのれ……駿河のくノ一めえ！」

頭目は、樹上を睨みつけて低く罵った後、背負っていた不思議な形の武器を手にした。

それは、硬い木材を削って造られた物で、真ん中からくの字に折れ曲がった木製の刃物であった。彼は、分厚い獣皮製の籠手でその奇妙な武器の先端を握ると、大きく振りかぶって一気に樹上へ投げ打った。件の武器は、しゅるしゅると刃風を立てて鋭く回転しながら樹枝を蹴散らし、あっという間に黄葉の生い茂るこずえの合間に消え去った。

「きゃ……」

鋭く短い悲鳴が聞こえた。

あの娘の声である。

樹上から彼女の死体が降ってこないところをみると致命傷は与えていないようだが、傷くらいは負わせたかもしれない。

主馬之助は、自分の目では確認出来ないほど遙か樹上高くで戦っている、あの娘の身を案じた。

しかし、次に彼は、不思議な光景を見た。

空高く放った件の武器が、目にも留まらぬ速さで回転しながら元来た軌道を辿り、忍者の頭目が左手に付ける獣皮の籠手へと戻ってきたのだ。どのような仕組みかは分からぬが、あのくの字に曲がった木製の刃物は、敵を斬り裂いた後、再び放った者の手元まで戻ってくるようであった。

帰ってきた武器を掴み取った頭目は、間髪入れずに再びそれを樹上に向けて放った。空気を切り裂きながら回転する音がブナの葉陰に吸い込まれる……。

「きゃあ！」

今度の悲鳴は、さつきよりもずっと切迫したものだった。

その絹を裂いたような娘の叫びを聞いた途端、主馬之助は、呪縛から解き放たれたようにその巨軀を躍らせた。

あの娘さあ、助けねば…。

彼は、片手に提げていた備前兼光の三尺五寸を八相に構え、枯葉が敷き詰められた地面を蹴立てて猛虎のごとく突進した。

一方、放った武器を再びその手の内に取り戻した忍者の頭目は、怒濤の勢いで迫り来る主馬之助の姿を視界の端に見留め、にやりと不遜な笑みを浮かべた。

次の瞬間、彼は、弾かれたように自らも主馬之助に向かって走り出したのである。

同時に、あのくの字に曲がった武器を主馬之助に狙いを定めて投げ打ち、さらに、腰から抜き放った太刀を地摺りに構えた。

急速に接近する二人……。

主馬之助は走りながら考えた。飛来する武器を払えば地摺りから跳ね上げる太刀で斬られ、下から襲う太刀を受ければ件の武器に容赦なく頭を打ち碎かれる……。

ど、どうすべ？

彼の心に一瞬、恐怖がよぎった。

……………その時である。突然、主馬之助の脳裏に塚原卜伝の声が甦った……。

ひとつの位とて天の時なり、ひとつの太刀とて地の利なり

そうか……。

主馬之助は、初めてその言葉の意味するところが分かったような気がした。

彼は、刀の柄を脇に引きつけると刃先を外側に向けて車に構えた。

と同時に、一切の邪念と恐怖を捨て去り心静かに意識を集中させていった……。

やがて、彼の心は次第に無我無明の境地へと入り込み、眼前に広がる景色が徐々に変貌し始めた。あの時と同じであった。老師より一の太刀の秘伝を授かったあの時と……………。

次第に時間の流れが遅緩し始める。

眼前に迫るあの回転する武器が、主馬之助の目には、その木目を確認できるほどゆつくりと鮮明に映り、同時に、地面すれすれを這う敵の切っ先も、その軌道が手に取るように分かった……。

見えるぞ

おん まりしえい そわか

備前兼光の刀身に彫られた摩利支天の真言が輝き始める……。

「やあつ！」

主馬之助は、回転する武器の僅かに下を間一髪でくぐり抜けざま、真一文字に一閃した太刀で、下から蛇のように跳ね上がったくる相手の手首を切断した。

斬った！

太刀を握ったままの相手の右手首が、血煙の向こう側に跳ね飛んだ。

「おのれえい！」

手首を失った忍者の頭目は、すれ違うと見せかけて身を翻し、蝙蝠こりのように羽ばたいて四、五間ほども大きく飛び退った。

「あつ！」

主馬之助の二の太刀は、むなしく空を切った。老人とは思えぬ、超人的な身のこなしである……。

主馬之助は、振り抜いた太刀を止め、ざんばら髪を躍らせて残心をとった。件の武器が彼の頭上を掠めたとき、黒髪を束ねていた革ひもを切り落としていたのである。

「くつくつく……。見事じゃ、若侍。褒めてやろう」

白髪の頭目は、充血した隻眼を吊り上げ、切断されて赤黒い血を垂れ流している右手首に左手の人差指と中指をかざした。そして、何やら呪のようなものを唱えると、途端に切断面がじゅっという音を立てて焼け焦げ、激しかった出血がぴたりと止まる。

彼は、主馬之助を見て蒼白な顔を歪めながらにやりと笑った……。

主馬之助は、忘れているのだ。

件の武器が、元来た軌道を引き返してくる事を……。

彼の後頭部を目掛け、しゆるしゆると不気味な音を立てて回転する木製の刃物がもの凄い速度で迫っていた。

ん……？

その凶暴な武器が主馬之助の頭を打ち砕かんとした瞬間、彼の後ろにあの娘が立ちはだかった。

「やつ！」

凜と響き渡る矢声。

件の武器は、真つ二つになって彼女の左右に飛び散った。

「……な、何だ？」

自分の身に迫っていた危機に初めて気付いた主馬之助が驚いて振り返ると、あの色鮮やかな辻が花染めの小袖を着た小さな背中が見えた。たくし上げて帯に挟んだ小袖のすそからはみ出した白い両足を踏ん張って、朱鞘の懐剣を前に突き出している。

間一髪で、娘に命を助けられたのだ。

主馬之助がほっと安堵の溜息を漏らすと、後ろでざくつと枯葉を

踏む音がした。あわてて振り返ると、あの忍者の頭目は忽然とその姿を消していたのであった……。

「あ、あれ……何処さ行つた？」

きよろきよろと辺りを見回す主馬之助であつたが、そこにはもう人の気配はなく、ただ天よりはらはらと舞い散る黄色い枯葉が、淡く木漏れ日を反射して薄暗い景觀に彩りを添えているばかりであつた……。

いかにして、一瞬の間に彼が消え去つたかは計り知れぬが、さきほど見せた身ごなしからすると、その驚異的な跳躍力をもつて一気に飛び去つたであろう事は想像に難くなかつた。

もしかすつど、俺あ……とんでもねえ化け物さ、相手にしてたんだなあ……。

茫然と立ち尽くす主馬之助の脇を通り抜けて、娘が忍者の頭目の立っていた辺りへ歩き出した。

「あ、あ、あの………」

何か言い掛ける主馬之助を無視して、娘はその場にしゃがみ込むと切断された手首を拾い上げた。そして、主馬之助にその枯れ木のような手首を見せながら、にんまり微笑んで言つた。

「おまえ、凄いな……。鳶加藤の手首、斬り落としちゃつたよ」

牡丹が咲いたように華やいだ笑顔だつた。主馬之助は、なんだか照れたような顔になつて頭をぐしゃぐしゃ掻きながら尋ねた。

「と、鳶加藤つて……？」

「へえ……おまえ鳶加藤を知らないのかい？」

娘は、いささか呆れ顔になつて説明を始めた……。

鳶加藤こと加藤段蔵は、幾多の戦国武将達を震撼させた希代の手練忍者である。

彼は、はじめ常陸を中心として関東一円に蟠踞した盗賊の親玉であつたが、同時に信州戸隠山で修験の道を極め、妖しげな幻術を披露しては人々を驚嘆させていた。

この噂を聞き及び、段蔵を雇い入りたいと望んだ武将は数多あつたが、彼がまず選んだのは越後の上杉輝虎（謙信）であつた。しかし輝虎は、加藤段蔵の並はずれた技倆と邪悪な精神を見て取るなり、この男を生かしておけば、いずれ自分の身にも厄が降りかかるだろうと、配下の武将に命じて謀殺を試みたのである。

これを看破してまんまと逃れた段蔵は、今度は甲斐へとおもむき上杉輝虎と敵対する武田信玄に己の腕を売り込んだ。しかし、ここでも段蔵は、信玄に恐れられ忌み嫌われてしまうのである……。

いつの世も、異能者、異端者は敬遠され迫害を受けるものだ。

段蔵の超人的な手練は、それを用いようとする戦国武将達にとつても両刃の剣だったのである。

結局、武田信玄の密命を受けた土屋昌次らの手によつて段蔵が闇討ちされたのは、昨年の秋の事であつた……。

この時、段蔵は秘術の限りを尽くして、何とか生き延びる事は出来たが、かわりに片目を失つてしまったのである。

爾来、彼は決まつた武将に仕える事を諦め、忍者狩りと称して、不特定の忍者を襲つては彼らが所持する情報を奪い取つていた。そして、その内容に関心のある戦国武将達に高値で売りつけていたのである……。

まさに、忍者が恐れる忍者……。闇を背負つた孤高の忍者というのが、鳶加藤の正体であつた……。

娘の話聞くうち、主馬之助の顔面が次第に蒼白になってきた。
おっとろしい者さあ、相手にしてたんだなあ……。

しかし、それに追い打ちをかけるように娘が言った。

「でも、おまえ……。この先ずうつとあの鳶加藤に命をつけ狙われるよ。あいつ、蛇のように執念深いから……」

主馬之助は、全身に氷水を浴びたような心地になり、ぶるると大きく身震いした。

「主馬之助……といったな。おまえは、どうせ長生きできないだろうから名乗ってしまうよ。あたしの名は、ゆうってんだ」

ゆうは、頬に付いた血を袖で拭いながら白い歯を見せて笑った……。

続く。

おゆう登場！〜比売神の化身（3）

「へえ……、おまえ、塚原卜伝の弟子だったのかい」

ゆうは、大して関心のなさそうな口調で呟きながら、懐剣の刃にこびり付いた穢れを丁寧な懐紙で拭っていた。主馬之助は、彼女の視線が自分に向けられていないのを良い事に、その美貌を、頭の天辺から足の爪先まで舐めるように見回してみた。

歳の頃は十四、五か……。

あの美声に負けず劣らずの豊麗優美な容姿は、ちょっと、この世のものとは思えないような神秘性をまとっていた……。

華奢な体つきや白く細い腕からは、とても、七人の忍者を葬り去ったとは想像できない。白いさらしの小袖に染め抜かれた紅い花模様は、青楼に戯れるあそび女のような妖艶さを連想させるが、しかし、その可憐な相貌には、未だ幼い面影が、春の山路に溶けきらぬ淡雪のごとくに残されていた……。

あれ……。どつがで会った事、あつたっげか……？

かみおとめ

神少女のごとき、ゆうの麗色を仰いで、主馬之助は、何故だか以前どこかで会ったような気がして首を傾げた……。

ゆうは、そんな主馬之助の視線には気付かずに話し続ける。

「……まあ、せいぜい命は大切にすることだ。命あつての物種と言うからな。いいか、良く聞け。勝負をするときは、確実に勝てそうな相手だけを選ぶんだぞ。間違つても、自分より強そうな奴と死合つては駄目だ……。名人なんて言われてるやつらは、みな、そうやって剣名を高めてきたんだから……」

主馬之助は、聞いていなかった。

そして、子供の頃、生家の近くに住んでいた小栗という名の寡婦かぶが、よく聞かせてくれた昔話を思い出していた……。

主馬之助は、自分が世に生まれ出ると引き替えに母親を失っていたので、近くに住む郷土の後家に乳を分けてもらっていた。その小栗という巫女あがりの女は、主馬之助が成長し、乳を離れてからもまるで自分の息子のように彼を可愛がり、そして色々な話を聞かせてくれた。

その中に、比売神の話があった……。

むかし、上総の國の海岸に、燦爛と光り輝く宝珠が波に運ばれ打ち上げられた。

それを見つけた三本足の朱い鴉かひすが三輪山へ持ち帰ったところ、宝珠は、山の神気に触れ、見るも美しい少女の姿となった。

あるとき、その少女が鴨川の清流に戯れていたところ、川上より火の神が変じた赤い矢が流れてきて一直線に少女の陰部ほとを突いた。すると、たちまち少女は懷妊し、やがて臨月を迎えた。

いよいよ出産のときを迎えると、折ふし神送りの風が恐しげに吹き荒れ、五色の雲が天空を騒ぐなか、産屋から発せられた眩い光の柱が轟音とともに板屋根を突き破り、産声とともに現れた雷神の化身が、火焰の衣をまとい、雲を焼き払いながら天空に駆け昇った。

これを見た人々は恐れ畏まりかしこ、神の子を産んだその美しい少女を比売神として奉拝したという……。

おおよそ、このような話であつた……。

主馬之助は、幼いころ聞かされたその話に出てくる比売神の姿を、何故だかずっと心の中に深く刻み留めていた。

そして、彼が思い描いていたその美しい比売神の御姿と、いま見

る、ゆうの麗姿がぴたりと一致して、先刻より、奇妙な懐旧の情を抱いていたのである。

この娘は、きつと比売神様が生まれ変わりさあ違えね…。

ただ漠然とそんなふうに思い、遠い目でゆうの姿を眺めていたのであつた。

パチンという音で主馬之助は、はつと我に返つた。ゆうが、懐剣の刃を朱塗りの鞘に納めた音だ。

「おい、おまえ……。あたしの話を聞いていたか？」

その野卑な言葉づかいに、すっかり現実に取り戻された主馬之助は、苦笑して後頭部をぐしゃぐしゃと掻きながら、しかし、丸い頬に笑窪を作つて嬉しそうに目を細めた。

「ははは……」

「張り合いのない奴だ……」

些かうんざりしたような顔で、ゆうが大きく肩を上下させて深く溜息をついた。

その時……。

主馬之助は、ゆうが着ている小袖の裾を伝つて、背中から肩へと一気に這い上がる一匹の血のように赤い蜥蜴とかげを見て、ぎよつとなつた。

「お、お、お、おゆうさん……背中……」

無意識に刀の柄に手をやる。

「止めときな！」

ゆうが、その大きな双眸を険しくして主馬之助を睨み付けた。

「慌てるんじゃないよ！ こいつは、赤兵衛といって、あたしが使役している式神さ……」

ゆうは、そう言つて主馬之助を制しておいてから、赤兵衛に視線

を移し、長い睫毛を伏せながら優しく語りかけた。

「……どうした、赤兵衛？」

赤兵衛は、ゆうの白い貝玉のような耳元へ這い寄ると、その毒々しい真つ赤な体軀よりもさらに赤い舌を、火焰のようにちろちろと吐き出しながら、きゅっきゅつと奇つ怪な声で哭いた。途端に、ゆうの顔が驚愕の様相をあらわす。

「なんだって！ あかねが？」

ゆうが、そう叫ぶのと同時に赤兵衛は、彼女の肩からひらり飛び降りると、落ち葉の海をがさがさとかき分け、赤い体を激しく波打たせながら笹藪の中へと消えた。ゆうが素早くその後を追う。

主馬之助は、呆氣にとられ、一瞬、阿呆のように口を空けて見守ったが、すぐに氣を取り直し、刀の柄に右手を添え、猫のように背を丸めて走り出した。

ゆうは、古木が乱立する笹藪の道なき道を、子鹿のようなしなやかさで疾駆する。

忍者は、笠を胸に当てて落ちない速度で、日に五十里を走るといわれている。しかも、爪先がわずかに地面に触れるだけの軽妙さで、前後左右、向きを変えることなく一定の速度で駆け続ける事ができた。

主馬之助も、修験の者に従い、山に籠もって険阻な山道を昼夜にわたり早駆けするという修練を積んでいたが、さすがに、ゆうのこの忍者走りにはついていけず、途中、何度も見失っては泣きべそをかいた。

「お、お、お、おゆうさん……。ま、待ってくんろ……」

やがて、七顛八起しちてんはつきの末にやや視界の開けた湿地の、葦の原の真ん中辺りで、肩で息をしながらもゆうに追いついた主馬之助は、茫然と佇む彼女の足下に若い女の死体が転がっているのを見て驚きの声

を上げた。

「こ、こいづは……」

ゆうが死体の側らにそつとうずくまる。

「あかね……」

十七、八と見える女の亡骸は、汚泥にまみれていたが、遠目にも眩しい全裸の艶姿であった……。

「お、おゆうさんの、お仲間がい……？」

主馬之助が、ぬかるみに足を取られながら駆け寄ってきて訊くと、ゆうは、悲しげに答えた。

「ああ……。先月、二人で一緒に小田原を発ったんだ」

その女の胸を覆うように、赤兵衛がその深紅の体を貼り付けていた。鋭いかぎ爪が豊かな乳房に食い込んでいる。

ゆうは、赤兵衛に顔を寄せて、そつと囁いた……。

「……もういいよ……。赤兵衛。……ご苦労だったね」

途端に赤兵衛の体が、火中に投じた飴細工のように溶けはじめた……。やがて、その形状を失い、どろどろと赤黒い液体へ変化した。蜥蜴は、横たわる女の胸や腹を汚しながら、その姿を消した……。

「こ、こ、こ、こいづは一体……？」

「うるさいねえ、いちいち金魚みたいに口をぱくぱくさせるんじゃないよ」

ゆうは、視線を女の亡骸に向けたまま、語気荒く言った。

「赤兵衛は、あたしの経血つきのものなのさ！」

主馬之助は、ゆうの魔性とも言うべき毒気に当てられ、恍惚の表情になって心の中で賞賛した。

か、かつこい……。

「畜生……。恐らく、鳶加藤の一味にやられたんだ」

ゆうが独り言のようにつぶやく。

横たわる白い裸体には、黒々と三本の手裏剣が突き立てられていた。

致命傷は、左の眼球を貫通して深々と刺さり込んだ五寸ほどの棒手裏剣であろう、閉じることが出来なくなった左目に倣い、右目も大きく見開かれていた……。

「……あんたも、運がなかったねえ。結局、あたしを残して逝っちゃうのかい……？」

ゆうは、女の顔を覗き込み、胸の上に両手を組ませようとしたが、既に死後硬直が始まっているその細い腕は、木像のように強ばって言う事をきかず、仕方なく右目だけを何とか閉じさせた……。

「今度、生まれてくるときは、裕福な百姓家の娘にでもなるんだな

……」
土色の死顔に一粒二粒、涙を落としながら、ゆうがそつと微笑みかける。

「六道の入り口で迷うんじゃないよ……。いいかい。人間界は、上から二番目だ。一番下は、地獄だよ……」

言い終わった刹那、ゆうは、懐剣の鞘を払い、女のこめかみに刃先を突き立てると、一気に顎の辺りまで切り下げた。次いで、その切れ目に指先を差し入れると、一気に顔の皮を引き剥がす。たちまち、彼女の両手は血で染まった……。

……。
こいが忍者の掟がい……？ 開いだ目であ、見でらんねえな

主馬之助は、たまらず目をそらした……。

それにしても、女の周囲には、原型をとどめなくくらいに引き裂

かれた衣服の断片が散乱し、彼女が背負っていたらしい葛籠くわろうも完膚無きまでに破壊され尽くしていた。中身は全て持ち去られたのである。それ以外には、一物も見当たらない……。

「越後からこの娘こが持ち帰った密書を、今日ここで、あたしが受け取る手はずになっていたんだ……。奴ら、どうやってそれを嗅ぎつけたものか……」

鳶加藤の一味は、このくノ一を襲って密書を奪おうと企てたものの果たせず、今度は、それを受け取りに来たゆうを待ち伏せて襲撃したのであった。

「え、越後からの密書？」

「ふふ……」

ゆうは、自嘲気味な笑いを浮かべて、吐き捨てるように言った。
「あたし達は、今年に入ってから、もう、これで三度も越後と相模の間を往復しているのさ……。ふん！ 関東管領だか何だか知らないが勿体付けやがって……。うちの御屋形様も、少し人が好すぎるんだよ。どうせこんな密書……読んだって、がっかりするよ。うな代物に違いないんだ……」

言いながらゆうは、おのれの人差指と中指を女の股間に滑り込ませた。

「な、何を！？」

「鳶加藤め……。ふふふ、随分と探したようだけど、密書は、遂に見つからなかったようだね……」

驚きの声をあげる主馬之助を無視して、しばらくの間、女の体内で指先をうごめかせていたが、やがてゆっくりと引き抜いた二本の指には、長さ三、四寸の青竹の筒がしっかりと挟まれていた……。

「覚えておきな……女は、色んなところに秘密を隠すのさ」

ゆうは、微笑して立ち上がると、粘膜に濡れ光る竹筒を主馬之助に見せた。

「さてと……、今度は、あたしがこれを運ぶ番だが……。また、一人で山道を駆けたりしたら、あかねの二の舞になるねえ……」

そう言うってから、ゆうは、鋭い流し目で主馬之助の顔をちらと見た。彼が反射的に目を反らす……。

「おまえ……、確か、鎌倉まで行くと言ってたな？」

「……そ、そのつもりだっけど」

ゆうは、しばらくのあいだ何事か思案を巡らせていたが、不意に主馬之助をしげしげと眺めながら言った。

「じゃあ、七方出でおまえと夫婦にでもなろうか……」

「えっ？」

ゆうは、今までとは態度を一変させ、甘えた声音で主馬之助にすり寄ると、その広い胸板をそつと白い指先で撫でさすりながら、柔らかな頬を押し付けてきた……。

「ねえ……、鎌倉まで行くんなら、ちよつと足を伸ばしてさあ……。あたしを小田原まで連れて行っておくれよ」

そう言つて、悩ましげに主馬之助を見上げる。

主馬之助は、一瞬、面食らつて困惑の表情を見せたが、やがて喜色満面、その双眸に感動の光を湛えて言った。

「ええ！？ お、俺あと一緒にがい？」

ゆうは、白くか細い腕を主馬之助の首に巻き付け、彼の耳元で甘い息を吹きかけながら囁いた……。

「……無事、小田原に着いたらさあ………一晩だけ、あたしの体

を抱かせてあげるからさあ……」

主馬之助は、天にも昇る心持ちになって、二つ返事で答えた。
「あ、あ、相行きあいやつしよ！」

その言葉を聞いて一安心すると、ゆうの態度がまたしても掌を返したように変わった。すつと主馬之助から身を離すと、小袖の裾をぱんぱんと手で払いながら独り言こつ。

「さてと　　そうと決まれば……」

そして、例の竹筒をじつと見つめて、再び大きく溜息をついてから、主馬之助の丸い顔をきつと睨み付けた。

「おい、こら！　主馬之助。いつまで、ひとの顔をぼつと見てるんだい……しばらくの間、むこうを向いてろ！」

「な、な、何で……？」

ゆうは、主馬之助の鼻先に、例の竹筒をぐいつと突きつけて言った。

「あたしも、これを隠さなくちゃあならないんだよ！」

続く。

浦賀水道へ海賊なんぞ斬っちゃあ！（１）

主馬之助とゆうは、陸路の危険を避け、江戸の前島から船で相模へ向かうことにした。

江戸というのは、江の戸。すなわち、河口をさしてつけられた地名であり、坂東太郎と呼ばれた利根川の河口に栄えた、湿地と入江で構成される小さな漁村であつた。

この地を代々治めていた江戸氏を追放し、太田道灌^{どうかん}が江戸城を築いたのは長禄元年のことである。

摂津源氏の流れをくむ太田道灌は、扇谷上杉氏^{おうぎがやう}に仕え、鎌倉公方の威勢を借りて江戸の町をおおいに興し、その結果、六浦にならぶ関東水運の拠点として発展を遂げた江戸湊は、各地からの多種多様な集積物資であふれかえつた。

江戸前島から日比谷入江にかけては、大小雑多な商船、漁船が群がって舳先をつつき合い、品川の湊から浅草の浜まで、延々と賑やかに市や盛り場が続いたのである。

しかし、この地を相模の戦国武将、後北条氏が治めるようになってからは、俄然、殺伐とした雰囲気^{おんぎ}が湊や沿岸の村々に漂いはじめることになる。それは、後北条氏と対立し、房総半島の大半をその勢力下におさめる安房の有力武将、里見氏との制海権争いが激化したからに他ならない。

『北条五代記』によると、

敵も味方も兵船が多くあつて、戦いが止むことがなかった。夜になると、ある時は小船一艘二艘で盗みに来て、浜辺の里を騒が

し、ある時は、五十艘三十艘で渡海し、浦里に放火し、女子供を生け捕り、すぐに夜中に海を渡って帰る………そうして、夜になると敵も味方も、海賊が渡海するかもしれないと、触れ回って用心をし、海賊のことを日夜話さないことはない　とあり、北条や里見の軍船が海賊まがいの略奪行為をしながら、互いを牽制し合っていた事がうかがえる。

しかし、そうなると湊に出入りする商船も自衛の為に武装をせねばならず、必然的に、湊には、無法と暴力が蔓延し、^{ふんし}禪を潮風にたなびかせた無頼の勢子が蟠踞するようになった。また、風魔一党や伊豆衆といった乱波が、細作として商人に化け大量に潜り込み、宿や露天商などに紛れては敵国の動静を探っていた。なかには、廻船に乗り込んで、同乗する客から情報を引き出そうとする者もいる。

いずれにしても、当時の江戸というのは、常に繁華と胡散臭さが同居する、猥雑で危険な港湾都市であったのだ……。

江戸前島を出航してから、移流霧にかすむ神奈川の海岸線を右手に眺め、主馬之助とゆうを乗せた三百石積み廻船は、快調に波の上を滑っていた。緩やかに上下する波の頂が、晩秋の陽ざしを受けて銀光を跳ね返す。

しかし、六浦湊で荷を積み替え、沿岸流に乗って夏島を後目に、ようやく富津岬の先端をその視界の内に納めた辺りで急に^{なぎ}風となつた……。

「六浦さあ、引き返すたほうが良いがれ……？」

銚色に日焼けした奥州訛りの船頭が、向う鉢巻の隙間に指を差し入れ、すっかり禿げ上がった頭をぽりぽりと掻きながら自問した。

当時の和船は、まだ風上への帆走ができず、追い風の無いときには水主^{かこ}を使い櫓を漕いで航行した。そのため、この廻船にも四十挺ほどの櫓が用意されているが、しかし、やはり人力では速度が出な

い。

船頭は、しきりに雲の動きを仰ぎ見ては鼻をくんくん鳴らしたり、船縁から海面を覗き込んだりしていたが、やがて、かぶりを振りながら大きく溜息をついた。

「東風おぎあけさあ止おだんだし、潮のあんべえも悪い……。ここは、一旦、六浦むつさ戻かえって風を待ったほうがいいのっしや……」

しかし、船楼にふんぞり返る大身の武家が、家来を差し向けて船頭に詰め寄った。

「おい、船頭！ 何故、船を止める？ 儂らは、先を急いでおるのじゃ。早々に船を出さぬか」

「もう一刻くへつと暗くくなる、こだ所どこさあぐずらしたら、海賊が出るんだおん」

六浦から相模の港まで船で行くには、三浦半島を迂回するのだが、途中、必ず浦賀水道を通過しなくてはならない。三浦半島東端の佛崎と、房総半島西岸に挟まれた、この狭い水門を夜間に航行するのは危険であった。この近海一帯を根城とする海賊達にとっては、民間の商船を襲う絶好の襲撃場所だったからである。

しかし、武士は、引き下がらず、語気を荒げながら横柄に言った。
「我らは、北条相模守様の命により大切な積み荷を運ぶ途中じゃ。そのほうも、舵をとって渡世いたす者ならば、里見の海賊ごとき、みごと振り切ってみせよ」

そうまで言われては、引き返すわけにもいかず、船頭は、老練な顔を引き締めて力強く頷いた。

「ようがす。んだらば、お武家様。万一、海賊に襲われてがらばり、獲物ぼわば振るって敵どもばあ追おい払はってけさい」

「心得ておる。我が主は、槍を取っては天下に聞こえた相模一の剛の者、清水太郎左衛門様じゃ。まさに、大船に乗ったつもりで櫓を漕ぐがよい」

船頭の指示で、五十名程の水主達は、慌ただしく帆をたたみ櫓を使い始めた。一刻ほとして、佛崎（観音崎）を回り込み、黄昏に浮かぶ劔崎の輪郭が確認できる辺りまで来ると、ゆうが主馬之助にそつと囁いた……。

「まずいな……。この先に水軍が待ち伏せているぞ」

「ええっ？ 俺ぁには、何にも見えねえ……」

鉛色にうねる海原には、時折、海鳥の小さな影が視界をかすめる以外は、船影はおるか漁り火ひとつ見当たらない。しかし、ゆうは、瞳を険しくして主馬之助を睨みながら言う。

「おまえ達と違って、あたしには、気配で分かるんだ。十五……、いや二十艘くらいは隠れているな」

「そ、そ、そんなにがい？」

「ああ……。あの図体のかい侍は、どうやら北条の家来らしいが、この船には、何やら小田原へ運ぶための大切な荷が積んであるようだ……。里見の水軍は、きつとそれを狙っているのさ」

そう言うってから、ゆうは、胴の間（うでま）にたむろする侍達に鋭い視線を投げかけた。

「恐らく、あの中に、里見と内通している細作がいるな……」

「ほ、本当？」

「ふん……。まあ、今に分かるさ……」

そこへ、清水太郎左衛門とよばれた大兵の豪傑が船楼の中から姿を現し、一言二言、船頭と話をする内に、ふと、ゆうの姿を見とめ、大きな肩を揺すりながらのしのしと近づいてきた。

「やあ、これは先程の……」

ゆうに向けて、屈託のない笑みを投げかける。

「……あの折りは、難渋しているところをお助けいただき、本当にありがとうございます」

武家の妻に扮したゆうは、深く頭を下げながら、丁寧に礼を述べた。

実は、江戸前島でゆうと主馬之助がこの廻船に乗り込む前に、ちよつとした悶着があったのだ。

江戸湊には、船待ちをする客のために宿や回漕店などがあり、ついでに遊興の施設もあった。具体的には、遊女屋である。港湾の商いで儲けた商人や、地元の有力な網元などが経営する小さな私娼宿であるが、若い娘を多数取りそろえていた。海賊達が沿岸の村からさらってきては、売り払った娘達である。

そして、彼女達が逃走しないように、遊女屋には、必ず用心棒の男達を抱えていた……。

忍び稼業には、相応しくないほど人目を引くゆうの美麗な容姿を、無法三昧をはたらく無頼の徒が見逃すはずがない。主馬之助とゆうが町並みの賑わいに紛れ込むや、たちまち、数人の男達が二人を取り囲んだ。

「こりゃあ、良い女だ！　おい、お待さんよう……、悪い事は、言わねえからその女をここへ置いて行きな。さもねえと、非道え目に遭うぜ……、お前え達の死体が海に浮かぶ事になる。へっへっへ、心配すんな、銭なら払ってやるよ。ほら……」

男達は、遊女屋に雇われている用心棒である。彼らの一人が、主馬之助の足下に砂金の入った革袋を放り投げた。薄汚れた裁着袴たつつけばかまの帯には、三尺ほどの野太刀を一本だけ差していて、その柄を握って

は、いまにも抜きそうな素振りを見せて威嚇する。

「おい、主馬之助。ここは、ひとまず逃げるよ……」

ゆうが、主馬之助の耳元に口を寄せ小声で囁いた。しかし、それを聞きとがめた無頼の男達は、たちまち主馬之助とゆうを八方から取り囲んで身構える。

「馬鹿野郎！ 逃げられるとも思っているのか」

彼らは、戦場で働いた経験があるのか、それなりに隙の無い構えを見せると鋭い殺気を漲らせたが、鹿島の道場で修行した主馬之助にとっては、子供を相手にするようなものである。

主馬之助は、いっそ、こいつらの腕を一本ずつ刎ね飛ばしてくれようかとも思ったが、しかし、そんな彼の形相を見て、ゆうが、かすかに聞き取れるほどの囁き声で念を押すように言った……。

「いいか、主馬之助。ここで、暴れてはせっかくの七方出（変装）が台無しだ。ここは、あくまでも意気地のないへボ侍を演じ切るんだぞ。分かったな……？」

すでに主馬之助達の周りを、大勢の野次馬が遠巻きに囲んでいた。彼らは、可憐な妻を守るために、主馬之助が腰の刀を鞘走らせる瞬間を、今か今かと待ちわびていた……。

「きゃあ！」

無頼漢のひとりが、ゆうの後ろに忍び寄ると、両手を広げてその細い体をがばつと抱き込んだ。ついでに、小袖の上から乳房を驚掴みにする。

「へへへっ、たまんねえ……。おまえ、いい女だなあ……」

「な、何をなさいます。狼藉は、お止めくださいまし！ ひ、人を呼びますよ……。誰かあ！ 誰か助けてください！」

ゆうが悲壮な叫び声を上げる。もちろん、これは、ゆうの演技であるが、野次馬達は、彼女に深く同情すると同時に、不甲斐ない夫つまり、主馬之助に鋭い非難の視線を浴びせかけた。

気まずい雰囲気の中、主馬之助は、どうして良いか分からず、ただただ、おろおろするばかりである……。

その時、ゆうに抱きついていていた男の体が、ふわりと宙に浮いた。野次馬達が一斉にどよめく……。

「な、何しやがんでい！」

男が、驚愕の表情を後ろに振り向けると、六尺　　いや、七尺近くはあるうかという大兵の武士が、自分の首根っこを掴んで、片手で軽々と持ち上げているのが見えた。

「おつ、おつ、降ろしやがれ……」

男が、じたばたと宙でもがく……。

次の瞬間、その武士は、掴んでいた男を片手の腕力だけで無造作に後ろへ放り投げた。

「わあっ！」

投げられた男は、五間ほどの距離を飛んで背中から地べたに叩き付けられ、そのまま泡を吹いて動かなくなった。

他の男達が色めき立つ……。

「こつ、こつ、こつ、この野郎……！」

無頼の男どもは、一斉に太刀を抜き放ったが、それよりも速く、大兵の武士は、美事な働きを見せた。

先ず、稲妻のごとき素早さで正面の敵に駆け寄ると、腰に佩いた太刀の柄頭で鳩尾みそおちを突いた。うつと前のめりになって白目を剥いたその男を、今度は、両手で高々と持ち上げ、啞然としている他の男

どもへ向けて勢いよく放り投げる。たちまち、二人の男が、飛んできた仲間の下敷きになり、そのまま卒倒した。

すっかり戦意を失った残りの無頼漢を、その大兵の武士は、赤鬼のごとき形相でざろりと睨み回しながら大音声を張り上げた……。

「これ以上、やると言うのなら、貴様らの素っ首すべて叩き斬つて、その髭面を干し魚と一緒にぶら下げてやるぞ！ それでもよいかわつ！」

この一言で、無頼の男どもは、震え上がり、地べたに転がる仲間を見捨てて一散に逃げていった。観衆からは、やんやの喝采が上がったが、「見せ物ではない！」と武士が一喝するや、みな、蜘蛛の子を散らすように駆け散ってしまった。

武士は、ゆうに近づく豪傑顔に満面の笑みを浮かべて声を掛けた。

「ご内儀……、怪我は、ござらぬか？ ここには、乱暴者もおるゆえ、女子衆などは、重々用心いたさねばならぬのよ」

「お助けいただき、お礼の言葉もございません……」

ゆうに対しては、慈愛に満ちた眼差しを向けていたその武士も、主馬之助には、軽侮のこもった視線を投げかける。

「そこもと、武士の端くれならば、妻の危急に際し、せめて刀を抜くだけの気概は、お持ちなされ！」

主馬之助は、赤くなったり青くなったりしながら、へどもどと言いつたが、その武士は、素っ気ない一瞥をくると踵を返し、大きな肩をゆさゆさと揺すりながら湊の方へ去っていった……。

主馬之助は、半べそをかきながら、

「お、お、おゆうさん……。あれで、本当にいがつたのがい……？」
と訊いたが、ゆうは、ふんとそっぽを向いてしまったので、いよ

いよ情けない顔になり、大きく溜息をついてがっくりと肩を落としたのであった……。

さて……。

はからずも、その豪傑、清水太郎左衛門と一緒にの船に乗り合わせしてしまった二人であるが、陽は沈み、いよいよ暗黒の濃度を増した海原が、その低い波音によって不気味なうねりを伝える頃合いになると、この先に待ちかまえているであろう危難にその顔が強ばりはじめる。

船上には、燦々と篝火が焚かれ、その明るさに反比例するように、海上は、闇の深みを増してゆく。

主馬之助は、終始、落ち着かない視線を黒い水平線に這わせていた……。

ふと……淀んだ空気がざわつき、強烈な潮の香りが、つんと鼻をつく……。

途端に、水主の叫びが、闇の現うつつを突き破った。

「頭かっしやつ！ 大変てへんだあ！ 海賊さあ、現れたっちゃや！」

続く。

浦賀水道へ海賊なんぞ斬っちゃあ！（２）

暗夜の黒い潮風を切り裂いて、数本の鈎縄が飛び交う。

主馬之助とゆうを乗せた、三百石積み廻船に投げ込まれた鍛鉄製の鈎爪が、左舷の垣立にかきつと鋭く食い込み、その先にある頑丈な縄がぴーんと張りつめた。

海賊は、この鈎縄を手繰って、自分達の船を、相手の船腹へ漕ぎ寄せるのである。

「おうい！ 誰か、弓を持ってこい。火矢をぶち込んでやるんじゃあ。早くしろ！」

船上に、清水太郎左衛門の怒声が響き渡る。彼ら主従は、佩刀を抜き払い、船縁を駆け抜けながら、垣立から海賊船へと延びる縄を一本ずつ切って回った。

水主達の中には、船戦に慣れた者も多くいて、海賊の襲撃に慌てる様子も無く、戦鬪の準備に取り掛かっていた。

船倉から弓、矢、船槍、木盾などを運び出し、廻船の乗組衆に配って回る。彼らの中には、清水太郎左衛門主従の外にも戦える者が多くいて、各々弓に矢をつがえ、また槍や太刀の鞘を払って身構えていた……。

「お、お、おゆうさん……、俺あ達は、どうする？」

主馬之助は、垣立の陰に身を隠しながら、暗い海原を睨んでいるゆうに小声で尋ねた。彼女は、海面にうごめく黒い影から目をそらすずに答える。

「奴らは、恐らく安房内房に巣くう百首水軍だ……。連中は、戦となりゃあ、絶対に容赦はしない。女子供であろつが皆殺しにする

んだ……。出来れば、適当にやり過ぎたいところだが、そうも言
つてられないようだ。殺るか殺られるか。戦うしかないさ……」
そう言いながら彼女は、背負ってきた葛籠つづみから六刃玉筒ろくもんめを取り出
し、硝薬と弾丸を装填し始めた。

主馬之助は、船頭から手渡された短弓に矢をつがえると、暗い海
原に向けて弦を引き絞る……。

「放ていっ！」

清水太郎左衛門の掛け声で、一斉に弦音が鳴り渡る。

火矢が、幾筋もの光の尾を引いて暗い海面に吸い込まれ、やがて、
たくさんの火炎が敵の全貌を明々と照らし出した。海賊船の正体は、
小早とよばれる細長い八挺櫓の小型船であった。数艘の小早に分乗
した海賊どもは、巧みに舵を操りながら舳みよしで波を切つて、獲物を狙
う鯨のごとく、廻船の側を行きつ戻りつしている……。

海賊は、廻船に移るのをいったん諦め、小早の船上に設けら
れた小さな櫓やぐらの上に、五、六人の射手を並べて、船大将の掛け声を
合図に一斉に応射を始めた。無数の矢が廻船の舷ふなばたに突き刺さり、水
主が二人、背中に矢を受けて倒れる。

「伏せろ、伏せろおっ！ 顔を出すんじゃないぞ！」

清水太郎左衛門が叫ぶ。

主馬之助の耳元を、ひゅんと風を切つて掠めた矢が、後ろで、青
くなつて右往左往していた薬売りの側頭に刺さり、彼は、血の花を
咲かせてひっくり返つた……。

「主馬。舵取りを狙うんだ。敵の足が止まる」

「あ、あい！」

主馬之助の放つ矢が、唸りを上げて海賊船の艫ともに立つ敵兵の首に
突き刺さる。矢を受けた敵が、あっと仰け反つて海中に没した。す

かさず、海賊達の攻撃が主馬之助に集中し、彼は、慌てて木盾の陰に身を沈めた……。

「ひゃあ！ たまんね」

「左舷に、九艘か……。あれは、おとろ四で、本隊が、まだ何処かに隠れてやがるな……」

ゆうは、垣立の影に身を隠しながら、しばらく敵の様子をうかがっていたが、やがて六刃玉筒を構えると開かいのくちの口から敵船へ向けて放った。

轟音が波音をかき消し、海賊船の一艘が傾く。乗っていた海賊どもが、みな、慌てて海に飛び込んだ。

「おっ！」

それを見た清水太郎左衛門が、驚きの声を上げ、姿勢を低くしたまま、ゆうの側へ駆け寄ってきた。

「……てつきり麗しい武家の女房だと思っていたが、……お前は、いったい何物だ？」

「ふふふ……、あたしかい？ あたしは、駿河守様の手の者さ。偶然、この船に乗り合わせてしまったが、こうなったら一蓮いちれんたくしゅう托生……、海賊どもを皆殺しにするまで、おまえ達と一緒に戦うよ」

ゆうは、美しい瞳を凜々しくして、太郎左衛門の厳つい髭面を見据え、不敵に微笑んだ。

「ほう……、今川様の……」

太郎左衛門は、一瞬、首を捻ったが、しかし、すぐに呵々大笑しながら言った。

「はーっはっはっ！ これは、頼もしい。と言いたところだが、女の助けなど要らん。怪我をせぬよう、どこぞに隠れておれ」

ゆうは、ふんと鼻で笑うと、眉根を寄せて太郎左衛門に詰問した。「おい……。この船には、いったい何が積まれている？ 敵は、どうやら里見に雇われた百首水軍のようだが、火矢を放ってこないと

ころをみると、狙いは積み荷に違いない。おまえ達、いったい何を運んでいるんだ？」

清水太郎左衛門は、急に険しい表情になり、ゆうを睨み付けていたが、やがて、低く抑えたような声音で言った。

「我らは、御本城様の命により、奥州から三千両の金塊を運ぶ途上じゃ……」

「さ……、三千両!?」

ゆうは、瞠目した。

金塊三千両といえば、江戸時代の貨幣に換算すると、およそ金三万両に相当する。なるほど、里見の海賊に狙われる道理であるとゆうは思った。

「ちつ……、どうやら、あたし達は、北条の軍資金のお守りをする羽目になっちまったようだな……」

言いながら、ゆうは、再び六匁玉筒を構えると、海賊船を操る舵取りに狙いをつけて轟然と放った。撃たれた敵は、首を失って船から転がり落ち、暗い海原に飛沫を上げた。

彼女が使用する弾丸は、鉛玉に十字の切れ込みを入れたもので、命中した途端に体内で炸裂し、肉体に多大な損傷を与える殺傷能力の高いものであった。手足に命中すれば千切れ飛び、頭ならば、潰れた卵のように消し飛ぶ。腹に空ける穴は、拳を出し入れ出来るほどの大きさになるのだが、ただし、熟練した者が扱わなければ、銃が暴発する危険性もあった。

ゆうは、手早く硝薬と弾丸を装填すると、三発目の銃弾を放つ。発砲の衝撃で、ゆうの黒髪が舞い上がった。

海賊どもは、すっかり浮き足立ち、反撃の手を弱めていた。ここぞとばかりに、清水太郎左衛門が檣けきを飛ばし、廻船から次々と放た

れる矢が、海賊船に雨あられと降り注いだ。

「休みなあ！　どんどん放てえ！　海賊どもを皆殺しにしるお！」

その時である……。

「新手の敵が現れたぞ！」

廻船の右舷、海面から突き出た岩礁の黒々とした輪郭の前を通過したとき、その陰から新たに八艘の小早が現れ、松明に灯した炎の尾をたなびきながら凄い勢いでこちらに漕ぎ寄せ、猛烈に矢を射掛けてきた。それに気圧され、廻船からの矢勢がしだいに弱まる。援軍の出現に相呼応するように、左舷にいた敵も再び勢いを盛り返し、廻船は、左右両側からの厳しい挟撃を受けることとなった。

浮き足だつて、立ち上がった者が、次々と矢に当たり船上に倒れ伏した……。

「立つなあ！　伏せろお、伏せるんだあ！」

みなは、物陰に隠れて身動きが取れない状態に陥った。

「……んだから、言つたつぺよ」

頭を抱えて縮こまっている船頭が、つい呪詛の言葉をもらした……。

廻船側の乗組衆が動きを封じられているあいだに、船腹に漕ぎ寄った海賊船から、再び何本もの鈎縄が投げ込まれた。それを手繰り寄せ小早を隣接させた海賊どもは、縄梯子をかけて次々と廻船へ乗り移ってきた。

矢の応酬に代わつて、たちまち船上での乱戦が始まり、剣戟の響きとともに悲鳴や怒号が交錯する……。

「皆の衆、槍は、振り回しづらいぞ！　なるべく太刀で斬り結ぶんだ！」

自分でそう叫んでおきながら、清水太郎左衛門は、一丈余りもある六角棒の威を振るい、敵を四、五人ずつ、まとめて打ち払い始め

た。海賊は、海に落ちてでも浮き上がれるように、いたって軽装であるため、横殴りに襲い掛かる太郎左衛門の六角棒を身に受けるとたちまち骨が砕け、血を吐きながら、踏みつぶされた蝗いなごのように床板に転がった。

「蹴散らせえ！ 八幡掛けて船を守り抜くんだ！」

一時は、錯乱して逃げまどっていた廻船側の戦力が、太郎左衛門を中心に結束しはじめ、次々と反撃に転じていった。

清水太郎左衛門政勝は、筋金入りの剛の者である。

彼の父親、清水上野介康英は、後北条氏譜代の中でも伊豆奥郡代や評定衆を務める重鎮で、伊豆衆筆頭の地位にあった。後に下田城主となつて水軍を率い、小田原城滅亡まで活躍する人なのだが、その子、太郎左衛門は、先年死んだ兄新七郎に代わつて清水家の嫡子となつていた。

そして、彼の母親は、あの有名な『怪力の母』である。

出典は、やはり『北条五代記』であるが、

彼女が、氏神社へ参詣に行く途中の坂道で、穀物の俵を二つ乗せた牛が、崖から落ちそうになつていゝるのに出くわしたときの話

荷縄を切つたならば、牛が谷に落ちて死ぬに違ひなく、引きあげる方法もなく、かわそうな有様である。女房はこれを見て、辺りの者をのけ、一人牛の側により、牛と俵を抱いて空中に持ち上げ、道に牛を立てた。この女の力、人間のものではないと、人々はうわさした とある。

木曾義仲の妻女、巴御前ともえしぜんに負けないくらいの女傑であつたのだ。

ともあれ、猛将の父と怪力の母から軟弱な武将が生まれるはずがなく、太郎左衛門は、戦場で敵将の首を捻り殺す『ねじ首太郎左衛門』の異名を持つ怪力の豪傑であつた。

「あの侍、なかなかやるじゃないか……。いい武者振りだよ……」
ゆうが感心する。

「じゃ、じゃあ、俺あも……」

勇躍しようとする主馬之助の首根っこを掴んで、ゆうがぐいと引き戻した。

「ばか！ 本命が現れるまで、ここで待ってろ」

「ほ、本命って……？」

「見て分かんないか？ 今ここで暴れてる奴らは、みーんな罔だ」
船上で暴れる海賊どもは、確かに動きは派手だが、今一つ、命のやり取りをするという気魄に欠けていた。死をも恐れぬ勇猛果敢な海賊の戦い振りにしては、手ぬるい感じがする……。

「敵は、怯んでいるぞ！ 一気に、たたみかけろお！」

鎌で草を刈るがごとく、勢い^{いきおい}猛に六角棒で敵を薙ぎ払いつつ、廻船側の乗組衆を鼓舞していた清水太郎左衛門であったが、突如、轟音とともに発せられた眩い閃光に視力を奪われ、うおっと仰け反って視界を手で遮った。途端に、白煙がもうもと立ちこめ、一寸先が見えぬほどに船上を覆い尽くす……。

「煙玉だ！ みんな、息を止める」

ゆうが、必死で叫んだが、すでに多くの味方が煙を吸い込み、涙を流しながら噎せ返っていた。

「主馬。いよいよ本命のお出ましたよ！ でも、いいか……、始めは処女の如くにして、後には脱兎の如く……だぞ。分かったな！」

「そそ、それは、どうゆう意味がい？」

ゆうは、苦笑しながら溜息をついた。

「……とにかく、慌てないで、まずは敵の出方をじっくりと見定めるんだ」

「あい」

ゆうは、葛籠から何本もの棒手裏剣を取り出すと、一本ずつ腰帯に挿していった……。主馬之助は、巨軀を丸めて低い姿勢を保ちながら、備前兼光を手元に引き寄せ、いつでも走り出せるように身構えた。

やがて白煙が霧散し、潮が引くように徐々に視界が開け始める……。

途端に、みなが一斉に驚きの声を上げた。

「うわあ！ な、何だ、あれは！？」

いつの間にか艦^{とも}の方に、廻船より一回りも大きい関船が、その不気味に黒い威容を現していた……。

それは、安宅船にも負けないような威風の総矢倉造りで、盾板の代わりに矢除けの幔幕を張り巡らせた幕張船であった。その幕が、漆黒の闇のように黒々と染められていて、おまけに船体も黒く塗られていたので、闇に融け込んでしまつて接近に気付かなかったのである。

見渡すと、先刻まで廻船上で暴れていた海賊どもは、みな姿を消していた……。

「あれ……、奴ら何処にいった？」

みなが茫然としながら辺りを見回す……。船上には、半死半生の手負いが数人呻いているだけで、あとは、篝火の炎がゆらゆらと闇に抗っているばかりである。

「はや、敵は逃げ失せおつたか……？」

狐につままれたような面持ちで闇に目を凝らす一同……。そして再び、船尾に迫るあの関船を見上げて、みなが一斉に悲鳴を上げた。
「た、大変だあ！」

関船の矢倉上に、六挺の鉄砲が火縄を燦らせながら銃口を揃えていたのだ……。

「みんな、伏せろお！」

叫ぶよりも早く落雷のごとき銃声が轟き渡り、十人近い味方が一瞬にして薙ぎ倒された。たちまち、船上が大混乱に陥る。

その逃げまどう味方に紛れ、艫にある舵座の方へ向かって走り出す人影があった。

「主馬之助！ あいつが、味方に紛れていた細作だ。舵座を壊される前に斬るんだ！」

「あ、あい！」

ゆづが叫ぶと同時に、主馬之助は、巨軀を躍らせ、敵の細作に向かって突進した。関船の矢倉上には、片膝立てた敵の鉄砲放ちが横一列に並び、手早く第二撃の準備に取り掛かっている。敵が弾薬の装填を終える前に、あの細作を斬らねばならなかった。

主馬之助は、咆哮を迸らせながら猛虎のごとく疾駆した。

「うおおおおお！」

声に驚いた敵の細作が後ろを振り返り、阿修羅のごとき形相で迫り来る主馬之助の姿をみとめ、眉根を寄せて舌打ちした。

「ちっ！ 気付かれたか……」

彼は、そのまま立ち止まると、懷から取り出した二本の棒手裏剣を、矢継ぎ早に放った。篝火を掠めながら唸りを上げて飛来する棒手裏剣を、主馬之助は、走りながら一寸の見切りで躲すと、背を丸め、刀の鯉口を切って斬撃の態勢に入った。

二人の距離が急速に縮まる……。

敵は、悲鳴を上げて、踵を返すと一目散に走り出した。そして、加速を付けたまま舷を乗り越え、関船に飛び移るべく夜空に向かって高々と跳躍した……。

「逃がさねえ！」

一呼吸遅れて、主馬之助も、舷を蹴って高く跳んだ。

おん まりしえい そわか

夜空に冴える三日月を背景に、二体の黒い影が蝙蝠こつもじのようにひらひらと躍った。

「やあっ！」

白刃が、月光を反射してぎらつと閃く。

先に関船の甲板に飛び移ったのは、敵の細作であった。

しかし、首を失ったその男は、血の軌跡を引きながら床板の上に、
どうと倒れた……。

続く。

浦賀水道へ海賊なんぞ斬っちゃあ！（3）

月下に、淙淙そうそうとつねる黒い潮流……。

その暗碧たる海原に揺れながら、水面に深い影を落とすのは、安房の海賊衆を乗せた関船である。総矢倉の上には、二百を越える水軍の兵がひしめき合っていた。

「こいは、えれえ事すた……」

主馬之助は、敵の細作を斃たおさんがために、後先もかえりみず、この関船に飛び移った自分の無謀さに思わず舌打ちをした。

矢倉の先端からは、水軍の鉄砲放ちが、廻船へ向けて第二撃を轟然と放った。篝火の明かりに心細く照らし出された廻船からは、逃げまどう乗組衆の怒号と悲鳴が漏れ聞こえてくる……。

戦国期における水軍の多くは、海賊と呼ばれる広い海域に君臨した独立武士団を、戦国大名達が海上輸送や海戦の主軸として麾下に加えたものであった。海賊は、元々、地域や血縁等により結束した海辺の土豪集団で、その中の一方は、倭寇となり大海を渡って異国へ侵攻し、もう一方は、国内の専門的軍事集団として大名配下の水軍となったのである。

彼らは、海洋戦術の専門家であると同時に優秀な白兵部隊でもあった。刀槍術はもとより、騎馬、鉄砲、築城とあらゆる戦闘知識を蓄積した一騎当千の強者達であったのだ。

関船の舳先に降り立った主馬之助は、たちまち刀槍閃いてたちかせた数十人の海賊どもに取り囲まれた。海賊といっても小具足出装の歴とした足軽兵である。

「小癩^{こしゃく}な若侍め。切り刻んで、鱧^{ふか}の餌^えにしてくれるわ！」

小薙刀を振りかざした敵が正面から斬りつけて来るのを、主馬之助は、電光石火、左半身^{はなみ}になって躲しざま、横殴りの太刀で顔面を撫で斬りにした。

「ぐわあ……」

主馬之助は、さらに踏み出して、もう一人の右袈裟を斬り下ろし、返す刀で、さらに一人の左胸を両断する。

「ひ、怯むな、敵は一人だ……」

いささか狼狽した敵の間隙について四、五歩を駆け抜けざま、車に構えた太刀を水平に薙いでさらに一人を斬った。そして、必死の形相で追いつがる敵に対し、くるつと後ろを振り向きざま大上段に振りかぶった備前兼光の重たい刀身を、えいっとなばかりに真っ向から振り下ろし、五人目の脳天を唐竹割にした。たちまち牡丹の花が咲いたように、鮮血と脳漿^{のうしょう}がばあつと四方に飛び散った。

「う、うぐぐ……」

これで、敵の動きが凍り付いた。

これだけの連続攻撃を流れるような動作で一呼吸の内にやってのけたのは、主馬之助の剣の冴えが、もはや並ならぬ域に達している証である。しかし彼は、一旦逃れると見せかけて、再び怒濤のごとく敵中に突っ込み、見事な総捲りでさらに四人の敵兵を一気に斬り伏せた……。

「……」

さすがに百戦錬磨の海賊どもも、この主馬之助の鬼神のごとき戦いぶりに言葉を失い、全員が両手を硬直させたまま後退って間合いを大きく空けた……。

「こらあつ、囲みを解くんじゃねえぞ！ そいつを船内に放てば大変な事になる」

突如、矢倉の上から大音声が響き渡った。

見上げると、真つ赤な小具足姿の武将が、怒髪天を衝く形相で朱

槍を立て、齒を剥きながら喚いていた。安房内房うちぼうの海賊大将、正木源七郎である。彼は、矢倉上から巨軀を躍らせると、たちまち主馬之助の五間ほど先にだんと降り立ち、朱槍をぶうんと頭上で大きく一回転させてから、ぴたりと中段に構えた。

「若造！ わしは、造海城主みづうみ、正木淡路守が一子、源七郎頼時じゃ。尋常に勝負してくれるから掛かつて来い！」

そう言つて、ひゅんひゅんと槍穂をしなせながら朱槍の柄をしごき始めた。

こいづが海賊の大将がい？ あんてな、頭さあ血い上つて、始末しまつなんねえなあ……。

主馬之助は、嘆息しながら緩やかに刀身を引き、左偏ひだりえ身の脇構えでぴたりと静止した。刀と槍では間合いが違つたため、迂闊うかつに近付いては、こちらの斬撃が届く前にたちまち突き殺されてしまう。勝機を掴むには、敵の攻撃の裏をかき、僅かな隙について手元に付ける必要があつた。

「受け太刀とは笑止！ 掛かつて来ぬなら、こちらから参るぞ」

源七郎は、穂先を低く下げ、石突をぐつと持ち上げる霞み下段の構えから、ざざつと摺り足で間合いを一気に詰め、疾風の速さで二度三度と槍を繰り出した。主馬之助が、その攻撃を辛うじて一寸の見切りで躲すと、今度は、裾払い、横突き、のぞき払い、一文字と攻撃を自在に変幻させ、槍体一如の流れるような連続技で激しく責め立てた。

笹の葉型の槍穂が潮風を切つて、びゅうびゅうと音を立てた。

こいは、えれえ者ものを相手にしたつぺ……。

主馬之助は、敵の猛攻の前に冷や汗を滴らせつつ、次第に舷へと追い詰められていった……。

こいなごつては、良^いがんめ！

彼は、源七郎が袈裟へと振り下ろした槍を躲しざま、えいっとその柄を鎬^{しの}で押さえ込み、そのままつつと刀身を滑らせながら敵の面前へと進み出た。と、見るや、「えいっ！」っと気合いもろとも跳ね上げた太刀で朱槍を真ん中から両断し、そのままの勢いで源七郎の顎を斬り上げた。

「ぎゃあ……」

源七郎が大きく仰け反る。すかさず主馬之助は、とどめを刺すべく渾身の刺突を見舞った。

「やあっ！」

「うぐっ……」

しかし。

主馬之助が刺し貫いたのは、海賊衆の手下の一人だった。正木源七郎の姿は、一瞬にして、そこから消え失せていたのである……。

か、変わり身か……？

房総正木氏には、代々忍術を使う者が多くいた。

相州三浦氏の末裔である彼らは、強力な水軍を率いるかたわら、その忍術による情報収集能力を生かして、ある時は里見に、またある時は後北条に、上杉にと巧みに同盟と裏切りを繰り返しながら、したたかに戦国の世を渡ってきた。

後に小田原征伐のとき、陥落した勝浦城から城主、正木頼忠の娘が、断崖絶壁より白布を伝って海へ逃れるという見事な忍法を世に披露している。この娘こそは、正木のくノ一であり、後に徳川家康の側室となつて紀伊頼宣、水戸頼房を生んだ於万の方であった。

啞然とする主馬之助の頭上から、あの怒号が降り注いだ。

「わしの顔に疵を付けるとは、小憎らしい奴だ！　遊びは、もうこれ位にして、一気にケリを付けてくれるぞ」

見上げると、いつの間に上ったものか正木源七郎が、先刻まで居た矢倉の上に仁王立ちになっていた。その両側には、火縄を燦らせた鉄砲放ちが左右三名ずつ、片膝を立てて主馬之助に狙いを定めていた……。

しまったあ……、ど、どうする？

主馬之助は、必死で身を隠す場所を探したが、どこにも見当たらず、いよいよ海にでも飛び込むしかないと覚悟を決めた。その時である。

突如、廻船の上空から数発の破裂音が鳴り響き、同時に闇を照らす火焰の花が咲いた。炎の花は、やがて火文字となり、正木源七郎はじめ、海賊衆の暗闇に慣れた目に、克明に焼き付いた。

「何だ、あれは！？」

火文字は、こう読めた。

まんてんかかい
瞞天過海

「お、おのれ……敵の船にも忍者がいたか」

そう呻くなり源七郎は、竹筒に収めていた硝薬を空中に放つと、同時に右手で印を結んで火天の真言を唱えた。

なうまく　さんまんだばだなん　あぎやなうえい　そわか

「えいつ！」

たちまち、彼が乗る関船の上空にも、火の粉を散らしながら炎の文字が浮き上がった……。

趁火打劫
ちんかたきよう

「ふはははーっ！ あの程度の商船など一挙に粉碎し、お宝を残らず奪い取ってくれるわ！」

齒を剥いて笑う源七郎であつたが、廻船側からすかさず火文字が返つてきたのを見て目を吊り上げた。

擒賊擒王
きんぞくきんおう

「何だとお……？」

源七郎は、顔面を朱に染め齒嚙みしていたが、突如、左右で鉄砲を構えていた手下六人が次々に悲鳴をあげて仰け反り、天に向かつて発砲しながら倒れた。源七郎は、慌てて後ろを振り向き、そして驚愕の声をあげた。

「い、いつの間にそこに居た！？」

関船の矢倉の中央に、忽然とゆうが立っていた。

斃された六人の鉄砲放ちの背中には、ことごとく彼女の放った棒手裏剣が突き立っていた。その先端に塗られた附子毒ぶしによつて、彼らは、一瞬のうちに葬り去られたのである。

ゆうは、小首を傾げながら挑発的なやぶ睨みで敢然と言ひ放った。
「主馬のせいで傷モンになつちまつたが……、その大將首、あたしがもらひ受けたっ！」

正木源七郎は、血走つた目を見開き、怒氣をはらませて大音声を張り上げた。

「こ、殺せえ！ その女を血祭りにあげろお！」

矢倉の上には、百を越える水軍の足輕兵がいた。彼らは、具足をかちやかちや鳴らしながら、大蛇がとぐろを巻くように、ゆうの周りをぐるりと取り囲んだ。みな一斉に得物を構え、徐々に囲みの輪

を縮める……。

不意に、ゆうがニヤリと笑った……。

続く。

浦賀水道へ海賊なんぞ斬っちゃあ！（４）

なうまく　さまんだ　ぼだなん　ばや　べい　そわか

小鳥のさえずるが如くゆうが風天の真言を唱えると、それに相呼応するように彼女の足下から一陣のつむじ風が舞い上がった。敵兵の手にする松明の炎が、じりつと赤い尾をたなびかせて揺らめく……。

と同時に、ゆうを取り囲む海賊衆の間からおおつという喚声が上がり、包囲の輪がゆるんだ。

輪の中心に、幻想的とも言える光景が広がっていた。

ゆうが巻き起こすつむじ風に乗って、無数の黒い枯葉のようなものが、月下にも鮮やかな金粉をまき散らしながら紙吹雪のように舞い上がったのである。

彼女の周りを旋回しながら踊り狂うその黒い帷とばしは、しかし次の瞬間にはぱあつと四方に霧散して、立ち尽くす海賊衆めがけ、ひらひらと襲い掛かっていった……。

「何だ、これは？」

「うわっ、息が出来ん！」

船ふな槍や長巻を手に油断なく身構えていた海賊衆は、皆一様に悲鳴を上げ、得物を取り落とし、目鼻や口を押さえて苦しがつた。

「くそっ、目をやられた、何も見えん……」

枯葉と見ゆるは、無数に羽ばたく茶毒蛾の大群であつたのだ。

高速に羽ばたく茶色い鱗翅りんしから無数の毒針毛どくしんもうを吐き散らしながら、ゆうの操る茶毒蛾の群は、執拗に敵兵の顔にまとわりついた。だが、悲鳴を上げ、狂ったように籠手を振るって毒蛾を払いのけた後、彼

らはもつと信じられないものを目にした。

いつの間にかゆうの姿がかき消えたその場所に、炮烙玉が二つ、夜目にも鮮やかに導火線から火を吹き上げていたのだ。

「……………ひつ、引けえつ、引けえーっ！」

一瞬、言葉を失っていた海賊衆が我に返って金切り声を上げた途端、海上の大気を揺るがす凄まじい轟音が続けざまに関船を襲った。

炮烙玉とは、球状の銅製炮烙のなかに火薬を詰め込んだ炸裂弾である。

殺傷能力を高めるために鉛玉や鉄片と一緒に詰めてあり、爆発と同時にこれを榴弾のように撒き散らして多数の敵を一度に葬り去る恐るべき兵器である。

数十人の敵が爆風で吹っ飛び、また辛うじて踏みとどまった者も深手を負い、鼓膜が破れて耳から血を流していた。それでも視力を奪われなかった者は、必死になってゆうの姿を探し求めた。

ゆうは疾駆していた。

潮氣を含んだ夜氣をその白い頬に受け、風のように真一文字に、矢倉の尖端で仁王立ちになる安房の海賊大将、正木源七郎を目指して……。

「笑止！」

迫り来るゆうの姿を見とめ、源七郎の五体からたちまち暗黒のような剣氣が立ち上った。彼は、背に斜めに負った三尺余りの剛刀を、その豪華な朱塗りの鞘からぞろりと引き抜いた。

眼光、炯々、口辺には不敵な笑みを漂わせ、厚重ねの刀身をとんと右肩に担ぐ……。

一撃必殺の構えだ。

対するゆうは、逆手に握った抜き身の脇差しを胸元に引き寄せ、空いた方の掌に手裏剣を忍ばせたまま、牝鹿の軽やかさで源七郎との距離を詰める。

潮風が一瞬止んだ。

先に攻撃を仕掛けたのはゆうだ。

無言のまま彼女の放った手裏剣が、ひゅんと風を切って源七郎に襲い掛かる。と、同時にゆうの細身がふわりと跳躍した。

源七郎は、一瞬体勢を崩しながらも体を開いて手裏剣を躲し、その間も油断なくゆうの姿を目で追い続ける。

ゆうの姿が月と重なった。

夜目にも鮮やかな辻が花染めの小袖が、三尺余の刃圈に飛び込んでくる。源七郎の目が、獲物に襲い掛かる蛇のそれになった……。

「もらったあ！」

源七郎は、勢いよく一步を踏み出しざま刃風をごとく唸らせて、闇を両断した。天女のごとく舞うゆうの体を、源七郎の振り抜いた剛刀が断ち切ったのである。

悲鳴はなかった。しかし、源七郎の黒々と髭に覆われた冷酷な口元が、勝利を確信してにやりと嗤った……。

次の瞬間、その口が大量の血を吐いた。

驚きのあまり見開いた源七郎の両目が、その視線をゆつくりと下に向ける。そして彼は、信じられないといった表情で己の左胸に深々と突き刺さる脇差しを見つめた……。

ごふっ。

再び源七郎が真っ赤な血を吐いた。その飛沫が、脇差しの柄を両手できっちり握りしめるゆうの白い背中に降りそそいだ。

彼女は、全裸だった。

跳躍したかに見えたは彼女の小袖一枚のみ、それは、夜風に舞い

上がった変わり身の姿であつたのだ。

ゆうが腰を捻って脇差しを引き抜くと、血がただつと糸を引いて床板の上に注がれた。源七郎の巨体がぐらりと蹠踉よろめく。ゆうは、表情も変えず、そのまま脇差しを一閃させた。

こつんと頸骨を断つ音がして、源七郎の首が床に転がった。首を失った体は、それでも矢倉の上に両足を踏ん張ったまま佇立している。その足下で、ざんばら髪を床に踊らせて、源七郎の血の気を失った唇がわなわなと震えた。

「……………生かしては帰さん」

そう言つて、血で赤く染まつた歯茎を剥きだし、にたりと笑つた。

……………なうまく　さんまんだぼだなん　あぎやなうえい　そわか

呻くように火天の真言を唱えたあと、源七郎の眼球がくるつと裏返つた。同時に、右手に提げた剛刀をがらんと取り落として首無しの胴体がどうと床の上に崩れ落ちた。

すると、それが合図のように船縁のそこかしこからぱちぱちと火の手が上がり始めたのである。

「し、信じられん、お頭がやられるとは……………」

「みんな、引けえーっ、引けーっ！」

生き残つた海賊の手下どもは、源七郎の死を見るや、我先にと暗い海面へ飛び込んでいった。それを、仲間の漕ぎ寄せる小早舟が、手早く助け上げてゆく。

ゆうは、裾の裂けた小袖を身にまといながら大声で主馬之助を呼んだ。

「おい、主馬ーっ！　生きてるかあ？」

ややあつて、はしご段をよじ登つてきた主馬之助の丸く人懐こい顔が、不安げに矢倉の上を見渡した。

「ひゃあ！ こいは、随分とえれえ事になつてんなあ……、お、お、おゆうさんは、大丈夫がい？」

「あたしなら、大丈夫さ……」

そう言いながら、ゆうは、次々と船首を回して闇の彼方へと引き返してゆく海賊船を横目で睨んだ。

「悪いが、あたしはここであんたと別れるよ」

「えっ？」

「北条の奴らに素性を明かしたんだ、三千両の金塊なんかと一緒に相模の湊へ行ったら、あたしはたちまち捕らわれてしまうよ。ふふふ……可愛いやつだ、そうがっかりするな、鎌倉に逗留していれば、その内また会えるさ」

含み笑いしながら、ゆうが手招きした。主馬之助は、傍目にもがつくりとうなだれながら、とぼとぼとゆうの側に行く。彼女の笑みが妖艶さを増した……。

「なあ、主馬、あんたに頼みがあるんだ」

「……何だいよ？」

「あたしの代わりに、この密書を届けてくれないか。あんたは、あの塚原ト伝の弟子だ、このまま堂々と相模へ乗り込んでいっても、誰^{すい}何されないだろう？」

言いながら、ゆうは、細く白い腕をくねくねと首に巻き付けてきた。手で襟^{えり}を合わせていただけの小袖が、はらりと前をはだける。

主馬之助は、一瞬驚いて眸子を睨ったが、ゆうの喘ぐような甘い息が鼻先に吹きかかると、うつとりと目を細めた……。

「さあ、船に火が回っちまう前に、この密書を持って向こうの廻船に飛び移ってくれ」

「み、密書って……何処に？」

「……知ってるくせに」

ゆうは、立ったままゆつくりと足を開いていった。やぶ睨みに主

馬之助の顔を見上げる。

「さあ、早く……」

そう言い終わるや、彼女は、頭をわずかに傾けて、主馬之助の唇に吸い付いてきた。

「……！」

甘い息と同じ味がした。主馬之助は、くらくらと目眩がしそうになりながら、必死にゆうの小さな背中を抱き寄せた。

勢いを増した炎の向こうから、清水太郎左衛門の怒号が近づいて来る。

「おつ！ 二人は無事かあ！ 返答いたせえ！」

矢倉の上は濛濛たる黒煙に包まれ始めた。主馬之助は、何か喋ろうとするのだがその口をしっかりとゆうに塞がれているため、一声も出す事が出来ない。

彼は、覚悟を決め、背中に回していた己の手を徐々に下げていった……。

闇を舐める紅蓮の炎が火の粉を舞い上げ、黒煙で天を衝き、暗澹たる海面を眩く照らしている。破壊された舟の残骸と夥しい死体を舐め、舐め、太郎左衛門の操る小船が波に揺られながら漕ぎ寄つて来た。

「海賊どもは、はや逃げ散った！ 早くこっちに飛び移れえ！ もうすぐその船は沈むぞお！」

太郎左衛門の怒声を意識の片隅で聞きながらも、主馬之助は、全く別の事に神経を集中させていた。

女の体は、よく分がね……。

冷や汗を滴らせながら、彼は慣れない手つきで背中から尻、太ももへと順に手を這わせていく。やがてその手は、はだけた小袖の中に潜り込みゆうの肌に直に触れた。

一瞬、ゆうの腕に力がこもる。

手に吸い付くように滑らかな肌の感触を確かめながら、主馬之助の指は太ももの内側を這い、やがて竹筒が隠されているであろう場所に通りと、おおよその見当をつけ、恐る恐るその指先をすべり込ませた。

「くっ……」

ゆうが唇を合わせたまま大きく息を吸い込んだ。主馬之助は、思わず窒息しそうになり、喘ぎながらようやく鼻で息を継いだ。きな臭い空気が肺に流れ込む。

「おうい！ 生きてはおらんのかあ？」

太郎左衛門の声がだんだん切迫したものとなってきた。今や主馬之助とゆうは、地獄の業火にぐるりと取り囲まれていた。

主馬之助は、あせっていた。密書の収められた竹筒を彼の指先が探り当てるたび、ゆうが締め付け、熱湯がそそがれ、再びするりとその指を逃れてしまうのだ。

いかんいかん、落ち着け……こいは、剣術の修行と同じ事なんだ。捉え難きを捉える……無明の中の有明……。

おん まりし えい そわか

主馬之助は、拍子を計って深く指先を潜り込ませると、竹筒の尖端をしっかりと摘み一気に引きずり出した。

「くっくっくっ！」

ゆうの体が大きくわなないた。渾身の力を込めて主馬之助を抱きしめる。それに応えるように再びゆうの華奢な肩を抱き返した主馬之助の手には、彼女の温もりが残る青竹の筒がしっかりと収まっていた。

やがて唾液の糸を引きながらゆっくりその唇を放すと、ゆうは、主馬之助の袴にすがりつく形でするとその場に座り込んだ。

「……………い、いいかよく聞け。相模へ着いたらすぐに早川殿の館へ行くんだ……………そして、今川家臣、朝比奈備中守を訪ね、その竹筒を渡してくれ……………、北条方の忍者どもが屋敷の警護をしているから油断するなよ……………くれぐれも奴らにだけは……………密書の内容を知られないようにな」

喘ぎ喘ぎそう言つと、ゆうは主馬之助の体をどんと突き放した。

「行け！ この船は、もうじき沈む」

二、三步よろめいて主馬之助が振り向くと、そこにはもう、ゆうの姿は無かった……………。

「あ、あれ……………？ お、おゆうさん？」

狐につままれたように茫然としながらも、彼は、視線を游がせ必死になつてゆうの姿を探し求めた。しかし、燃えさかる炎と立ち籠める煙の中、彼女の気配は跡形もなくかき消えていたのだ。

「おつ！ もう限界だ！ 我らの船を出してしまふからな！」

おゆうさん、きつとまた、どこかで！

後ろ髪を引かれる思いで竹筒を懐にしまつと、主馬之助は、太郎左衛門の声が聞こえてくる辺り目掛けて猛然と駆けた。行く手には轟々たる炎の壁が立ちはだかつている。彼は、怪鳥のごとく跳躍すると同時に、素早く刀の鯉口を切った。

おん まりし えい そわか

「えいっ！」

備前兼光の刀身が火焰を照り返してぎらつと瞬いた。と、次の瞬間、門戸が開かれるように分厚い炎の壁が左右に分かれたのだ。

「おおっ！」

清水太郎左衛門が見上げる中、主馬之助の巨軀が勢いよく炎から躍り出し、そのまま水飛沫を跳ね上げ海面に飛び込んだ。

太郎左衛門は、燃えさかる船を見上げ、また視線を海面に落とし、そして信じられないといった表情でつぶやいた。

「一剣にて炎を断ち切るとは……、この男は一体何者だ？」

茫洋たる漆黒の海原に、再び風が戻ってきた。

それから小半刻ほどして、安房の海賊大将、正木源七郎の骸むくろを乗せた関船は、寂寞じやくまくとして浦賀水道の藻屑となり果てたのである。

続く。

妖怪武田信玄と甲斐の荒ぶる神（１）

竜の雲を得るが如く東海一帯を制した覇者、今川義元が、桶狭間の露と消えてから十年……。

八幡太郎義家を祖とし、代々駿河守護職を拝して、その上、遠江や三河までも飲み込んだ今川家のその後の落魄ぶりは、まさに坂を転がり落ちるようなものであった。

まず、義元の死を受けて真つ先に背離した松平元康の手によって三河の地が切り取られ、次いで遠州^{そうけき}忽劇の果てに遠江での力をほぼ失った今川勢は、以後、本拠地である駿河国だけでも死守したいという切実なる思いを胸に、駿府の今川館に引きこもったのである。

しかし、この今川方の混乱に乗じて不気味にその鎌首をもたげる武將がいた。

甲斐の武田信玄である。

信玄にとって桶狭間で死んだ今川義元は義兄にあたり、また同じく義元と義弟の関係にあった相模の北条氏康を交えて、甲斐、相模、駿河の三国は同盟関係にあった。

東海の地に今川義元が君臨するかぎり、自分が上洛して天下に号令をかける見込みはないとふんでいた信玄であったが、義元の死によりその障壁が取り払われた今、彼が長年待ち望んでいた千載一遇の機会を迎えた事になる。

しばらくは三国同盟の手前、様子見を決め込んでいた信玄も、三河の徳川家康が次々と今川の旧領を切り取り始めると悠長に傍観しているわけにはいなくなってきた。

腰抜けの上総かずさ（今川氏真）では心許なし。このままでは、三河の若造に全てを持っていかれる！

実は、信玄には京の都などより、もっと切実に手に入れたいものがあつたのだ。

人は城　人は石垣　人は堀　情けは味方　仇は敵なり

などと彼が本当に言ったかどうか定かではないが、戦国武将、武田信玄の最大の武器は、武田二十四将と言われる家臣団でもなければ、向かうところ敵なしと言われた武田騎馬隊でもない。ましてや、山本晴幸や真田幸綱の軍略などでもなかった……。

武田信玄の最大の武器は金きんである。

戦にかかる莫大な費用や家臣の武功に対する恩賞、敵対国を調略するための見せ金や公家、將軍家に働きかけるための献上品。それらの殆どが、甲斐で産出される金でまかなわれていたのだ。

ところが、この頃になると甲斐の金山は、あらかた掘り尽くされてしまっていた。

甲斐の早川金山から山一つ隔てた所には、駿河の安倍金山がある。さらに隣国駿河の地を見渡せば、井川金山、富士金山など、まだ有望な金山が国境となる山を隔てて幾つもあつた。（実は、鉱脈は地下で繋がっていたのだが……）

この駿河の金山を、信玄は喉から手が出るほど欲しかったのである。

やがて、彼は欲望を成就するための絵図を実行に移し始めた。まず、駿河侵攻に異議を唱える嫡男の太郎義信を東光寺に幽閉、

自害に追い込み、彼の正室であつた嶺松院を、実家である駿府今川館へ送り返したのである。

『北条五代記』では、信玄のこうした行為をこう糾弾している。

五常（仁・義・礼・智・信）の道を知らず、六親不和であつて、三宝の加護があるはずもない。

今川義元の後継、氏真うじざねは、この行為への報復として家臣、葛山氏かすのやま元に命じ甲州への塩留めを行った。しかし、これは逆に信玄に対して駿河を責める絶好の口実を与える事となつたのである……。

甲駿国境を越えて武田の大軍が駿河の地に押し寄せたのは、永禄十一年暮れのことであつた。

迎え撃つた今川軍二万は、瞬く間に金文字に輝く孫子の軍旗つしに蹂躪うりんされ、怒濤の如く駿府になだれ込んだ武田軍は、賤機山しずはたを占領し、今川館に火を放った。

駿府を逐われた今川氏真は、掛川城に逃げ込むが、やがてそこも信玄と相呼応して挙兵した徳川家康の軍勢に包囲され、半年近くの籠城の末、城を明け渡し義父である相模の北条氏康の元へ逃れたのである。

以て、東海の覇者と謳われた戦国大名、今川氏は、遂に滅亡したのであつた。

妻の実家である相模の早川に落ち着いた今川氏真は、しかし駿河への復権を完全に諦めた訳ではなかつた。彼は、北条氏康をして信玄を牽制させるとともに、関東管領である上杉輝虎（謙信）に対して再三に渡り密使を遣わし、信玄の不義を訴え、討伐を懇願したのであつた。

斉藤主馬之助がゆうから預かつた書状も、そうした今川氏真の懇

望に対する輝虎からの返書の一つであつたのだ……。

安房の海賊大将、正木源七郎との死闘を終えた翌日、主馬之助は無事小田原の湊に降り立った。

湊は、全国各地からやって来た商人はもとより、異国人なども頻繁に往来し、その賑わい振りは江戸や六浦の比ではなかった。

主馬之助は、初めて目にする紅毛人の異様にたじろいで後退り、清水太郎左衛門主従から失笑を買った。

「はっはっは！ あれは海の方こうから来た阿蘭陀人^{おらんた}じゃ。やつら獣の肉は食すらしいが、人はとって食わぬからご安心めされよ」

「あいやまあ……」

太郎左衛門は、どうやら主馬之助の木訥な人柄^{ぼくとつ}が気に入ったようで、親しげに笑いかけてくる。

「斉藤殿、今夜はわしと一緒に家来の屋敷に泊まらぬか？ おぬしの武勇伝がもつと聞きたい、ひとつ飲み明かそうじゃないか」

そんな清水太郎左衛門の熱心な招きを断り、小田原城下を尻目に彼が早川の地に辿り着いた頃には、秋冷をはらんだ箱根の山気が薄紅色の斜陽を受け、濛々とした夕靄^{ゆづもや}となって立ちこめていた。

北条氏康が、娘である早川殿の為に建てた館は、笠懸山からの緩い傾斜地を利用した方形館で、早川の清流を引き入れた水堀に虫時雨が憂愁を誘う、閑静な佇まいであった。

見渡せば、一面の蜜柑畑が夕日を受けて、炎上したように煌めいている……。

編笠の前を上げ、早川館の、まだ木肌の真新しい冠木門を遠目に眺めて、主馬之助は深いため息をついた。

どうにも、気が寒いつぺ……。

ゆうから預かった密書を今川家臣、朝比奈泰朝に手渡すにためは、やはり主馬之助がそれを預かるに至った経緯を説明せねばなるまい。

しかし生来、口べたな主馬之助には、これが何とも億劫でならなかったのである。

もうすぐ日が暮れつど……、使いは明日にすつぺえ。そう言つて彼が踵を返し、斜面を下り始めたときである。

ふと、主馬之助の前方で微風が揺らぎ、彼は本能的に歩みを止めた。気が付けば、七、八間ほど先に影法師のようなものが立ちはだかつている。

いや、よくよく目を凝らして見れば、それは垢じみた檻褸^{ぼろ}をまとつた一人の法師であつた。

その、眉ずみを刷いたように薄ぼんやりとした姿は、朧な夕景にあつて、夢幻かと思えるほど見事に気配を殺していた。その法師は、手にした錫杖^{しやくじやう}をしゃんと鳴らしてから、低いがよく通る声で言つた。「見かけぬ顔だな、この館に何の用だ？」

気が付けば主馬之助の四方を、同じような法師がぐるりと取り囲んでいた。どの顔も、一見して仏徒とは思えぬような幽鬼の如き陰惨たる雰囲気をまとっている。主馬之助は、後ろ足を半歩引いて油断なく身構えながら、ふんと鼻で笑つた。

「ははあ……、おめらが、おゆうさんの言つていた風魔とかいう乱波がい？」

「……重ねて訊く、この館に何用得参つた？」

「ふん！ そーたこと言えつかよ」

日はすでに翳^{かげ}り始め、紅霞^{こうか}をかすめる斜暉^{しゃき}は、箱根連山の稜線から燃えるような一筋の光芒となつて主馬之助たちの足下に等しく長い影を這わせていた。葉を枯らした広葉樹林の枝々が、夕雲を驚掴みにせんとする老人の手のように、おどろおどろしく天に向けて突き上げられている。

風魔の檻褸法師は、底光りする目をすうつと細めて冷淡に口元を歪めた。

「ならば致し方ない……、いずれ甲斐の透破か越後の軒猿であろうが、我らはそういった連中を排除するために御本城様より遣わされておるのだ。貴様には、ここで死んで貰うぞ」

錫杖は、仕込み杖であつた。

五人の風魔は、抜刀すると同時に、それまで内に秘めていた殺気を炎のように燃え上がらせた。

仕込み杖の刀身は細い。

そのうえ無反りなので、太刀とまともに斬り結べば折れてしまう危険性がある。だから、それを好んで扱う者たちは往々にして一撃必殺の難剣を遣うのだ。

五人の風魔のうち二人が突然、猿まじいの如く間道脇にそびえる大樹に駆け上った。同時に、残りの風魔が主馬之助から等しく五間の距離をおいて、彼の周りをゆつくりと旋回し始める。

「あにすつ気だ、おめーら……？」

主馬之助は、油断なく敵の動きに目を配りながら、腰を落とし、備前兼光を刃先を外側に向けてぞろりと抜き放った。あれほど海賊と激戦を交えたにもかかわらず、彼の刀はほとんど刃こぼれしていなかった。

彼は、半身になると、その刀を八相に構えた……。

多数の敵を相手にするとき、四方を囲まれて戦うのは得策ではない。激しく動き回って敵を分散させ、各個撃破するのが上策である。主馬之助は、刀を脇に引いて誘いを見せている正面の敵に向かって、猛然と駆け寄った。応じて敵は後退する。後ろの二人が地面を蹴立て追いつがってきた。樹上にいる二人も、枝から枝へ巧みに飛び移りながら執拗に追跡してくる……。

と、その時、逃げていた正面の敵が突如反転して斬り込んできた。同時に鳥の羽ばたくような音をさせて、頭上の敵が舞い降りてくる。主馬之助は、正面の敵に気を取られて危うく頭上からの一撃を浴び

そうになったが、寸でのところで体を捻りこれを躲した。しかし、後ろに控えた二人が、そこを見計らって猛然と刀を突き入れてくるのだ。

「うひゃあ！」

主馬之助は、たまらず地面をごろごろ転がった。その後を追いかけるように手裏剣が地面に突き立つ。主馬之助は、踏み留まって手裏剣を打ち払うと、のろのろと起き上がり再び剣を構え直した……。風魔は、さっきと同じように二人が再び樹上に駆け上がり、残りの三人が主馬之助から五間の距離をおいて取り囲んだ。

「あー痛で……、おめらのせいで、つつ転んだっぺよ！」

体中すり傷だらけになった主馬之助が泣きべそをかきながら恨みごとを言った。そんな彼の周りを敵がゆるゆると回転し始めた……。

野郎めら、斬り合いの駆け引きが巧みだっぺ。うかうかと乗せられたら、殺られっど……。

主馬之助は、今度は若干背を丸めて両足を踏ん張り、刀身を下段に構えた。

さっきのように動き回るのは止め、返し技で迎え撃つべく、瞑目して精神を研ぎ澄ませる。

おん まりしえい そわか

やがて、さやさやという葉擦れの音が、主馬之助の苛立った心を洗い流し始めた……。

続く。

妖怪武田信玄と甲斐の荒ぶる神（2）

風魔とは相州乱波、すなわち相模の後北条氏に仕える忍びの者である。

彼らは元々、箱根や足柄の峠に巣くう山賊であつたが、北条早雲に見出され、以後百年以上の長きに渡つて後北条氏を暗黒面から支える影の存在となつた。

『北条五代記』には、風魔の事がこう記されている。

これらの者は盗人であつてまた盗人でなく、心賢く勇ましく、邪道の者どもである………自分の国にいる盗人をよく穿鑿し、尋ね出して首を切り、己は他国へ忍び入り、山賊・海賊・夜討ち・強盗して物を取ることが上手である。才知があつて、謀計調略を巡らすこと、普通の考えでは及ばない。

風魔一党は、二百人いて『山』『海』『強』『竊』の四隊に分かれ、各々の特殊技能を生かしながら極秘の任務に就いていた。河越夜戦や黄瀬川の戦いといった後北条氏にとって大一番となる合戦では、その裏で必ずといっていいほどの風魔が暗躍している。その勇猛果敢ぶり、変幻自在ぶりは敵兵を大いに悩ませ、そしてこの上もなく恐れさせたのである。

陽は、西の彼方、黒くそびえる箱根外輪山の峰々と天を熾火の^{おきび}ように焦がす暁雲との境目から、最後の一筋をしばらく出していた。金風は、すでに秋冷を孕んでいる。落ち葉が赤光をはね返して、幻想的に煌めきながら舞い散っている……。

主馬之助は、腰を落とし背を丸め加減にして備前兼光の刃先が地面に触れるほどの下段に構えていた。切っ先は夕日を映し、瞑目し

た彼は、意識を解放させ敵の僅かな気配を心の内に読み取っていた。風の声、葉擦れの音、川のせせらぎが森羅万象の穏やかな表情となって主馬之助の澄んだ心に語りかけてくる……。

塚原ト伝が彼に伝えた『一つの太刀』は、特定の型を持つ技の名称ではない。言うなれば刃^{やいば}をもって敵と対峙するときの心構えのよなものである。恐怖心、功名心、その他ありとある一切のこだわりを捨て、心を空しくする事によって得られる研ぎ澄まされた精神により勝機を見出す、そんな心の一法であるのだ。

後に葵三代に渡って兵法指南役をつとめる柳生宗矩の『兵法家伝書』には、

積んで多端に涉り、窮むる所一心に歸し、一心多事に涉り、多事一心に収まる。畢竟茲^{ひっきやう}に在り。
と記されている。

兵法においては、何よりもその心のはたらきが究まったときこそ、相手に対しておこなう仕掛け、手立て、工夫が上手くいくと説いているのである。

風水の音をきくと云ふ事、上は静に、下は気懸^{こえ}に持つ也。

風や水の音を聞き分けられるほど心を平静に保ちながらも、その実、僅かな敵の動きをも見逃さぬよう心を鋭敏に研ぎ澄ます。これこそ柳生流で言うところの下作^{したうくり}であり、無刀の技にも相通じる兵法の極意なのである。

一つの位とて天の時なり 一つの太刀とて地の利なり……

塚原ト伝の説いたこの『天』と『地』とは、すなわち宗矩が言うところの、

人の様々のわざ、きどく、皆心のわざなれば、又天地に此心あり。是を天地の心と云ふ。

であり、いざ真剣で立合に臨んだときの心の有り様、妙覚を表し

ている。

天地両儀を合比し……

とは、言うなれば平常心の事だ。

宮本武蔵の著した『五輪書』の水之巻にはこうある。

兵法の道におゐて、心の持ちやうは、常の心に替る事なかれ。常にも、兵法の時にも、少しもかはらずして、心を広く直にして、きつくひつばらず、少しもたるませず、心のかたよらぬやうに、心をまん中におきて、心を静かにゆるがせて、其ゆるぎのせつなも、ゆるぎやまぬやうに、能々吟味すべし。

敵の刃を前にしても心を穏やかに、平静に保つ事が出来れば、敵の奇襲、計略に対しても千変万化せんぺんばんかに應ずることができ、けっして不覚をとる事はないというのである。

しかし、柳生宗矩が

此心をとくと見付けたる人はまれ也と也。

と言っているように、この佳境に達するのは生半なまなかなことではない。過去に塚原卜伝から一つの太刀の妙境を正しく伝授された武芸者は、足利義輝、北畠具教、松岡兵庫助の三人だけであつた。

主馬之助は、自如として切っ先を垂れている……。

その周りを五間の距離において三人の風魔がゆっくり回転していた。樹上では二人の風魔が、獲物を狙う猛禽のように虎視眈々と斬り掛かる機会を窺っている。

風は、次第に刺すような北風に変わり、森の奥で梟ふくろうが鳴き始めた。囲みの輪が、徐々に縮まってゆく……。

突如、敷き詰められた枯葉を踏み鳴らし、主馬之助の背後に回った敵が無言で斬りつけてきた。同時に、鳥の羽音をさせて、樹上の敵が落下する勢いにまかせ白刃を振り下ろしてくる。

殺気が剣風を呼び、枯葉がくるくると舞い上がった。

主馬之助は、未だ目を閉じたまま微動だにしない。しかし、彼の研ぎ澄まされた精神は、三人の風魔の動きを完全に見切っていたのだ。

おん まりしえい そわか

備前兼光の刀身に刻まれた摩利支天の真言が輝き出す。

「やつ！」

主馬之助は、くると反転するや背後の敵が仕込み杖を袈裟に斬り下げてくるより一瞬速く太刀を跳ね上げ、相手の手首を斬り飛ばした。

「ぐわあ……」

そして彼は、太刀を振り上げた勢いそのままにふわりと跳躍したのだ。

落下する勢いに乗って主馬之助を拝み打ちに斬り下げようと図った二人の風魔は、標的が飛んだ事により完全に目算を誤り斬撃の拍子を外された。そのわずかな隙を衝いて主馬之助の太刀が、刃風を立て疾風のごとく旋回した。

「ええいつ！」

骨を断つ音がして血の霧がたなびいた。

それぞれ片足首を斬られた敵は、上手く着地出来ずにそのまま地面を転がった。

「くそつ、不覚！」

残った二人の風魔は、完全に機先を制された形となり、一步も踏み出すことが出来ずにいた。その二人に向かって主馬之助が猛虎のごとく突進する。

敵は、狼狽して後退りながら手裏剣を投げ打ったが、主馬之助は、それを躲しておいて、敵を一撃のもとに斬り捨てるべく備前兼光を大上段に振りかぶって迫った。

「やあああああ！」

三尺五寸の刀身が、暉々としてついに敵をその刃圈に捉えたその時である。

突然の破裂音とともに眩い閃光が走り、そのまま濛々たる白煙が立ちこめ主馬之助の行く手を遮った。

くそつ、煙玉か！

咄嗟に目をかばい姿勢を低くした主馬之助が、再び剣を構え直してゆっくり立ち上がると、視界が晴れゆくその向こうに忍者刀を斜めに背負った新手の風魔が七人、腕組みしながら不敵に立ちはだかつていたのだ。

「さすがに鳶加藤の籠手を斬り飛ばしただけの事はあるな」

真ん中に立つ背の高い風魔が言った。喉が潰れたようなもの凄い悪声である。彼は、何故か恐ろしげな鬼面で顔を隠していた。

「枝劣りの駿河殿なんぞにちよろちよろ動き回られると、我が御本城様が迷惑なされるのじゃ。さあ、大人しく越後からの密書とやらを渡してもらおう」

「お断りだつぺ！」

「……私を甘く見るなよ」

「ふん！ そーゆうのを夜郎自大やろうじだいつつんだ」

鬼面の風魔は、左右に控える手下どもを制して言った。

「お前達は手出しするなよ」

そしてふわりと身を躍らせると、主馬之助に向けて礮しやうてを三つ矢継ぎ早に投げ打ち、同時に背中の忍者刀を抜き放って疾駆した。
速い！

主馬之助は、頭蓋を粉碎するほどの威力を持つ石の塊を二つまで何とか躲したが、最後の一つを避けきれずに刀身で受けてしまった。しかし三つ目の礮は、鶏卵に粉薬を詰めた目潰しであったのだ。ぱんと破裂音がして、たちまち唐辛子や砂鉄を調合した目潰し薬が

霧散し、主馬之助は反射的に腕で目をかばった。

それは、ほんの一瞬の事であった。

しかし鬼面の風魔は、次の瞬間には主馬之助の背後に回り込み、白刃を主馬之助の喉元にぴたりと押し当てていたのだ。それを見て、手下どもが野卑た含み笑いを漏らした。

「さすがはお頭だ、あんな田舎侍じゃてんで歯が立たねえぜ」

ところが鬼面の風魔は、その悪声をしぼり出すようにして低く呟いたのだ。

「……見事だ」

手下どもがあつと叫んだ。主馬之助は、自分の首と敵の刃の間に、いつの間にか備前兼光の刀身を滑り込ませていたのであった。

「小癪な」

鬼面の風魔が地面を蹴って飛び退いたその瞬間、主馬之助の太刀がさつと閃き、かつんと乾いた音がした。

「くっ！」

牙を生やした口が耳まで裂け、金色の目を剥いて睨みつける鬼の面が美事に真ん中から割れ、からんと音を立てて地面に転がった。

そして、鬼面の下からは　　思わず息を呑むほど、美しい女の顔が現れたのだ。

「どうやら私は、お前の腕を見くびっていたようだな……」

凜とした女の声である。してみると、あの悪声は作り声だったのである。

「今の騒ぎは何事でござる!?」

その時、早川館の冠木門から二十人ばかりの侍が、刀槍を手にとやどやと飛び出してきた。今川氏真の家来衆である。女風魔は、たちまち彼らと主馬之助の間に挟まれる形となった。

「ここは早川殿のお屋敷だ、貴様らここで何をいたしておる?」

今川家来衆の中から、巖のように逞しい武士が素槍を手にずんずん歩み出てきて、戦場往来で鍛え上げたよく通る声で詰問した。

「わしは、今川家臣、朝比奈備中じゃ。この場所で騒ぎを起こす事は許さんぞ。……………ん？ 貴様ら乱波だな、おのれ！ さては我が殿の寝首を掻きに来おったか！」

煌びやかな緞子とんすの胴衣を着た朝比奈備中守は、九尺はあろうかという大身の槍を頭上でぶうんと振り回すと、穂先をぴたりと中青眼につけた。女風魔は、舌打ちして主馬之助の方に鋭い一瞥をくれてから、身をひるがえし備中守に向かって猛然と突進した。

「来るか、推参者すいさんものめえ！」

破鐘われがねのごとき大音声を張り上げて朝比奈備中守は、ぐつと腰を落とし、戦場で数多くの将兵を斃した必殺の刺突を見舞った。

「やあーっ！」

しかし次の瞬間、そこに居合わせた者たち全員が啞然となった。

備中守が稲妻のごとく突き出した槍の穂先が、女風魔の体を美事に貫くかと思われた瞬間、彼女の瘦躯がふわりと跳躍し、長々と突き出された槍先にちよんと乗ったのである。のみならず彼女は、槍の上を軽やかに駆け抜け、驚いて目を剥いている朝比奈備中守の頭を蹴って、ぽーんと家来衆を飛び越えたのだ。

その超人的な身ごなしに誰もが言葉を失った。

やがて備中守が、満面を朱に染めて、

「おのれえ！ 武士の頭を足蹴にするとは無礼千万、ただでは済まさぬぞお！」

と吼えながら振り返ったが、女風魔の姿は、もはや何処にも見当たらなかった。入れ替わるようにして、春風駘蕩しゅんぷうたいとう、伸び伸びとした爽やかな笑い声が門の内から聞こえてきた。

「はっはっは、左京よ、相模の乱波に美事一本取られたな」

やがて冠木門を潜って現れたその笑い声の主は、琵琶木太刀やじぎを手に悠然とこちらに歩み寄ってきた。家来衆が様子を改め、恭しく頭を下げる。その男は、白いさらしの小袖に半袴という軽装であった

が、脱ぎ下げた肩衣の背にはしっかりと足利の二つ引き紋を背負っていた。

「あれは、恐らく風魔小太郎であろう。相手が悪かったな、左京。はっはっは……」

左京と呼ばれた朝比奈備中守は、憤懣やる方ないといった表情であつたが、やがて主馬之助の存在に気付き大声で呼ばわつた。

「そのほうは一体何者じゃ？　なぜ風魔とやり合つておつた？　返答次第では、ただ帰さぬぞ！」

「わ、わ、私は、斉藤主馬之助といつて、塚原土佐守様の舎弟でございます。お、お、おゆうさんから、こ、こ、この書状を預かつて……」

懷中をまさぐっていた主馬之助は、そこで「あれ？」と言つた。ゆうから預かつたはずの、密書が入れられた竹筒がないのである。

「お、おかしいな、確かにここに入れといたつぺよ……」

「……おぬし、あの塚原ト伝の弟子であつたか。で、ゆうに頼まれて密書を届けに参つたとな？」

「そ、そうだつけど……あれえ……おかしいな、密書が無い……」

そのとき、再び爽籟そうせいのごとき爽やかな笑い声がした。

「はっはっは、さては土佐入道のお弟子さん、あんたも風魔小太郎にまんまとやられたね」

主馬之助は、はつとなつて顔を上げた。

「さては、あの時……」

先刻、風魔小太郎に背後を取られたとき、彼女は、隙について主馬之助の懷中から密書をかすめ取つていたのだ。

「風魔は、もともと盗賊だったと聞く。きっと物を盗むのが大層上手いんだろう」

「も、も、申し訳も御座いません……」

その場に平伏する主馬之助に向かつて、

「まあまあ、顔を上げなさい、風魔小太郎が相手じゃ仕方もない。

あなたも骨を折ってわざわざここまで届けて下すつたんだ、こちらこそ申し訳ないというもの」

そう爽やかに語りかける身分ありげな男を訝しんで、主馬之助は、おそろおそろ訊ねた。

「あ、あなた様は、一体……？」

男の代わりに、朝比奈備中守が胸を張って答えた。

「この御方こそ、我らが御屋形様、今川家第十代御当主であらせられる」

「ええっ？　じゃ、じゃあ……駿河守様……？」

「はっはっは！　駿河は信玄めにまんまと盗み取られた。いずれ取り返してやるつもりだが、今は浪人の身じゃ、上総介と呼んでくれ」

光風霽月、今川氏真の高らかな笑い声が宵月に届けとばかり、星天に吸い込まれていった……。

翌日、奪われた密書は、小田原城本丸にある北条氏康の居館に届けられた。

脇息にもたれ、円座の上に胡座をかき静かに書見していた氏康は、回廊に人の気配を感じて頭を巡らせた。

「……………小太郎か？」

「はい……………」

襖の向こうから、若い女性の声が返ってきた。

「入れ」

金箔に彩られた襖が音もなく開かれると、そこには綺麗な小袖をまとった侍女が静淑として額ぬかずいていた。風魔一党の頭領、小太郎である。彼女は、先代小太郎の養女であつたが、五代目を継いだとき羅陵王長恭の故事に倣って鬼面を付けた。勿論、主君にまみえるときはその美しい素顔を晒している。

「上杉輝虎より今川殿に届けられた書状を持って参りました」

「そつか……………読んで聞かせよ」

「はっ」

小太郎は、竹筒から取り出した書状を読み上げるべくその内容に目を落とした。その途端、彼女は驚きの声を上げた。

「こ、これは……」

「如何したのじゃ？」

氏康が、訝しんで訊ねる。書状には、一言こつ書いてあったのだ。

徳栄軒信玄は既に死人也。此の儀、ゆめ疑う事なく御心安かるべく候。

「し、信玄は、すでに死んでいると……？」

続く。

妖怪武田信玄と甲斐の荒ぶる神（3）

上空に、強い風が吹いているのか……。

墨池^{ぼくち}をひっくり返したような暗雲が轟々たる朔風^{さくふう}に押され、もの凄^{もの}い勢いで八ヶ岳から御坂峠の方へ流れてゆく……。

晴れた日には、その先に霊峰富士の銀嶺を望むことができるのだが、今は雲烟^{うんえん}万里^{ばんり}、一面の曇色が禍々しく秋空を覆っていた。

時折、雲の希薄な部分があつて、一瞬だけ行燈の灯を透かしたように薄ぼんやりと太陽が照るが、すぐに暗転して霜枯れの大地をもとの寒々しい景色へと帰す。

甲府盆地は、これから厳しい冬を迎えようとしていた……。

甲府城下、連雀小路^{れんじゃく}を一路、武田信玄の居館である躑躅ヶ崎館^{つじつがさき}へ馬首を向けて、麗々しい騎馬の一隊が悠揚と駆けてゆく。その夏^か夏^かたる馬蹄の響きに驚き、道行く人々は慌てて路肩へ身を寄せた。馬上の武者は、どれも煌然と着飾っているが、その逞しさ、鋭気は、ひとたび戟塵^{げきじん}にまみれば、敵を求め戦場を駆けめぐる荒武者の威风に満ちていた。

やがて一隊が町人街を抜け、武家屋敷の整然と建ちならぶ広小路へ差しかけると、ひととき美事な鹿毛の駿馬^{またが}に跨る武将が、吹き出す汗を袖先で拭いつつ、取り巻く家来衆に向かって低いがよく通る声で言った。

「わしは、このまま御屋形様の元へ参るゆえ、おのしらは一旦、屋敷へ戻っておれ」

金欄の小袖に皮袴、天鷲絨^{てんじゅう}の襟を縫い合わせた胴衣をまとい、三尺八寸の長刀を斜めに背負ったその凛々しい姿は、涼しげな目元と相まって惚れ惚れするような武者振りである。

彼の名は、いちじょうのぶたつ一条信龍。

甲斐源氏の一門衆にして、武田二十四将の一にも数えられる豪傑である。

十人余りいた家来衆がみな馬首を回して駆け去ると、信龍はただ一騎、秋風に馬鬣をたなびかせて信玄の待つ館へと向かった。

信龍について、『甲陽軍艦』に記述がある。

だてもの伊達者と言うものは武道の役に立つ人を言う。たとえれば、一条右衛門大夫殿のこと。馬鞍、武具、諸道具、これを陣しげきにもいつも新しくして、しかも、諸国の浪人に良き者を集め、騒めき亘るる。

その華奢な軍装と豪侠たる振る舞いは、戦国最強と謳われた武田軍団の中にあっても一際異彩を放つ存在であった。彼は、武田信虎の八男、つまり信玄の実弟である。元服して甲斐源氏の名家、一条氏の名跡を継いだてんきゅうのふしげが、典厩信繁亡きあと、信玄が最も信頼を寄せる武田親族衆の一人であった。

うづり渺茫たる相川扇状地を見下ろすかたちで、武田信玄の本拠、躑躅ヶ崎館は建てられていた。

しかしそれは、館と呼ぶにはあまりにも壮大すぎる。天守台や中曲輪、東曲輪を内包する館の主郭部は約二町四方もあり、その周りを西曲輪、梅翁曲輪、御隠居曲輪など多数の曲輪が整然と取り囲んでいる。外周部には三重の総堀がぐるりと張り巡らされ、それは、もはや城郭の様相を呈していた。

躑躅ヶ崎館の名の通り、春から初夏にかけては館の周辺に紅色の山躑躅が咲き乱れるのだが、今は、すっかり葉を枯らした木々の枝に、身を寄せ合うようにしてさへす轉る寒雀の姿がまばらに見えるばかりである。

信龍は、館の大手門を潜ったところで矮躯ながら厳つい体つきの武将と行き会った。その男は、信龍を見つけるなり刀疵で引き攣た唇をつり上げて破顔した。

「おお、これは右衛門大夫殿、寒い中、大儀でござるな」

武田四天王の一人、赤備えの山県昌景やまがたまさかげである。剛勇ぞろいの武田家臣団の中でも抜きん出た千軍万馬の強者つわものであるが、行雲流水こころのゆくえ、私心のない一途な武将であり、信玄の最も信頼の厚い股肱の重臣でもあった。同じく武骨な性格の信龍とはよく話も合い、気が置けない間柄となっていた。

「いやなに、御屋形様の突然のお召しでな、まさか歌会の相談でもあるまいが、年の瀬も近いというに忙せわしない事よ」

信龍の苦笑に、昌景は屈託のない笑いで返す。

「ははは、右衛門大夫殿は、それがしのようにただただ武骨なだけの者とは違い、風流韻事も分かるお方じや。まこと羨ましいかぎりでございますよ」

「私のは、言ってみれば猿えほしに烏帽子、歌など性に合わないが御屋形様によばれるので仕方なしにやっているのござる」

そう言つて、ひとしきり笑った後、信龍は急に真顔になって、

「ところで三郎兵衛殿、御屋形様は、その……ご健勝でおわすかな？」

と、ためらいながら訊ねた。その表情は、なぜか暗く陰っている。答える昌景の方も、ふつと笑みを消して、

「え、ええ……、近頃は、益々もつてお元気で……。しかしながら

……」

と何事かを言い掛けたが素早く思い直し、こほんと咳払いして、
「おっと、ここで油を売っている場合ではなかった。右衛門大夫殿、それがし先を急ぎます故これにて、御免」

と会釈して厩の方へ消えていった。信龍は、その後ろ姿を見送りながらふつと嘆息した。

「……どうやら御屋形様のご様子は、相変わらずのようだな」

そして、陰晦^{いんかい}な曇天を仰いで独り言ちた。

「まさか我々は、一徳齋に謀られているのではあるまいな……？」

武田信玄は、この年、五十才になる。

法体^{ほうたい}になつてからすでに十年以上経つが、その精気漲る竜姿は、虚々実々たる謀略を巡らせ戦国の世を勝ち抜いてきた梟雄^{きようゆう}の風骨を保っていた。

『甲陽軍艦』に、ある時、信玄が思い立って自分そっくりに作らせた木像を家臣に見せたところ、

「惣別、御法躰ありてより、不動の尊躰に少しもたがひ給はず」と言われたとある。

泰然^{たいぜん}自若として脇息に身を預ける姿は、あたかも不動明王のごとくであつた。

躑躅ヶ崎館の御主殿、常の間に、諏訪梵字旗を背にして信玄は悠然と座していた。

下座には、内藤昌秀、春日虎綱、馬場信春といった重臣の面々が神妙な面持ちで控えている。一条信龍は、信玄の前に躊躇^{ちゅう}り寄り、うやうやしく平伏して挨拶の口上を述べた。

「御屋形様におかれましては、益々御壮健にて、祝着^{しゅくちやく}至極に存じ奉り……」

「はっはっは、これ信龍、堅苦しい挨拶はよいから顔を上げて楽にせい」

信龍を見つめる信玄の目は、慈愛に満ちている。

同腹の孝弟、典厩信繁が川中島の戦いにおいて馬革に屍^{つづ}を裹む憂き目にあつてからは、信玄が最も頼れる親族はこの一条信龍であつた。後に信玄の影武者を務めたといわれる信廉^{のぶかど}は、勇敢な武将ながらその反面、文弱な性格でもあつたし、従兄弟の穴山信君は、切れ者ゆえに本心では何を考えているのか分からない不気味さがあつた。信玄は、自分にもしもの事があつたなら、一子勝頼^{いっし}の後見はこの信

龍に任せようと秘かに心に決めていたのである。

信龍は、顔を上げ信玄を仰ぎ見た。その姿は、紛れもなく甲斐の虎と恐れられた信玄のものに他ならない。しかし、以前とは違う点が一つだけあった……。

信玄の横には、常に一人の年若い女が寄り添っていたのである。その女は、金縷銀縷きんるぎんるで飾られた艶やかな振り袖の上に烏羽色からすばいろの髪を垂らし、口元に淫靡いんぴな笑みを湛え、自分の父親ほども歳の離れた信玄に対し、まるで息子を慈しむ母親のような視線を投げかけているのだ。

信龍は、無意識に視線を反らせて嘆息した。

「……今しがた、そこで三郎兵衛殿と行き会いましたが」

「おお、あやつは近頃、わしの側に居たがらん。忠義者ゆえ、万が一にも二心はないと思うが、困ったやつじゃ」

信龍には、武辺者ぶへんものの山県昌景がこの場に居たがらない気持ちが痛いほど分かった。昌景は、自分を見出し、ここまで取り立ててくれた信玄を、無二無三の主として信服していたのだ。ゆえに、このような魔性に取り憑かれた信玄の姿など見たくはないのである……。

信玄は、しばらくの間、手にした扇子を開いたり閉じたりして弄んでいたが、不意に険しい目つきになって信龍に言った。

「信龍よ、こたびは是が非でも興国寺城を攻め落してやろうと思う。あの、北条氏康めの心胆を寒からしめてやるのじゃ」

「では、御出陣でござりまするか？」

「うむ」

もうすぐ師走しわすである。すでに、甲府盆地を取り囲む山々はその頂に銀雪を載せ、荒れ狂う波濤のごとく城下に迫っていた。信龍は、表情を曇らせて信玄を見上げ、恐る恐る意見を申し述べた。

「恐れながら……。雪中の行軍は、骨が折れまするなあ。足も遅うなるし、大雪が降れば兵站線を遮断されます。それに、例の秋山

伯耆はくしよの一件でヘソを曲げておる家康めの動静も気に掛かりますなあ……。如何でござりましょう、ここは焦らず暫く様子を見られては……」

信龍は、平伏して次の言葉を待った。以前の信玄ならば、血相を変えて叱りとばすか、鷹揚おうようにうなずいて他の重臣に意見を諮はかるところであるが、今の信玄は違った。彼は、かたわらに侍る若い女に向かって、子が親に甘えるような口調で意見を求めたのだ。

「のう御前、信龍はあのように申しておるが、如何なもんかのう……？」

女は、真つ赤な椿と白梅の花弁にも似た朱唇皓齒しゅくしんこうしをほころばせて婉然えんぜんと微笑みながら信玄にしなだれかかり、その僧形の頭を撫でながら我が子を諭すように言った。

「殿の思うがままになされませ……」

信龍はじめ、その場に居合わせた者全員の表情が凍り付いた。

しかし次の瞬間、信玄は、重臣たち全員を睨み回し、厳然たる口調で言ったのだ。

「おぬしらも聞いた通りじゃ。わしは行くぞ。雪が降れば、越後の上杉謙信も出てこられまい。今こそ氏康めに乾坤一擲けんこんいつてきの戦を仕掛け、泡を吹かせてくれようぞ！」

信龍が慌てて顔を上げ何かを言おうとしたが、それより早く信玄が、

「信龍！ 先年、興国寺城を落とし損ねたとき受けた屈辱を、よもや忘れたわけではあるまいなあ！？」

と吼えた。信龍は、再び頭を下げたまま何も言えなくなってしまうた。

先年六月におこった興国寺の一戦で信玄は、北条親子の軍勢に陣を焼き討ちされたあげく、八幡大菩薩の御旗を放置したまま甲斐へと潰走していたのだ。

『北条五代記』には、そのとき氏康が詠んだとされる落書が記さ

れている。

名をかへよ たけたがほすと八幡の はた打ちすてて にげ田信玄

再び、例の女が、その白魚のような指で信玄の頬を撫でさすりながら、耳元に唇を寄せて妖艶に囁いた。

「あれ、殿……それは悔しゅうございましたなあ……。ですが、もう大丈夫、殿には私がついておりますゆえ、存分にお働きなさいませ……」

信玄は、甘えたような目で女の方にちらりと一瞥をくってから重臣たちに向き直り、鋭く下知を飛ばした。

「すぐに戦の支度をいたせ。年が明ける前に駿河に押し出し、手始めに深沢城の北条綱成を血祭りに上げてくれる」

「ははっ」

そこにいる全員が平伏した。

そして再び顔を上げたとき、信龍は思わず息を呑んだ。

これが本当に……あの御屋形様か？

彼の眼前には、人目をはばからず女の口を吸う信玄の痴態があった。信龍は、信じられないといった表情で、横にいる馬場信春の顔をうかがった。

御屋形様は、いつもこうなのか？

信春は、青ざめた顔でそつとうなずくと、信玄に向かって一礼し、ゆつくりとかぶりを振りながら立ち上がって座を外した。他の重臣たちも次々と退出してゆく。信龍は、再び信玄の姿を茫然と見つめた。

女と信玄は、未だ激しくもつれ合いながらお互いの口を吸い続けていた。くちゆくちゆと唾液の中を舌がかき回す音が淫靡に響く。その女の乱れた裾からは、白磁か象牙のようになすべすべした白い太ももが露わになっていた。

そして、その淫猥な股の間から……、
赤く血濡れた肉の紐ひもが信玄に向かって延びているのを、信龍は見
たのだ。

彼の脳裏に、昨年見たあの悪夢が甦った。

続く。

妖怪武田信玄と甲斐の荒ぶる神（4）

歴史に記された武田信玄の没年は、元龜四年四月、西上作戦の途上とある。

しかし、その四年前の永禄十二年八月、つまり昨年夏に、信玄は死んでいたのだ。

死因は、瘡毒そうどくであつた……。

永禄十二年は、不吉な年であつた。

永禄十二年己巳つちのとみの歳より翌年午うまの七月まで、天に煙の出る星出来す……抑おさへこの星と申すは、天下勿怪もつげの星なり。

と『甲陽軍艦』にある。

丑虎うしとらの空に、禍々しくも蛇体のごとき光の尾をたなびかせた計都けいと星が現れ、昊天を仰ぐ民衆の心に末世の不安を深く刻みつけたのであつた。

今になって思い返してみても、あの時のことは悪夢としか思えぬ……。

一条信龍は、静かに瞑目して、昨年夏、目の当たりにしたあの信じられない光景を脳裏に浮かべていた。

昨年。

信龍のもとに、信玄危篤の急報が飛び込んできたのは、彼が居城である市川の上野城内において、美和神社に奉納する御神刀を検めているときであつた。新しく相模から呼びよせた鍛冶の手による新刀を盛夏の日にかざし、感嘆の声を漏らしているとき、にわかに慌ただしい馬蹄の響きが城内に駆け込んできた。

「殿！ 殿！ 躑躅^{つづし}ヶ崎館からの急使にござります！ 本日未明より、御屋形様ご危篤^{きどく}っ！」

信龍は、ついに来る時が来たかと瞳を険しくすると、白足袋で縁を踏んでたたつと庭へ駆け下り、刹那、裂帛の気合いもろとも手にした御神刀を斜め下から斬りあげ虚空を断った。

「えいつ！」

御屋形様ご上洛の夢は、ついに叶わぬか……。

信龍が、取る物も取り敢えず馬を飛ばして駆けつけると、躑躅ヶ崎館の周辺は、すでにおびただしい軍兵によって守られていた。屋敷や倉の屋根に鴉^{からす}のように蹲^{うすくま}る人影は、恐らく透破^{とうぱ}どもであろう。城下にも、すみずみまで厳戒令^{げんけいれい}が領^しかれていた。

信玄が病軀を養っている御清閑の間には、急報を聞きつけ集まった重臣の面々がずらりと居並び、一様に無言のまま蒼白な顔を俯けていた。信玄の枕元には四郎勝頼が悵然としてうなだれ、侍医である板坂法印、御宿友綱^{みしゆく}の両名が焦燥^{しうそう}しきった面貌を並べている。

信玄はすでに意識を混濁させ、信龍の参着にも気付かぬ様子であり、ただ勝頼のみが、わずかに視線を振り向け目礼したのであった。肅々と家臣団に列座した信龍は、しかし奇妙な事に気付いて首を傾げた。

二人の侍医の後ろに、真田一徳斎が寂然として控えていたのである。

一徳斎は、すでに齡^{よわい}五十七。

その類いまれなる武略から『鬼弾正』と恐れられた名将も今は病のため瘦せ細り、木乃伊^{みいら}のように骨張った相貌に目だけを異様にぎらつかせていた。

真田氏は、信濃の豪族、海野氏の庶流にあたり、代々忍びの術を

使う事をもっぱらとしていた。真田家中には、密教修験の荒行を積み奇幻の呪法を会得した術者が多数、食客として抱えられていた。信玄が武者押しで落とせなかった村上義清の戸石城を、忍者を駆使した真田軍がたった一日で奪い取った話は有名である。

こういった特異な地力じじきを持つ真田家を信玄が重く用いたのは当然といえる。しかし武田の一門衆でもなければ、また譜代の家老衆でもない一徳斎が、自分たちよりはるかに信玄の側近くに侍っている事に、信龍は、何か釈然としないものを感じたのだ。

「おのれ義信！ 血迷うて現れおったか、この不忠者めえっ！」
不意に信玄が、その落ち窪んだ双眸を見開いて叫んだ。義信とは二年前に腹を切らせた信玄の嫡男、太郎義信の事である。してみると、これは讒言うわごとであろう、しかし、その往時のように力強い声音を聞いた家臣たちは騒めき立ち、みな一縷いちるの望みを込めて信玄の顔に見入った。

信玄には、すでに鼻が無かった。

脳梅のため視力も失せ、目の色にも全く光が感じられない。それでも彼は、死相の浮き出た貌を歪め、枯れ枝のような腕を伸ばしては、ただひたすらに虚空を掻きむしったのだ。

「ひ、兵部……早く、早くその親不孝者を連れてゆけい！」

兵部とは、義信と一緒に誅殺した飯富虎昌いへふこりやまねの事である。

譚妄せんもうの中でそう喚いた刹那、うつつと呻吟しんぎんしたかと思うと、ついに力尽きた信玄の手がぱったりと横に投げ出された。

「父上！」

勝頼がその手を掴んで叫ぶ。慌てて脈を取った板坂法印は、やがて力なく首を横に振った……。

「……ご入寂なされてござる」

そこに居流れた武田の諸将全員が、腰を浮かせて口々に叫んだ。

「御屋形様っ！」

甲斐の虎と恐れられた武田信玄が死んだ瞬間である。

その時、荘厳な声が、信玄の骸に駆け寄ろうとする家臣たちの動きを遮った。

「皆々さまがたに言上つかまつる」

真田一徳斎である。

彼は、居並ぶ家臣たちにくるりと向き直ると、重々しい口調でこう言った。

「恐れながら、我が真田家には、始祖善淵王よしぶちおうの頃より代々受け継がれし秘伝の修法がござる。その中の一つ、『死人還り』にて、これより御屋形様の御霊を九泉より呼び戻してご覧に入れまする」

「な、何を戯けた事を申すか！ 忍びの者が使う妖しげな幻法ごときで、亡くなられた御屋形様が生き返るわけはなかるう！」

武田信廉のぶかどが一喝し、穴山信君が領首する。しかし一徳斎は、肅として言い放った。

「この事は、勝頼様お立ち会いのもと、御屋形様にもご承諾を賜つてござる！」

家臣たちは騒めいた。勝頼が自若として反論しないところを見るとどうやら事実のようであるが、それにしても『死人還り』とは、あまりにも荒唐無稽こいつむけいすぎる。信龍は、事と次第によつては一徳斎を成敗しようと山県昌景に目で合図を送った。昌景がゆっくりとうなずく……。

「源太左衛門！」

その時、一徳斎が大声で自分の息子と呼ばわった。すぐに奥座敷の襖がするすると開き、真田信綱が深々と一礼してから歩み出てきた。その両脇には、一人の僧侶と若い巫女が付き従っている。いや、僧侶ではない、それはたった今死んだばかりの信玄に瓜二つの者であつたのだ。

何だ、影武者か……。

思わず家臣たちの間から失笑が漏れた。

「一徳斎、そなたの申す『死人還り』とは、影武者を使って世を欺くことか？ それならば笑止！ 『死人還り』などと大仰な事を申さずとも、その程度の猿智恵ならば走卒でも思いつくわい！」

猛将、馬場信春がぐつと睨み据えたが、一徳斎は平然として言葉をつないだ。

「御屋形様に術を施しまするは、これなる巫女にて、りょうせん靈仙山で荒行を積みし真田家ゆかりの甲賀者にござりまする。なお、その秘法修法は、禁呪にござりますれば、皆々さまには、これよりご覧になること、構えて他言なされませぬよう願いたてまつる」

言い終わるや一徳斎は、信綱に向かって、

「では、始められい」

と厳しい口調で言った。

「かしこまつて候」そつごう

真田信綱は、膝立ちのまま信玄の元へにじり寄ると『御免！』と言つてその帯を解き帷子かたびらの前をはだけた。老悴ろうすいした腹部が露わになる。やがて、その骸に巫女がしずしずと歩み寄り、艶あでやかな藍摺りの小忌衣おみころもをはらりと脱ぎ捨てたのだ……

居合わせた誰もが息を呑んだ。

身に、綸子りんしの紗一枚まとっただけの姿となつた巫女は、その丸い乳房や腰から尻にかけてあやなす曲線はもとより、すらりと長く伸びた足の付け根や肉感的な下腹部までもが薄らと透けて見え、その肢体は、まるで牙彫けぼりの観音像と見紛うほどに白く艶つややかであつたのだ。

巫女は、静かに膝を折ると、信玄の骸と並んで身を横たえた。そして仰向けのまま裾すそを割つて膝を立て、その足をゆっくりと拡げていった……。

おお！

泣く子も黙る武田軍団の長たちが、その視線をある一点に張り付

かせた。

巫女の秘部は、未通娘のように色薄く、戯れ女のように無毛であったのだ。やがて彼女は、印を結んで一心に咒を唱え始めた。

ナウボウ バギヤバティ ウシユニシャヤ オン ロロ ソボロ
ジンバラ チシユタ……………

陀羅尼を詠唱する声の調子に次第に熱がこもってくると、彼女の白い腹がうねうねと波を打ち始める。

一徳斎は、半眼を閉じてその様子をじっと見下ろしていた。他の者たちも咳しわふきひとつせず、呆けたようになって、この人外の儀式に魅入られている……。

と、突然、巫女の陰部から赤く血濡れた紐ひものようなものが現れ、もぞもぞと床を這い始めたのだ。

「こ、これは……」

肉の紐は、巫女の股間から血の軌跡を引いて蜿蜒えんえんと延び、やがて蛇のようにくねりながら信玄の腹へと這い上っていった。

たまらず、山県昌景が腰を浮かす。それを、内藤昌秀と春日虎綱が両側から押し止めた。

「まあ待たれよ、主意でござる、いましばらく検分いたそう」
この二人に、そう言われてはどうする事も出来ず、昌景は、苦虫を噛み潰したような顔で座にすわり直した。

…………… シッダ ロシャニ サラバアラタ サダニエイ ソワカ

巫女の呪文は、今や狂乱の様相を呈していた。呻るように荒々しく、また、あえぐように狂おしく……。

几帳きちやうを立て切って薄暗い部屋の中、巫女の声に合わせ、燭台に灯る火焰がじりつと音を立てて揺らめく……。

やがて、額に玉の汗を浮かべ神懸かりとなった巫女は、啼鳥のご

とく甲高い淫声をしぼり出し始めた。

あああ ああああああ……

その声に操られるように蠢いていた、禍々しくも鮮血をまとった肉の紐は、ついにその先端を信玄の臍へその中へずぶりと潜り込ませたのだ。

「あっ！」

みな、蒼白な顔を引きつらせ固唾を呑んだ……。

と、次の瞬間、信玄の閉じられていた双眸がかつと見開かれ、あの戦場で虎嘯こしょうのごとく采配を振るった野太い声が、高らかに産声をあげたのだ。

おぎゃあ おぎゃあ おぎゃあ

「お、御屋形様」

家臣たちは、驚愕のあまり皆をまなじりつり上げ、金縛りにあつたように全身を硬直させた。たった今、息を引き取ったばかりの信玄が、その老醜をさらしたまま、生まれたばかりの赤児のように泣きじゃくっているのである。

我々は、悪い夢でも見ているのか……？

ややあつて、はつと我に返った一条信龍が、その鋭い疑念の眼差しを一徳斎に向け、猛然と誰何した。

「一徳斎、おぬし御屋形様に一体何をした？ このような胡乱なる妖婦をつかい、あやかしの術で御屋形様のご尊体を弄ぶとは……。申せ！ これは、いかなる仕儀を以ての振る舞いじゃ！」

信龍の言葉に、忘我自失の呪縛から解き放たれた他の家臣たちも、色めき立って一徳斎に詰め寄った。

「おのれ一徳斎、何を企んでおる？」

「君恩を仇で返す気か？」

その時、破鐘のごとき大音声がその場を一喝した。

「鎮まれい！」

むっくりと半身を起こした信玄である。

彼は、今の今まで死の床にあったとは思えぬほど精力に漲り、眼光炯々として、その五体に燃えるような闘気を孕んでいた。

「御屋形様っ！」

家臣たちは、一様に驚きの声を上げ、中には声を詰まらせ嗚咽するものさえあった。

武田信玄が甦ったのである。

「安心いたせ、信玄は、これ、こうして黄泉から舞い戻ってきた。ふはははーっ！ 義信めが冥土の入り口まで迎えに来たが、わしが引き返してゆくを見ると歯噛みして悔しがっておったぞ」

巫女は、淫事をやり終えたばかりのような清々しい顔で身を起こすと、緩慢な動作で乱れた着物を直し始めた。その姿に、卑猥な流し目を送りながら信玄が訊ねた。

「ああ、良い心持ちじゃ……若いおなごの精が、この臍へその緒を通し
てわしの中へ滔々たうたうと流れ込んでくる……。これ御前、そなた名は何
と申す？」

「鈴鹿にございます」

巫女は、婉然として微笑んだ。信玄は、居並ぶ家臣たちに厳命した。

「鈴鹿とわしは、今や一心同体じゃ。この女が死ねば、わしも死ぬ。以後、鈴鹿の申す事は、わしの言葉と思って左様に取りはからえ！」
家臣達は、平伏した。

「ははっ！」

一条信龍は、心の奥に何か釈然としないものを抱きながらも、とりあえず信玄がこうして生きている事に安堵した。

子細は、いずれ一徳斎から直接聞こう。

その真田一徳斎と息子の信綱に、

「一徳斎、源太左衛門、両名とも大儀であつた」

と声を掛けておいてから、信玄は、やώρα、侍医の御宿友綱に眼

光鋭く合図をおくつた。

「監物！
けんもつ」

「はっ！」

いつの間にか例の影武者の背後に立つた友綱は、次の瞬間、脇差の鞘を払い、その刀身を影武者の背に深々と突き入れたのである。

「ぐわあ……」

影武者は、たちまち血を吐いて前のめりに倒れた。友綱は、その男の脈をとって絶命したのを確かめてから、威儀を正して座り直し、家臣たちに向かって言った。

「これより、この者の鼻を切除し、御屋形様に移植いたしまする。

他人には見せられぬ秘事ゆえ、皆様がたには一旦お引き取り願ひましょう」

信龍……………これ、信龍！

一条信龍は、はつと我に返つた。

目の前には、昨年、移植した鼻を黒々と光らせて、信玄が堂々と脇息にもたれていた。

家臣たちはみな退出し、妖女鈴鹿を除いては、常の間にいるのは信玄と信龍だけである。

「おぬし近頃、一徳斎に対抗して凄腕の甲賀者を召し抱えたらしいな？」

「真田殿に対抗したなどと滅相もござりませんが、甲賀者を抱えたのは事実です」

「なれば一つ仕事を仰せつける」
信玄の眼が、鷹のように伶俐になった。

「三つ者の報告によれば、越後の上杉謙信は、どうもわしの『死人還り』の件を知っておるふしがある。この噂が相模の北条や三河の徳川に伝われば、今は疑心暗鬼にある三者の關係が武田包囲網の名の下に結束するやもしれぬ。これから西上作戦を練ろうかという矢先、さような事になっては、ちと面倒じゃ」

「謙信の命で暗躍しておるのは、越後の軒轅にござりまするな？」

「うむ。わしが相・越・三の同盟を解消させる工作を遂げるまで、おぬしは、その甲賀者を使って、相模の風魔や家康の伊賀者が、謙信の軒轅と接触するのを妨害するのじゃ」
「心得ましてござりまする！」

本拠、上野城に戻った一条信龍は、城下に陣触れするとともに、すぐさま新しく雇った甲賀者を呼びよせた。

その異形の忍者は、妖気を陽炎のごとくまとったまま、肅として庭前に平伏した。

「殿のお召しにより、白雲斎、推参仕りました」

続く。

猿飛と霧隠／甲斐の透破兄妹（１）

風魔小太郎が、その異形の忍者を初めて見たのは、一昨年前の永禄十二年、露時雨がそぞろ寒い深秋のさなかであつた。

その日、夜半すぎ、小太郎の手下二人が、仏果山の北東に位置する麓、半原の高台にある山王社の社殿に駆け込んできた。

鬱蒼とした杉の大樹に囲まれたこの古い社は、そのとき嚴重なる結界に守られていた。境内には耿耿と篝火が焚かれ、その薄明かりの中、鉄砲の手入れをする忍者どもの黒い影が炎の揺らめきに合わせゆらゆらと踊っていた……。

二人が藁葺き屋根の山門をくぐると、長槍を携えた見張りの者がすかさず声を掛けてきた。

「透破すっぱの数が、また増えたようだな……？」

「ああ、今さつきも、すぐその川縁で五人斬つたよ」

すれ違いざま感情のない早口でそんな言葉を交わすと、二人の忍者は火の粉を散らす篝火の間をすり抜け拝殿の奥へと足をふみ入れた。

暗澹あんたんとたたずむ本殿の前に日吉造りの小さな幣殿があり、そこに一人の忍者が木像かと見紛うほど悠然とした居ずまいで床几に腰掛けていた。

相模風魔党の頭、風魔小太郎である。

彼女は、柿色装束に一本歯の高下駄を履き、腕を組んだまま漆黒の間を見据えていたが、塗りの剥げかかった鬼面からはその表情をうかがい知る事は出来なかった。

しかし、彼女の五体からふつつと沸き上がる闘気は、今まさに戦乱の嵐がこの場所にも近づきつつある事を予見させた。

二人の手下は、音もなく小走りに駆け寄ると小太郎の面前に片膝をついて蹲った。その二人の背に、地獄の底から沸き上がるようなしわがれた声の下りる。

「……鬼童丸に外道丸か？ 物見の役、大儀じゃ」

鬼童丸はわずかに顔を上げ、数里の山道を駆け詰めてきたとは思えぬほど息の整った声で言った。

「武田軍が全軍をあげて三増峠^{みませ}に向け、進軍を開始しました」

「やはり来たか……」

鬼面の奥から、くつくつという笑い声が漏れた。

「信玄坊主め、我らを誘っておるな……」

小太郎は、静かに瞑目した。

舞い込んだ羽虫が一匹、灯燭の光に誘われじりつと焼けて地に落ちた……。

「こたびは、小田原を叩く！」

信玄が、居並ぶ諸將を前にして傲然^{いっせん}と言い放ったのは、その年の夏のことであった。

驚いた家臣たちは、すぐに諫言^{かんげん}しようとしたが、それよりも早く信玄に寄り添う妖女、鈴鹿が手を打って嬌声を上げた。

「あれ、勇ましや。殿の武威には、あの相模の盗人大名とて、恐れをなし震え上がりましょう、ほほほ……」

黒髪を揺らして笑う鈴鹿に、信玄が満足げにうなずくのを見て、家臣たちは、苦渋の表情を湛えたまま何も言えなくなってしまうた。「ただちに陣触れいたせ！」

八月、武田信玄ひきいる二万の軍勢は威風堂々、風林火山の軍旗をはためかせながら甲府を進発した。

めざすは後北条氏の本拠、相模小田原城……。

軍は、北上すると見せかけて碓氷峠^{うすい}を越えるやたちまち転進、一挙に南下して武蔵に押し入り、北条方の支城である鉢形城でその戦端を開いた。その後さらに南へと下った武田軍は、滝山城を蹴散ら

したあと相模川を悠々と渡って厚木から西南へ折れ、遂には小田原城下へ雲霞のごとくなだれ込んだのである。

「さだめし信玄が襲うは駿河だと思っていたが」

北条氏康は、北から来襲した武田の軍勢に驚いた。

なにしろ信玄の襲撃にそなえ主力軍の大半を駿河、伊豆方面に回していたし、さらには前年、越後の上杉輝虎（謙信）と同盟を結んだ事により、北方への警固をほとんど行っていなかったのである。

「信玄め、何を企んでおる……？」

信玄にとって、この小田原遠征には二つの狙いがあった。

一つは、北条氏康の居城を叩くことにより、駿河に出張っている北条の軍勢を引き上げさせる事。いま一つは、後北条氏と敵対している関東諸将への示威行為である。

「わしを挑発しておるな……、だがその手には乗らん」

誘い出して叩く、これが武田軍の常套手段であった。後に徳川家康もそれで死ぬ目にあっている。北条諸将の中には打って出るべしと息巻く者もいたが、正面切ってやり合うには戦力を相模と駿河に分散させている北条軍は不利であった。また信玄拳兵に呼応して北条と対立する関東の諸大名がぞくぞくと戦列に加わる可能性もある。沈思する氏康に代わって、長老北条幻庵が肅として言い放った。

「この小田原城は、あの輝虎が十万の大軍をもつてしても落とせなかった古今に比類なき堅城じゃ。我らのとる道は、ただ一つ、籠城あるのみ！」

『北条五代記』に、東西へ五十町、南北へ七十町、周囲は五里四方とあるように、小田原城は戦国時代でも屈指の巨城であった。

また同書では、後の小田原の役における城内の様子をこう語っている。

松原大明神の宮の前の通り十町ほどは、毎日市を立て、七座

の棚を構え、与力する者が、手買・振売りをして、百の売り物に千の買物があつて、人が群衆する

戦時下にあつても、城内はまるで別世界のように物資にあふれ活気に満ちている。小田原城とは、町ひとつまるまる飲み込んだ巨大城塞都市であつたのだ。

以て、北条方の肚はらは、籠城策に固まつた。

しかし小田原城を囲んだ武田軍は、わずかに城下を焼き払つただけで戦闘らしい戦闘もせぬまま、その四日後には早々に囲みを解き、陣を払つたのである。

「ふはははーっ！ 輝虎の馬鹿でもあるまいに、小田原城を本気で落とそうなどと考えてもおらんわ。もつとも氏康がわしの誘いに乗り、城から打つて出るような事あらば相手をしてやらんでもないが、北条親子にそんな気概のあるうはずもない。ふん！ こんな城、いずれ天下を取つた暁には関東諸將に号令し、たちまちのうちに攻め落としてくれるわ。長居は無用、全軍引き揚げじゃあ！」

かくして、北条氏康に一泡吹かせるという本来の目的を達した武田軍は、具体的な戦果もないまま十月四日、甲府へ向け凱旋の途についたのであつた……。

「くつくつく……、どうやら御本城様の読みは当たつたわ。信玄の狸爺め、鶴岡八幡に詣でるなどと偽つて……退き路は、やはり三増峠越えか」

ちろちろと燃え盛る灯火の明かりが、風魔小太郎の鬼面きょうけんに兇険な表情を作り上げていた。手下は、顔を上げずに答える。

「箱根越えでは、我が北条軍に囲まれる危険性がございますからな」
「……………誘つておるのよ」

「はっ？」

小太郎の、鬼面の奥にある冷眼が底光りを放った。

「我が北条の侍を、野戦しか知らぬ弱敵と侮り、山中にて一戦交え

てやろうと目論んでおるのよ……ふふふ、血に飢えた生臭坊主め……。陸奥殿は、さぞかし怒り心頭であろうな」

陸奥とは北条氏康の三男、氏照のことである。彼が守る滝山城はこの信玄来襲の途上にあつたため、つい四日前には三の曲輪^{くるわ}まで攻め落とされ、落城寸前の憂き目を見ていた。若くて気の強い氏照は、その事を齒噛みして悔しがったが、あまつさえ、今再びその信玄が目の前を悠然と凱旋しようとしているのである。

「陸奥守殿は、すでに安房殿（氏邦）と相はかり、忍衆、深谷衆、河越衆などを従え峠に陣張りしております」

「……血気の勇だけでは、あの老獺な信玄は討てんというに」

「さらに、玉縄から左衛門大夫（北条綱成）殿も加勢に駆けつけておられますが」

小太郎は、鬼面の奥で舌打ちした。

「ちつ、猪三匹^{いのしし}、そろいぶみというわけか……もう後には引けん。鬼童丸、この事、ただちに御本城様にお知らせ致せ。あるいは、小田原からも打って出れば、武田軍を山中で挟撃し、壊滅させられるやもしれぬ。急げっ！」

「はっ！」

鬼童丸が風のように去った後、小太郎は、残ったもう一人の忍者外道丸を見下ろしながら言った。

「武田軍の陣立ては、どうなっておる？」

「本隊は、馬場信春を先頭に、武田勝頼、浅利信種らの率いる各部隊が小荷駄隊を守って峠を正面突破するものと思われます。また、

山県昌景、小幡憲重らが別動隊を編成する向きも見られますが……」

小太郎は、鬼面越しに夜空を見上げた。雲翳^{うんえい}の空には星一つなく、風も止んでいた。

天を仰ぐ小太郎の、忍び装束の合間から見える夜目にも白い喉が、この忍者の正体が若く美しい女性^{うしろめ}である事を物語っていた……。

「外道丸よ、永禄四年、川中島において信玄が上杉輝虎と合戦にお

よんだ際、きやつが弄^{もよ}した策をおぼえておるか？」

「……確か、妻女山に陣張りする輝虎を背後から襲うべく、軍を二分して別動隊を差し向けておりますな………では？」

「うむ。今回の峠越えでも信玄は、すでに北条軍の陣所を察知し、その背後を突くべく別動隊を秘か回り込ませてくるであろう」

外道丸は顔を上げ、はたと小太郎を見た。彼女の顔に張り付いた鬼面は、もはや面ではなく小太郎そのものの表情となっていた。その面奥から、地獄の底から沸き上がるようなしわがれた声がしぼり出される。

「我らを侮りおって……。北条の家中にも、山岳戦に慣れた強者がいる事を思い知らせてくれる。外道丸、お前は武田の別動隊を見張り、その動きをわしに逐一報告せよ。さらに、津久井城の内藤大和守に伝令を走らせ、陸奥殿の軍を襲う武田の支隊を、更にその背後から攻撃するよう、後本城様の命として伝えよ」

「御意！」

一陣の風が舞い、外道丸の姿は漆黒の闇にかき消えた。

伊吹の鬼童丸、大江の外道丸は、それぞれの通り名が冠する霊山で修行を積んだ風魔忍軍きつての手練れである。あるいは、この二人が任務を全うしていれば、この後起こる壮絶な戦いの結果も、また違ったものになっていたかも知れない。

しかしこの先、彼らの姿を見た者はいなかった。

いや、正確に言えば数日後、野犬に食い荒らされた彼らの死体が地元の獵師によって発見されているが、忍者ゆえ身元の判別できるような物は身に付けておらず、よって、その死が誰かに伝えられる事はなかったのである。

しかし彼らは死の直前、同じ恐怖を体験していた。

彼らの前に、八尺を越える上背で、獣のように俊敏な四足歩行をする奇怪な忍者が立ちはだかったのである。その忍者が、猛虎のごとく襲い掛かってきた刹那に、二人の生前の記憶は断たれていたの

だ……。

十月六日未明、武田軍は三増峠に向け進軍を開始した。

馬場信春隊を先頭に、武田勝頼隊、内藤昌秀率いる小荷駄隊、殿軍の浅利信種隊が、木の下闇に目を光らせながら切通しの坂を上ってゆく。

信玄は、五千の旗本衆を従え、隊列をはるかに見下ろす高台の上に陣取っていた。白頭の兜の上で、武田菱を象った前立てが曙光を跳ね返し金色に耀いている。黒毛の驛馬かんばに悠然とまたがり、鎧の上から朱の法衣をまとったその姿は、あの織田信長さえも恐れさせた信玄の英姿に他ならなかった。しかし奇異なことに、彼の馬上にはもう一人、真つ赤な具足姿の若武者が信玄に取り憑くようにしてしがみついていたのだ。

鈴鹿である。

信玄は、采配を振るうたび、いちいち彼女に伺いを立てていた。「のう御前、三郎兵衛が到着するまでが正念場じゃ。どうであろう、いざという時には小荷駄を捨てても構わぬのう？」

鈴鹿が信玄の鎧に頬をすり寄せる。

「あれ、殿、何を仰せられます。兵糧を奪われてしまつては、私がひもじい思いをいたしまする。どうぞ小荷駄は守つて下さりませ」すると信玄は、につこり笑つて鷹揚に頷き、すぐさま使番を呼びよせた。

「ただちに修理亮しゅりやうのもとへ参り、小荷駄は己の命に代えても守り抜けと伝えよ！」

「はっ」

百足の指物をひるがえし、使番は駈け去った。

そんな様子を離れたところから眺め、一条信龍は浮かない顔をしていた。そこへ身の丈八尺はあろうかという忍者装束の男が忽然と現れ、生来の猫背をさらに丸めてうずくまった。

「……白雲斎か、いかがした？」

その異形の忍者、戸沢白雲斎は、抑揚のない淡々とした口調で言った。

「北条方の乱波を幾人か斬りました。その内の一人は、山県殿の部隊に張り付いておりました」

「北条の乱波……風魔か！？　きやつらが三郎兵衛殿率いる別動隊の動きを察知していたとな？」

「御意」

信龍は、眼下を肅々と行進してゆく武田の軍勢に目を落としながら低く呻いた。その表情は、何時にも増して硬く引き締まっている。「風魔が先を取って我らの動きを見張っていると、これは油断ならん。思ったより苦戦を強いられるかも知れぬぞ……」

彼が呟いた、その時である。

天地を揺るがす轟音とともに数十挺の鉄砲が放たれ、割れんばかりの呐喊とっかんを響かせて数千を超える北条の兵が山道を噴流のごとく駆け下って来たのである。

信龍の瞳が炯然と輝いた。

「来たかつ！」

続く。

猿飛と霧隠、甲斐の透破兄妹（2）

凜と張りつめた山の冷気が草木の緑を肅殺^{しゅくさつ}する中、落ち葉を踏みしめ三増峠を上ってゆく甲州兵の隊列を暗夜の礫^{つぶ}のごとく、おうおうたる鯨波^{けいは}が襲った。

小田原からの帰途についた武田軍を、峠で待ち伏せていた二万の北条兵が襲撃したのだ。一斉に鎬矢^{かひら}を放ち槍を振り下ろす音は、天地を鳴動させた。

山岳戦の妙味は、高低差を利用した戦術にある。高所から勢いに乗って一気呵成に下方の敵を襲えば、通常の何倍もの攻撃力を発揮出来るのだ。

この戦いで峠の頂上付近に布陣した北条の軍勢から真つ先に飛び出したのは、猛将北条綱成^{ほうじょうつななり}の一隊であった。彼らは、地黄八幡の指物をはためかせながら斜面を一気に駆け下り、武田方の先頭を歩む馬場信春の隊列に疾風怒濤のごとく突っ込んだのだ。

「この戦、勝ったぞお！」

綱成は、戦いの場に身を投ずるとき必ずこう叫ぶ。兵たちに常勝思考を植え付けるためだ。事実、彼が率いる軍団は、常に無敵無敗の強さを誇っていた。

『北条五代記』に、北条綱成の事が記されている。

この人は数度の合戦に先を駆けた有名な大剛の者であった。……上総介（綱成）は合戦の度に、黄八幡の旗を真先に立て、団扇を上げて衆をはげまし「勝ったぞ、勝ったぞ」とばかり言う人であった。上総介、一生涯に三十余度の大合戦に「かったぞ、かったぞ」と言つて勝利をえたのだ。味方もこの旗の先立つを見ては「勝ちたり、勝ちたり」とおめいて勢いついた

叫喚が怒張する。

たちまち激しい剣戟がわき起こり、鎧袖一触^{がいしゆいつしよく}、武田の尖兵が蹴散らされた。綱成の振るう大身の槍が、次々と敵の兵卒を薙ぎ倒してゆく。

「皆の者ーっ！ 左衛門大夫殿におくれるな、あの黄八幡の御旗に続けえーっ！」

綱成に負けじとばかり北条の将兵がなだれをうって武田の隊列に殺到した。この猛攻を、なんとか持ちこたえようと馬場信春が懸命に味方を鼓舞するが、数の上でも有利な北条軍の勢いは止められず、馬場隊はたちまち突き崩され、戦渦は二番手の勝頼隊へと及んだ。

雲烟縹緲^{うんえんひょうせう}、淡い白雲が日を透かして錦紗^{きんしゃ}のように輝きながら東の空へたなびいている……。

老木の太い枝に一本歯の高下駄で仁王立ちして、風魔小太郎は、爽秋の空を見上げていた。その姿は、あたかも迦楼羅天^{かるらてん}のごとくに颯爽^{さうさう}としているが、鬼面の奥に隠された紅顔が、いかなる表情を湛えているのかは誰も知らない……。

「お頭、とうとう始まったようです」

いつの間にか小太郎と大木の幹をへだてた反対側に、風魔の手下が一人蹲^{すく}っていた。柿色の忍び装束に二尺足らずの直刀を背負太刀した小柄な忍者である。小太郎は、しわがれた声で苦笑した。

「ふふふ、相変わらず玉縄衆は手が早いな……」

その忍者、寄^よの平四郎は、表情も変えず淡々と答えた。

「武田の三つ者が北条の陣に潜り込み、早く攻め掛けると左衛門大夫殿の兵を煽^{あお}ったようです」

「ふん、足なが坊主め、いちいちやる事に芸が細かいわ。しかし信玄が挑発してきたとなると何か仕掛けがあるに違いない……。おい、外道丸からは何も知らせてこぬか？」

「いまだ何も……」

小太郎は、鬼面の奥でぎりつと歯噛みした。

「武田の別動隊の動きが分からねば、こちらも迂闊には動けぬ。小田原からの後詰め**の**兵はまだか？」

「それも、まだです……」

「……どうも雲行きが妖しいな」

小太郎は、静かに腕組みして戦塵舞い上がる修羅の巷ちまたを見下ろした。

「……畏であろうか……？」

実はこのとき既に、山県昌景率いる武田の別動隊が秘かに志田峠から北条軍を迂回し、まんまと背後へ回り込んでいたのである。しかし、それを偵察していた風魔の忍者、大江の外道丸は既に殺害されていたので、小太郎たちはその事実をまったく把握できずにいた。

しばらく黙考してから平四郎が口を開いた。

「……用心するのもよろしいが、武田を叩くまたとない好機かも知れませぬぞ。信玄は、焦っておるのでしょうか。小田原からの援兵が押し寄せる前に決着を付けねば、武田軍は袋のネズミとなりますからな」

「……」

「我ら風魔は、戦場を吹き抜ける一陣の風！ 速戦即決が信条にございます」

「ふうむ……なにやら、暗がりに鬼を繋ぐような心持ちだが……」

「お頭！」

寄の平四郎は、風魔党きつての古強者で合戦の経験も多く、小太郎の参謀的な役割を担っていた。ゆえに彼女は、平四郎に対し全幅の信頼を寄せていたのだ。

「分かった、風魔党二百をもつて武田の隊列を側面から襲おう。ただし我らが狙うはあくまで小荷駄じゃ、深入りはするな。甲斐の田舎侍どもに相州乱波の本領、見せてやれ！」

「はっ！」

平四郎が姿を消すと程なくして、風魔が味方を呼集する呼子笛が木々の狭間にこだました。

戦鬪は、次第に乱軍の様相を呈していた。

北条方は、氏照、氏邦兄弟が指揮する本隊に加え、勇将大道寺政繁^{しげ}率いる河越衆なども我先にと戦線に殺到し、今一つ統制に欠ける感^だはあつたが、しかし俄然勢いは北条方にあり、武田軍は、馬場信春隊が壊滅寸前、二番手の勝頼隊も兵卒の戎衣^{じゅうい}を血に染めてじりじりと押し返される苦戦振りであつた。

当然の事ながら、勝頼隊の後方に控える小荷駄隊は、戦々恐々としていた。

「殿！ このままでは、味方は時を待たずして総崩れにござりまするぞ。我らも荷駄を捨て、打って出ましょう」

「それがしも同じ意見にござる！」

小荷駄奉行を務める内藤昌秀の元に、配下の神名図書之助や阿久津大学が意見しに駆けつける。しかしその都度、昌秀は、苦り切った表情で首を横に振るのだった。

「いかさま、わしもそう思う。しかし御屋形様から荷駄を死守せよと命じられておる以上、わしは命に代えても荷を守らねばならぬ……」

「しかし荷駄など守っても、味方が壊滅すれば本末転倒ではござりませぬか」

「くだい！ 御屋形様より突撃命令が下されぬ限り、動くことまかり成らん！」

その時、百雷のごとき発砲音が小荷駄隊を襲った。いつの間にか武田の軍勢に忍び寄った風魔一党が、数十挺の鉄砲を一齐に放ったのだ。兵たちは、血煙を上げてはたばたと倒れ、昌秀の前にいた図書之助も背中に銃弾を浴び、音に驚いて棹立ちした馬から投げ出された。

「 新手かつ？」

続いて、側面の木立から抜刀した風魔の忍者二百人が躍り出て小荷駄隊に猛然と襲い掛かった。隊は、たちまち大混乱に陥り兵たちの切迫した悲鳴がそこかしこで飛び交った。

「たたた、大変だーっ！ 横やりだ、横やりが入ったぞーっ！」

「野伏せりだ！ いや、北条の乱波どもだーっ！」

風魔は、隊列に乱入するや当たるをさいわい武田の兵を撫で斬りにした。

『北条五代記』で、

たとえば、西天竺九十六人の中、一のくせ者を外道というがごとくである

と評されるように、風魔党の戦働きは情け容赦がない。小荷駄隊の兵は、人足から牛馬にいたるまで手当たり次第に斬り殺されていた。

ここへ来て、ようやく内藤昌秀も反撃を命ずる。

「ひるむなあ！ 荷駄は捨て置き、乱波どもを向かい討てえ！」

しかし不意を衝かれた武田の兵は秩序を失って逃げまどい、追いつがる風魔たちの手によって次々と討たれていったのだ。

これを見て慌てた殿軍の浅利信種が、一隊を引きつれ坂道を駆け上がって来た。

「修理亮殿しゅりのすけーっ、我らが助太刀つかまつる！」

彼らは、兜の脇立を猛牛のように傾け、槍の穂先を尾花のように連ねて暴れ回る風魔に攻め掛かっていった。

「相模の乱波なんぞ恐るるに足らぬ、竜の髭を蟻がねらうようなものじゃ！ 孫子の御旗のもと、我らがたちまちのうちに捻り潰して……」

しかし浅利信種がそこまで言い掛けたとき、彼の首が鶏卵を叩きつぶしたように消し飛んだ。ぱあっと赤い花を咲かせて首無し死体が馬上から転げ落ちると、その後を追うように日輪を描いた軍扇が

くるくると宙を舞った。

風魔小太郎の放った三十刃玉が命中したのだ。

これには、さすがの内藤昌秀も色を失い、はるか峠の先を睨みながら低く呻いた。

「ううむ……………三郎兵衛はまだ来ぬか？」

風魔の乱入によって算を乱した武田軍の隊列を高所から見下ろしながら、しかし信玄は眉一つ動かさず悠然と構えていた。その同じ馬上には、真つ赤な小具足姿の鈴鹿が信玄の胴に腕を回し、頬をすり寄せまわりついている。

一条信龍は、信玄の元へ駆け寄ると、頭を低くして即座に言上した。

「御屋形様、それがしこれより手勢百騎を引きつれ、修理亮殿の救援に向かいまする」

その言葉は、信玄に対して発せられたものであるが、しかし彼の鋭い視線は、妖女鈴鹿に向けられていた。押し黙る信玄に代わって、鈴鹿が扇子で口元を抑えこころと笑った。

「ほほほ……………、恐や恐や。一条殿は、まこと猛々しい、穢迹金剛えしやくこんごうのような御方じゃなあ……………」

風林火山の旗が風を打つなか、しばしの沈黙が訪れる。

不意に信玄が、

「……………行け」

と低く言い放った。

「ははっ！」

一礼するや信龍は、鹿毛の駿馬にまたがり馬煙を立てて駆け去った。

彼の率いる遊撃隊の猛者百騎が、白地に裾赤の旗差物をひるがえして駆けつけたときには、小荷駄隊の多くの兵が血に染まり荷駄も大半が引き倒され中身を奪い去られていた。風魔の中には、掠奪を専門に行う部隊がいて、予め用意した牛馬に奪った荷を積み彼方へ

持ち去るのである。

荒れ狂う波光のごとく数多の白刃が陽を受けて輝いた。一条信龍隊の参戦により、たちまち剣戟に激しさが増す……。

信龍は、諸国を放浪する腕利きの兵法者などを好んで雇い、強力な兵団に育て上げていたが、また、彼自身も比類なき剣の達人であった。彼は、若年より神道流を修めたが、のちに山本勘助に師事して京流の奥義を会得していた。

京流は、京八流ともいい、京の一条堀川に住んだ陰陽師、鬼一法眼きいちほうがんを開祖とする剣術の一派である。

法眼が六韜三略りくとうさんりやくを元に編み出した刀法を鞍馬で修行する八人の僧が受け継ぎ、それがさらに後世に伝わって研鑽錬磨され完成された刀術の一流派を成したのだ。

その分流には、あの源義経が修めた鞍馬流や、宮本武蔵と死闘を繰り広げた吉岡流がある。

ちなみに、六韜とは周の太公望が、三略とは秦の黄石公が撰集した中国古典の兵法書である。

京流は、敵が身に付けた甲冑の隙間を狙う介者剣法かいしゃで、頸動脈を切り、足を払い、裏籠手を断ち、高股に斬りつける極めて実践的な刀術である。京流などと名前こそ雅だが、その中身は一撃必殺の荒武者剣法であった。

「相模の盗賊どもめ！ この一条右衛門大夫が残らず剿匪せうひしてくれろぞ！」

信龍は、群がる風魔の間隙を縫って馬で駆け抜けざま、紫電一閃、背中の長刀を抜き放ち風車のように回転させ右へ左へと斬り分けた。たちまち数人の風魔が首から血潮を吹き上げて倒れる。さらに信龍は、馬首を回して方向を転ずるや別の一団に向かって敢然と斬り掛かりながら喚いた。

「賊の渠魁きょかいはどこだあ！ 風魔小太郎、出て参れ！」

その姿は、鈴鹿が評したように烏枢沙摩明王のごとく猛っている。
しかし、当の風魔小太郎は、戦場を遙かに見下ろす樹上より抱え筒の照準を信龍に合わせ、鬼面の奥でせせら笑っていた。

「くつくく、甲斐の猪め、小田原への土産に狩り獲ってくれよう」
抱え筒とは、特殊な製法で造られた大型の鉄砲である。二十匁玉から五十匁玉を使用する大口径の銃で、中には一貫目玉を放つ大筒のようなものであった。今、小太郎が一条信龍に狙いを定める三十匁玉筒も、小城の門くらいならば吹き飛ばしてしまう程の威力があった。

ちりちりと火縄の燃える音が、葉擦れの囁きに吸い込まれる……。不意に、小太郎の背後から凄まじい殺気が立ち上った。

「その首、もらったあ！」

突然、ムササビのように樹間を跳躍した黒い影が、猛然と小太郎に襲い掛かった。鋭いかぎ爪が小太郎の白いうなじに振り下ろされる。彼女は、寸でのところで体を捻り辛うじてこの攻撃を躲した。

「何奴じゃ？」

「死ねい！」

敵は、小太郎と同じ樹の枝に立ちはだかるや、口から針を吹き同時に左右の手を猫のように振り回した。小太郎は、辛くも針を避け、その拍子に顔をしたたか殴られ樹の下に転げ落ちた。彼女の鬼面には、ざっくりと爪痕が刻まれていた。もし面を付けていなければ、その美しい顔はずたずたに引き裂かれていたであろう。彼女は、敵の尋常ならざるのを察し、身をひるがえすや枯葉を踏み鳴らして走り出した。

そそり立つ木々の間に、敵の遠吠えがこだまする。

次の瞬間、その異形の忍者は、栗鼠のように樹幹を駆け降り、這いつくばったまま疾駆した。なんと敵は、獣のように四足歩行で走るのだ。しかも迅い！

小太郎は、あっと言う間に追いつがられ、逃げ切れないと知った

彼女は、踏みとどまって抜刀した。

そして彼女は、ここで初めて敵の全容を見る事となった。身の丈は、八尺を越える異常な長軀である。ただし手足の長さは小太郎とさして変わらない。つまり、異様に胴体が長いのだ。そして両手両足には飛爪ひこづめと呼ばれる鍛鉄製のかぎ爪が嵌められ、これによって易々と樹に駆け上がり、また敵を残忍に殺傷しているのである。

「殺す前に、貴様の名を聞いておこう」

小太郎のしわがれた声に、敵が不敵な笑いで答える。

「ふふふ、死ぬのはお前だが……覚えておけ、私の名は戸沢白雲斎だ」

その相貌は、眼窩がんかが髑髏のように落ち窪み頬は抉えぐったようにけているが、まだ青年といった若さであった。ただ目だけが猛獣のようににぎらついているのである。

「信玄に雇われた甲賀者だな？」

言いながら小太郎は、体軀を大きく見せるために履いていた高下駄を脱いだ。これにより、本来、彼女が持つ俊敏さと跳躍力が遺憾なく発揮できるのである。

白雲斎は、これには答えず舌なめずりした。

「もはや問答無用。死ねえ！」

白雲斎が地を蹴って跳躍した。と同時に伸び上がって爪を振り下ろす。小太郎は、横一文字に刀を振るいながら飛び退ってこれを避けた。かぎ爪が刀身をはじき返し火花が散る。

と、そのとき貝を吹く音とともに鑿鑿うつつと響き渡る鼓つづみの音が秋の空を駆け、二人の耳に届いた。

北条の退き太鼓か……？

一瞬、白雲斎の動きが止まる。その機を逃さず小太郎が跳んだ。彼女の脇に構えた忍者刀が、秋水のごとく煌めく。次の瞬間、疾風迅雷の斬撃が、間延びした白雲斎の長い胴を両断した。

斬った！

白雲斎の上半身が、どうと地へ崩れ落ちる。しかし、次に小太郎が見たものは、信じられない光景だった。

切り離された白雲斎の上半身は、二本の腕で素早く立ち上がると、そのまま猛然と駆け去ったのである。さらに上体を失った下半身も、いずこかへ消え、小太郎はただ茫然とその姿を見送ったのであった。

あ奴、化け物か……？

結局この三増峠の戦いは、山県昌景率いる別動隊の出現により北条軍は総崩れとなり、武田方の勝利に終わった。

『北条五代記』には、味方は崩れ、坂の途中で雑兵二三百人が討たれたとあるが、実際には、北条方は、死者三千人を超える惨敗を喫したのであった。

そして風魔小太郎は、そう遠くないうちに再びあの異形の忍者、戸沢白雲斎と死闘を演じるであろう事を予感した……。

続く。

猿飛と霧隠／甲斐の透破兄妹（3）

風魔小太郎が、戸沢白雲斎と再び相まみえたのは三増峠の戦いから一年半後の元龜二年、春まだ浅い御坂路のことであつた……。

昨年末頃より、小田原北条家の実質的当主である北条氏康は、病の床に就いていた。

氏康は、五十六歳。十二年前すでに、四代氏政に家督を継がせ政務の大半を委譲してはいたが、戦国最強と謳われた武田軍や上杉軍と絶えず角突き合わせている北条軍団の総指揮権は、未だ氏康が握っていた。彼は、今こそ軍事・外交面での采配一切を氏政に委ねるときだと悟つたが、しかし彼には、一つだけどうしても気掛かりな事があつた。

氏康は、年が明けてまもなく、風魔小太郎を枕元に呼び、こう告げた。

「……………上杉との同盟を白紙に戻し、これよりは甲斐の武田と結ぼうと思う」

鈴を張つたような小太郎の瞳が、わずかに翳つた。

「それは、三増峠での合戦の折、謙信が、我らの援軍要請に応えなかつた事への怨みからでございましょうか？」

「いや。そのような些細な事ではない……………」

氏康は、遠い目で、天井の梁に掛かつた蜘蛛の巣を見つめた。破れかけた巣には羽虫が一匹、力尽きたまま風になぶられていた。

「信玄は、貪欲な男だ……………しかし利に聡い者は、また、その利によつて縛られる。ある意味では、扱いやすい存在ともいえるのじゃ。」

だが、謙信は……………あの男の行動原理は、わしには理解できない。のう、小太郎……………奴は、いったい何を欲して戦つておる

じゃ？」

「さあ……？　しかし所詮は、足利將軍の權威に固執する石頭。殿のご器量とは比べものにならぬ匹夫ひつぷにございますれば……」

「いや、そうではない、そうではないのじゃ、小太郎。　あの男はな……」

氏康は、老練な顔を引き締め、鷹のように目を細めた。

「　上杉謙信という男はな、ただ、ただ、ひたすらに戦う事が好きなだけの人間なのじゃ……」

閉じられた障子戸に燦々さんさんと日が当たっている。その向こうにある庭園の木々から、時折どどと雪垂ゆきしずいの音が立った。

幾分寒さの和らいだ小田原城下では家々の鶯いづかに燕雀がさえずり、樹木もすでに芽吹き始めていた……。

「奴は、自身を軍神毘沙門天になぞらえ、おのれを頼ってくる者のためには、たとえ利薄くとも軍勢を率いてその敵と戦う。　何故じゃ？　正義心からか？　いや違う……、あの男にとって、戦とはすなわち娯楽であり快楽なのじゃ。思う存分、戦が出来れば、その理由など奴にとってはどうでもよいこと。だから奴は、つねにおのれを戦に駆り立てる大儀を欲しているのじゃ。朝廷や將軍の權威に固執するのもそのため……、戦を正当化する大義名分を得るためじゃ」

「……………」

「永禄四年、謙信がこの城を囲んだみぎり、奴は、十万もの大軍を率いていながら自ら陣頭に立ち、矢玉をかくぐって八幡曲輪からの手門めてもんに三度までも突撃した。わしは、そのとき井楼の上から、こっそり奴の姿を見たのじゃ……………」

氏康は、ため息とも、呻きともつかない声を低くしぼり出した。

「　あれは、まさに鬼の貌であった」

氏康は、ゆつくりと頭うきをめぐらせ小太郎を見た。

「我が死して後も、関八州にあまなく枝を鳴らさぬ御代を築くためには、血に飢えた謙信より、信玄と組んだ方が良いと、わしは考えるのじゃ……」

ここで氏康の鋭い目が、はたと小太郎の美しい双眸を射た。

「しかし、全ては、信玄存生の上での話じゃ、あの男が死んでおったのでは元も子もない」

「あの密書の件ですか？」

「そうじゃ、あれに書かれていた内容が真実なのか、わしはそれが知りたい」

雪をも欺く小太郎の白い面おもてに、緊張が走った。

「……分かりました。では、私はこれより甲斐へおもむき、信玄の生死を確かめて参ります」

「うむ、そうしてくれ。信玄は影武者を使うと聞くが、お前ならば見破れよう。北条家の将来をうらなう大切な仕事じゃ、くれぐれも頼んだぞ」

「御意」

三日後、風魔小太郎は、選りすぐった手下三十人を引きつれ風間谷を後にした……。

風間谷から甲斐へ行くには、仙石原から乙女峠を越えて御厨みくりやの集落を抜け、山中湖、河口湖の湖畔を回り込んで、御坂路へ出るのが最短の道筋である。

御坂路は、平安の頃に官道として切り開かれた古道で、後に鎌倉街道のひとつとして軍馬が移動できるよう整備された。甲斐九筋のうちでは若彦路わかひこじと並んで甲斐と駿河を結ぶ重要幹線だが、尾根伝いに曲がりくねった峠にさしかかると道はとたんに険しくなる。とくに雪の残るこの季節は、土砂や倒木などで道が寸断され、まさに切所の連続であった。

小太郎は、途中で手下数人に馬を預け、残りの人数を二隊に分け

て徒歩で御坂峠を登った。全員が白衣の首に念珠を提げ、斑蓋はんがいを頭にかぶった行者の姿に身をやつしている。

「ここから先は、まさに虎穴に入るようなものじゃ。皆の者、重々用心して掛かれよ」

「はっ」

そう言つて、小太郎が送り出した先発隊から、程なくして危急を知らせる号笛が聞こえてきた。

「何事だ？」

小太郎は、後発の人数を従えて山道を駆け上がった。

「こ、これは……」

熊笹の見え隠れする雪原からは、無数の古木が突き出している。

その真つ白い残雪の上に、点々と赤い血が飛び散っていた………

先に発った風魔の手下たちは、何者かに襲撃されすでに全滅していたのだ。

「……これは、刀疵かたなきずではないな」

手下どもの屍体を検分して小太郎が言った。

「まるで、獣が爪で引き裂いたような………」

ここで小太郎は、はっとなつて顔を上げた。皆を決し、みなに向かつて叫ぶ。

「いかん！ 恐らく敵は、まだこの場所にいるぞ。みんな散れ！」

彼女がそう叫んだ刹那、樹上から唸り声を上げて敵が襲い掛かった。たちまち手下の一人が、断末魔の悲鳴をあげ体をずたずたに引き裂かれる。続いて二人目が襲われ、春光を照り返す雪面が鮮やかな赤に染まった。

すばやく飛びすさつて危地を脱した残りの風魔たちは、抜刀してこれを取り囲んだ。

「やはり貴様か……戸沢白雲斎」

怒気を孕んだ小太郎の声が、鬼面の下からしぼり出される。白雲齋は、四つん這いのまま小太郎を見上げてせせら笑った。

「久しぶりだな、風魔小太郎。いつぞやの礼をしにきたぞ」

そう言いながら、ゆっくり立ち上がる白雲齋の姿を見て、小太郎が首を傾げた。

「……たしかあの時、わしはお前を二つ胴に斬って捨てたはずだが」
「ふっふっふ、俺の体は、不死身なのよ」

そのとき、白雲齋の背後にいた風魔の手下二人が雪原を蹴って跳んだ。

「 待てっ！」

小太郎が制したときには、すでに二人の仕込み杖が白雲齋に肉迫していた。

白雲齋の首が飛ぶ。そう思われた瞬間、彼は自分から雪上に身を投げ打って倒れ伏した。二人の振るう白刃が空しく風を切る。

次に白雲齋は、信じられない動きをした。

彼は、頭で体重を支えながら倒立し、両足を左右に広げたまま竹とんぼのように回転したのだ。彼の足先には、鍛鉄製の鋭いかぎ爪が嵌められている。その凶器が勢いよく振り回され、態勢を崩した二人の体を引き裂いたのだ。

「ぐわあ！」

喉を切り裂かれ、二人の風魔は、血煙を振りまいてきりきり舞いした。

「待て、白雲齋！」

小太郎が一步踏み出す。

「貴様との一騎打が所望じゃ」

白雲齋は、バネ仕掛けのように素早く起き上がると、血で汚れた爪を力チャ力チャ摺り合わせながら不敵な笑みを浮かべた。

「よかるう、風魔小太郎の技がどれほどのものか、とくと拝見いたす」

風は、無かった。

遙か遠く、黒岳の稜線を越えて、河口湖がその鏡面のような湖水を潭々と湛えている。その奥には、白扇倒に懸かる靈峰富士の堂々たる姿が見える……………。

先に地を蹴ったのは白雲斎だった。

彼は、四つん這いになると獣のように俊敏な走りを見せた。虎のように唸りを上げながら小太郎との距離を一気に詰める。

これを迎え撃つ小太郎は、仕込み杖を右肩に担いだままふわりと跳躍し、懷に忍ばせていた左手から投網を打った。それは、鴨を獲るときに使うような三角形の網で、投げ打つと同時にぱあっと開き、蜘蛛の巣のように拡がって白雲斎を包み込んだ。

「何だ、これは？」

彼は、まわりつく網を爪で引き裂きながら、たたらを踏んで立ち止まった。

そこへ小太郎の仕込み杖が一閃する。

隙だらけの白雲斎の胸が、またも両断された。上半身がどうと崩れ落ちる。しかし、ふり返った小太郎の顔を殴りつけながら、白雲斎の上半身が跳ね飛んだ。同時に下半身も反対方向に駆ける。

前回、小太郎が彼を斬ったときと同じであった……………。

彼女の鬼面が割れ、足下に転がり落ちる。中から現れた絶世の美女は、さすがに驚愕の表情を隠しきれなかった……………。

こいつは、本当に化け物なのか？

奇しくも小太郎は、白雲斎の上半身と下半身に挟まれる形となったのだ。

「ほう……………、風魔小太郎の正体は、美しいおなごであっただと上半身……………」

「なんだ兄者、まさかこの女に惚れたわけではあるまいな」

下半身の声は、若い娘のものであった。

小太郎は、ふっと紅い唇に苦笑を湛えて呟いた。

「なるほど 戸沢白雲斎とは、二人の忍者の合体であつたか」

「ふふふ……、正体を見破られたついでに名乗ってくれる。俺の名は、猿飛百助だ！」

百助は、丸太のように太い腕で上体を支えていた。彼は、幼少の頃、両足を膝上三寸ほどのところから切断していた。以来、厳しい修行を積んで腕を足のように使うことが出来るようになった。二本の腕で地を走り、易々と樹に登るのである。

「じゃあ、あたしも名乗るよ。百助の妹で、霧隠の鹿尾つてんだ」

鹿尾は、破れた装束の胸から顔を出して言った。まだ幼さの残る髻髪つないがみの娘である。彼女には、生まれつき両腕が無かった。だから彼女も兄同様、修行を積み、今では両足を手のように器用に操ることが出来る。

足の無い兄は、腕を……。腕の無い妹は、足を……。それぞれが、足りない部分を補って異常に発達させた肉体を合体させたとき、戸沢白雲斎という一人の超人的な忍者が生み出されるのである。鍛え抜かれた四肢は、猛獣のように大地を駆け、敵を襲うのであった……。

「さあ、二対一になつたぞ……。どうする小太郎？」

続く。

猿飛と霧隠／甲斐の透破兄妹（４）

それ、風魔は二百人の中にあつて、隠れない大男、丈七尺二寸、手足の筋骨は荒々しく、ここかしこにむら瘤があつて、眼は逆さまに裂け、黒髭で、口は両わきへ広く裂け、牙を四本外へ出している。頭は福祿寿に似て、鼻は高い。声を高く出せば、五十町に聞こえ、低く出せば、しわがれた声でかすかである

『北条五代記』で語られる風魔小太郎の姿である。

しかしその正体が、高下駄をはき、鬼形の面をつけた若く美しい女であることを知る者は少ない。

彼女は、もとの名を累かさねといった。

累が、先代風魔小太郎の手によつて風間谷へ攫さらわれて来たのは、彼女がまだ三つになつたばかりの頃である。武骨な先代小太郎が、何ゆえに頑がんぜはない少女をかどわしたのか今となつては知る由もないが、ただ養女として館へ入つたその娘が、幼いながら天上の美姫もかくありやと思えるほどの麗色を備えていた事は、風間谷の誰もが知るところである。

そして累がその天稟てんびんを初めて現したのは、風魔館へ来て季節がひとめぐりしたある盛夏いちじつの一日、草木の緑が莽もう々と草いきれを放つ昼下がりのことであつた……。

先代小太郎が座敷で静かに看経かんきんしていると、庭の方から何やら楽しげにはしゃぐ声が聞こえてくる。累が一人戯れる声だと分かっていたが、それがあまりにも楽しそうだったので、小太郎はふと覗いてみる氣になつた。

足音を忍ばせ縁に立ち、そつと庭の方を窺うと、はたして、そこには嬉々として遊びに興じる累の姿があつた。

しかし小太郎は、その様子を見たたん、はつと息を呑んだ。彼女が遊び相手にしているのは、褐色の鱗うろこをてらてらと光らせる一匹の蝮まむしだったのだ。いかにも毒を蓄えていそうな三角形の頭をもたげ、牙を剥き、全身のバネを利かせて飛び掛かる蝮を、ひらり、ひらりとかわしては手を打って喜んでいるのである。

その鮮やかな身ごなしを注意深く見守っていた小太郎は、やがて遊びに飽きた累つみが何の躊躇ちゅうちうもなく蝮を石で打って殺すのを見て、彼女を風魔のくノ一に育て上げる決心をした。

どの流派においても忍術修行には、筆舌ひつぜつに尽くせぬ厳しさがある。途中で命を落とす事さえ珍しくない。事実、小太郎の三人いた息子のうち二人までもが修行中不具となり、出家して谷を去っている。そして残る一人の息子を合戦で失ってから、彼はいいよ累を一流の忍者へと育成することに心血を注いだ。

累は、驚くべき天質てんしつと少女の至純な精神をもって、風魔が代々培ってきた怪力乱神かいりょくらんしんの技を会得していった。やがて十八歳で修行を終えたとき、もはや風間谷の中で彼女と肩を並べるほどの術者はいなくなっていた。

元より、風魔の頭領たる、風魔小太郎の名跡は世襲ではない。忍びとしての技倆、軍団を統率するだけの胆力を具えているかによつて選ばれるのである。しかし小太郎は、あえて自分の娘である累を後継に推した。そして、それに意義を唱える者はいなかった。それほどまでに彼女は、卓越した技倆と奇智を身に付け、また一党を従えるだけの胆勇を備えていたのであった。

今、その五代目小太郎が……男装の麗人が、おのれの生命に、かつて味わった事のないほどの危機を感じていた。

彼女は、抜き放った一刀を手に慎重に身がまえ、左右の敵に油断なく目を配っていた。が、その白い肌はどうしようもなく粟立ち、額には脂汗が滲んでいたのだ……。

戸沢白雲斎を名乗った兄妹は、合体を解いてからも変幻自在の攻撃で小太郎を翻弄した。

兄の百助は、その発達した二本の腕で地虫のように這い、すきあらば小太郎の足をすくおうとする。一方、妹の鹿尾は、唐人が使う武術のように腰を捻り疾風の足技を間断なく見舞ってくる。

兄をかわせば妹の、妹をかわせば兄の　その見事なまでに連携した撃殺の迅技は、絶え間なく小太郎を襲い、彼女が身にまとう雪白の浄衣に血の紋様を描いていった。白衣の下に鎖帷子くさりかたびらを着込んでいなければ、彼女はすでに致命傷を負っていたであろう……。

「殺すなよ、この女は後で犯して、俺の子を生ませるんだ」

百助が、獣じみた視線を小太郎の肢体に這わせる。とたんに、鹿尾が幼い頬を膨らませた。

「そんな事、あたしが許すもんか！　こんな女、ずたずたに引き裂いてやる」

鹿尾は、皆をつり上げると、独楽こまのように一回転して足の爪を振り抜いた。小太郎は、身を捻って一撃目をかわし、二撃目を仕込み杖で受けたが、その拍子に澄んだ金属音を響かせて刀身が折れた。

「くそっ」

彼女は狼狽し、地を蹴って飛び退ると必死の形相で懷中に手を突っ込んだ。そして隠し持っていた炮烙玉を握りしめると、手下に向かって叫んだ。

「この二人は、私が命と引きかえに討って取る。お前たちはすぐに山を下り、御本城様から申し使った命を果たせ！」

風魔の手下たちは、手も足も出ず三人の死闘を遠巻きにしていたが、これを聞いて次々踵を返し樹間を風のように駆け去った。

「兄者！　風魔の下忍どもが逃げるぞ」

「安心しろ、俺たちの足ならすぐに追いつく。それよりも、まずはいいつの始末からだ」

百助の体から陽炎のごとく殺気が立ち上った。

「よし分かった、引き裂いて山犬の餌にしてやる」

鹿尾が紅い唇をぺろりと舐め、じりっじりつと間合いを詰める。

小太郎は、この兄妹を道連れに自爆するつもりであった。懷に忍ばせた炮烙玉を持つ手がじつとりと汗ばむ。

彼女は、覚悟を決めると心中で九字を切った。

臨 兵 闘 者 皆 陣 列 在 前

と、その時である。

玲々^{れいれい}と珠の触れあうように澄んだ歌声が、天上から三人の耳に降りそそいだ。

たな引くや 千里も爰の春がすみ ほかもたつねし 梅に

ほふかけ

何だ？

三人は、思わず樹上をふり仰いだ……。

冬でも青々と枝葉を張り出す^{おおしうぎ}大白檜曾の合間を縫って、春昼の陽が金糸のように差し込んでいる。しかし目をこらし、注意深く樹上を見回してみても、それらしい人影は見当たらなかった。

歌は、さらに続く……。

うぐいすの なれ来る朝戸しつかにて 日もほのめきぬ

雪の山もと

「きゃあ！」

突如、鹿尾が悲鳴をあげて雪上を転げ回った。

「 兄者っ！ 助けてくれえ」

「 どうした？ 」

百助が慌てて這い寄ると、鹿尾の顔面に一匹の血のように赤い蜥蜴^{かげ}が張りついているのが見えた。腕のない鹿尾は、その蜥蜴を顔から払うことが出来ず身もだえして助けを求めたのだ。

「取って、取って。早くこいつを取ってくれよう……」

「よし分かった、ちよつと待ってろ」

百助は、暴れ回る鹿尾を押さえつけ、彼女の顔から奇つ怪な蜥蜴を引きはがした。

「何だ、こいつは？」

蜥蜴は、百助の手に落ちると、きゅつきゅつと小さく啼いて、やがてぐつたりと四肢を投げ出し飴細工のように溶けてしまった……。「ぐぬう……、こいつは妖かしの術だ。　　いったい誰の仕業だ？」

百助が忌々しげに手についた赤黒い液体を拭っていると、身を起こした鹿尾が再び悲鳴をあげた。

「兄者、大変だ！　風魔小太郎がいないよ」

「なにっ！」

見ると、小太郎はいつの間にか姿を消していた。そして彼女の代わりに炮烙玉が一つ、導火線から鮮やかに火を吹き上げていたのだ。

「うわっ、ばか　　」

「逃げろお！」

刹那、ずしんと銀嶺を揺るがす爆音が轟いた。

音は、大気を震わせ、山々にこだまし、やがて暖気に緩んだ残雪を蠢動させた。たちまち山腹の急斜面が雪崩^{なだれ}を起こし、百助と鹿尾は、津波のごとく押し寄せる白魔に飲み込まれた。

「ひいーっ！」

大量の雪が樹木を薙ぎ倒し、斜面を覆いつくすと、百助と鹿尾の姿は、あつと言う間に濛々と立ち籠める雪煙の中に見えなくなった。冷気を含んで空気の匂いが変わり、鳥が一斉に飛び立った。

やがて舞い上がった雪が、きらきらと銀粉のように煌めきながら降りそそぐと、辺りは再び何もなかったように静寂を取り戻した……。

しばらくして、不意にどこからか鈴を転がすような笑い声が聞こえた。

「あははは、さすがの戸沢白雲斎も、これで一卷の終わりだ」
今川のくノ一、ゆうである。

彼女は、見上げるような大樹の枝に馬乗りになつて、はるか足下で繰り広げられる死闘の一部始終を見下ろしていたのだ。その鶯色の瞳が嬉々として放つ輝きは、ある種、蠱惑的な美しさを感じさせる。

「それにしても、さすがは風魔だ。あの逃げ足の速さには恐れ入った」

さつき式神を使つて風魔小太郎を助けたのは、彼女の単なる気紛れではない。彼女は、小太郎が斉藤主馬之助から密書を奪つて以来、いつかその借りを返してやろうと、ずっと風魔一党をつけ狙つていたのだ。

「小太郎には、もう暫くのあいだ働いてもらわなくちゃあね。密書を奪われたお返しだ、とことん盗人の上前をはねてやるよ」

彼女は、白い喉を揺らしてさも愉快そうに笑つたあと、身をひるがえすやムササビのように樹から樹へ飛び移り、やがて鬱蒼とした林の中に消えていった。

……………それから、どれほどの刻が経つたであろうか。

光るような風が木々の梢に留まる雪片を飛ばし、山鳥がかまびすしく群鳴するなか、突然……雪面から一本の腕がぬうつと突き出した。腕は、やがて雪の上をまさぐり、かきむしりながらその下に続く胴体を漸^{ゆる}う引き上げた。

蟬の幼虫が穴から這い出るように雪の下から現れたのは、猿飛百助である。彼は、雪まみれの白頭をぶるつと振るわせると、いま自分が出てきた穴に手をつ突っ込んで今度は鹿尾を引っ張り上げた。

「おい、大丈夫か？」

「……兄者、あたしはもうダメかと思つたよ」

「俺もだ……。一瞬、死んだおつ母^かの顔が臉に浮かんだ」

ふたりは、長いあいだ青ざめた顔を見合わせていたが、やがて忘れていた怒りが込み上げてきたのか、ぎりぎりど歯の根を鳴らし始めた。

「ちくしょう、風魔め……。この借りは絶対に返してやるからなあ」
「そうだよ、この手であいつらを八つ裂きにしてやらなけりや、腹の虫がおさまらないよ」

そう言つて鹿尾がすつくと立ち上がると、すかさずその上に百助がぴよんと跳び乗つた。

「まずはご城下で奴らの足取りを探ろう。見つけ次第片っ端から殺してやる　急ぐぞ！」

「あいよ！」

合体した二人は四つん這いになると獣のように吼号し、しなやかに躍動しながら^{きゅんきゅん}岌々として雪の斜面を駆け下つていった……。

続く。

越後の蛟竜とその男、織細につき（1）

春日遅々……。

甲府城下にも、ようやく本格的な春の訪れを感じさせる麗らかな光風が吹き始めた。

鶯は、別名、春告鳥はるつげどりとも言つ。

早々と芽吹きはじめたケヤキの枝につがいの鶯がやって来て、先程から長閑に掛け合いをしているのだが、雨戸を立てきつて薄暗い真田屋敷の客間では、陰々と向かい合う二つの影が重苦しい雰囲気
のなか密談をかわしていた。

「……………それは、まことでござるか？」

一条信龍は、苦渋の表情で、真田一徳斎の骸骨のような顔を見つめた。

「御屋形様のお命が、あと五年とは……………」

一徳斎は、腕を組み、半眼を閉じたまま瞬きもせず口だけを動かして語った。

「残念ながら、死人還りなどと申してもしよせんは、たまゆらの命、御屋形様もけつして長寿を得たわけではござりません。いかな人外魔道の技を使おうとも、神仏が定めた生々流転しやうじやうてんの理法を曲げること
は不可能なれば、持つてあと五年……………、あと五年のうちに御屋形様と鈴鹿をつなぐ臍へそのおの緒は、次第に腐れやがて断ち切れましよう……………」

信龍は呻吟した。駿河に出兵した信玄から留守居を命ぜられたのを好機と、同じく息子信綱の留守を守って真田屋敷に残る一徳斎を訪ねたのだが、逆に思わぬ秘事を打ち明けられてしまったのだ。

「そのこと、御屋形様はご存じあるのか？」

「むろん、死人還りのお許しをたまわる前に、とくと申し伝えてあ

ります」

病を得てより、なにかと戸石城にこもりがちな一徳斎であるが、その飄々とした姿を見ていると、とても病人とは思えない。死をも超越した仙人か何かのように見えてしまう。その彼の諸法実相をも見透すような慧眼が、ぼうつと妖しい光を放った。

「さればこそ」

腕組みを解く。

「御屋形様におかれては、一刻も早いご上洛を望んでおられます。おん命尽きる前になんとしても京へ上り、將軍家を傀儡して天下に号令なさるおつもりでござろう」

信龍は、はつと息を呑んだ。

「天下……と申したか？」

「左様、天下にござる」

一徳斎は、病のため薄っぺらくなった胸をぐつと反らせた。

「右衛門大夫殿、宝は湧き物と言うは、あれは謬伝にござるぞ。今こそ、我らがその武威をもって京に孫子の御旗を立てねば、天下は、遠からず信長のものとなってしまふに相違ござらん」

「うつむ……」

信龍は、ぐつと虚空を睨んだ……。

この頃すでに尾張の織田信長は、足利義昭を奉じ上洛を果たしていた。

信長は、それまで京で権勢をふるっていた松長久秀や三好三人衆らを追い出し、また自らが擁立した將軍の権力を剥奪して、まさに活殺自在の専政をおこなっていたのである。

彼こそ今、もっとも天下に近い存在と言えるだろう。

「……確かに、信長を滅ぼすのは我が御屋形様において他にない。

しかしながら、我が武田の領地は、東に北条、北に上杉、西に

徳川と、三方をぐるり敵に囲まれておる。迂闊に大軍を遠域へと動かせば、その背後をいずれかの勢力に襲われるは必定。我らは包囲されておるのじゃ、まさに前門には虎、後門には狼……、一徳斎、この儀いかがいたす？」

一徳斎の目が、どろりと濁った。かつて鬼弾正と呼ばれたこの男が、謀略をめぐらせるときに見せる貌である。

「恐らく……」

と、一徳斎は言った。

「この武田包囲網を裏で画策するは家康のためきでござろう……。まずはやつを孤立させて一気に叩き潰す」

「家康には清洲同盟がある。信長が黙つてはおるまい」

「ふふふ、六天魔王は、阿弥陀如来で足止めしておくのよ」

「……何の話だ？」

「お忘れか、石山本願寺の顕如上人は、御屋形様とは相婿じゃ。いざというときには、本願寺の門徒勢力が我らの切り札となるう」

信龍が膝を打った。

「おお、一向一揆か」

「諸国の門徒勢力がこぞつて石山本山に集結すれば、そしてその勢力に、浅井、朝倉、六角、三好など諸大名の軍勢が加われれば、さしもの信長とて家康なんぞに助力している余裕はござるまい」
「なるほど」

「さらに顕如上人を通じて越中の一向一揆勢にも檄を飛ばしておいた。謙信め、足下の火を消すのに大わらわで、我らの動きを牽制する事にまで手が回るまい」

「うむ……、しかし我らの背後には、まだ北条がいるぞ」

「ご案じ召さるな、三つ者の報告によれば、どうやら氏康の病は重篤らしい。氏政は、しょせん親の操り人形じゃ、しばらくは目立った動きをすまい。ふふふ……」

一徳斎は、口の片方だけをきゅっとつり上げて笑った。こういう

左右非対称の笑い顔をつくる人間にはくわせ者が多い。

信龍は、少し嫌な顔をした。

「一徳斎……、五年限りの命と分かっているながら、なにゆえ御屋形様を甦らせた？　これでは天下を手中に収めたたん、御屋形様は黄泉へと逆戻りではないか……」

そう詰め寄る信龍に対し、一徳斎は、黄色く淀んだ眼を閉じて嘆息をもらした。

「……………太郎様、ご存生ならば」

再び、枯れ枝のような腕を組む。

「御屋形様亡きあとも武田家はひとまず安泰、我ら家臣団も、いずれは天下の夢を新しい盟主に託すことが出来たでござろう。しかしながら四郎殿では……、あの人の好い勝頼殿では、まず譜代はおろかご親類衆さえまとめ上げることは困難。いかに精強無比な軍団を率いようと、家中の足並みが揃わなければ、飛ぶ鳥を落とす勢いの信長はもちろんのこと、家康、北条にも対抗できず、駿河一国を奪うことさえ危ういと存ずる。……………ましてや天下など夢のまた夢」

どうも、こやつと言う事はいちいち芝居がかっている。

信龍の涼やかな目元が、きゅつとつり上がった。

「本当に理由はそれだけか……？」

「何を申されたい？」

「天下に野心を抱いているのは、一徳斎、そのほう自身ではないのかと申しておる」

「馬鹿な……」

一徳斎が、ちらりと薄目をあけた。その焦点の合わぬ目を見据えて、信龍は言った。

「我が御屋形様は勇敢な武将なれど、決して無理押しはしない御方じゃった。合戦に臨んでも、常に六分か七分の勝ちを良しとなされ

てきた……」

六分七分のかちは十分のかちなり……八分のかちはあやうし、九分のかちはみかた大まけの下つくり也

と信玄自身、広言してはばからぬように、彼は完璧な勝利というものに価値を見出さない男であった。六分か七分の勝利を得ればそれで満足し、必要以上に相手を追い込まぬよう心がけていた。

圧勝は、味方の慢心を誘い、また敵の恨みを買う、と考えたのであろう。

さらに信玄は、

ゆみやの儀、とりやうの事、四十歳より内はかつやうに、四十歳より後はまけぬやうに

と『甲陽軍艦』で語られるように、老練になって得た極意として、勝つことより負けないことを常に心がけてきたのである。

信龍は、続ける。

「此たび、駿東部平定のため兵を挙げられた御屋形様は、興国寺城こそ落とし損ねたものの、北条綱成の守る堅城、深沢城を見事に陥落させ、これで駿河一国は、ほぼ我らの手に落ちたも同然となった。本来ならば、ここで一旦兵を引きあげるのが常道でござるが、しかし御屋形様はさらに遠江へと兵を進められ、透破どもの話によると、今はさらに三河まで足を伸ばし野田城を囲んでおられると聞く……。三河といえは家康の本拠地じゃ、御屋形様は、なにゆえそこまでして危険な遠征をなされる……？ いったい何をお考えなのじゃ……？ おぬしの死人還りにより復活なされてから、御屋形様はすっかり人が変わられた。……まるで、何かに取り憑かれているようじゃ」

しばしの沈黙の後、一徳斎がふつと鼻で笑った。

「はて？ その何かとは、まさかそれがしの事を申されているのではござるまいな？」

とぼけて見せる一徳斎を、信龍がぐつと睨みつける。

「おぬし、まさか……、己の野望を叶えんがため、あの鈴鹿とかいう甲賀者を使つて御屋形様を意のままに操り、それを踏み台に、いずれ天下を真田一族のものにしようと企んでいるのではござるまいな？」

真田一徳斎が、ぎろりと白目を剥いた。

「いかな右衛門大夫殿とて、その申されようは聞き捨てなりませんな。何を根拠にそのような事を……？」

ここで信龍は、長年心の中にしまっておいた、ある疑念を一徳斎にぶつけてみた。

「永禄四年……、川中島で謙信と合戦に及んだおり、わしは八幡原の戦場で瀕死の勘助入道とめぐり会い、これを介錯つかまつた……」

「ほう、道鬼斎殿を……、それは初耳にござるな」

山本勘助は、この川中島での合戦で、壮絶な討ち死にを遂げていた。

「死の直前、勘助入道は、栗田口吉光の脇差一振とともに、わしにこんな言葉を残された……」

信龍は、切れ長の目をすうつと細めた。

「弾正には気をつけよ、と」

蝋燭の火を吹き消すがごとく一徳斎の瞳からすうつと光が消えた。その落ち窪んだ眼窩には、もはや洞穴のような闇しかない。その顔は、まるで一個のしやれこうべのように信龍の目には映った。

「わしは最初、弾正とは、香坂弾正忠のことであろうと思っておつた。あの者は海津城にあつて常に謙信との戦いの最前線におるからな。もしあの男が敵に寝返れば、信濃はたちまち謙信の手に落ちてしまう……」

信龍は、一徳斎の表情のわずかな変化も見逃すまいと凝視しながら続ける。

「しかし、わしは最近になって、あのとき勘助殿が申された弾正とは、一徳斎、おぬしの事ではなかるうかと思ひ始めたのよ」

「……………何の話だ？」

一徳斎の、窖あなぐらのような瞳に、ちろりと青白い炎が揺らいだ。今まで彼が見せたことのない奇怪な目の輝きだ。その怪しい光を直視したまま信龍は、敢然と言ひ放った。

「正直に申せ、あの川中島での戦のおり、妻女山に陣張りする謙信が、いちはやく我らが啄木鳥きつぎの戦法を知り得たは、一徳斎、おぬしの謀略ではないのか！？」

一徳斎の、しやれこうべの眼窩に灯る冷たい焰ほむひがぼくと燃え広がったが、信龍はかまわずに続ける。

「あのときも貴様は御屋形様をいったん亡き者とし、再び死人還りにて甦らせることで武田家を意のままに操ろうと画策したのではないのか？ 正直に白状いたせ」

信龍がそう言い終わったとたん、一徳斎の枯れ木のような五体からたちまち凄まじい殺氣が立ち上った。

刹那、彼は床柱の横にある刀掛けから太刀を掴み取るとたちまち抜刀し、片膝立てたままそれを大上段に振り上げた。とても病人とは思えぬ電光石火の迅業はやわざである。

信龍は、部屋を逃げ出す暇を失い、脇差しを鞘ごと掴んで身構えた。太刀は、郎党に預けてあるのだ……。

くっ、妖怪め！

信龍は、内心狼狽しながらもことさらに平静を装って言った。

「その慌てぶり、さては凶星のようだな？」

「ふ……………小癩こしゃくな」

一徳斎は、にたりと口角をつり上げた。

と、次の瞬間、彼は太刀を反転させるや刀身をだんつと床板に付き入れたのだ。たちまち床下から、うつと押し殺したような呻きが

漏れる……。

「か、間諜か？」

「残念……、逃がしたようじゃ」

信龍が固唾を呑んで見守るなか、一徳斎は静かに刀を引き抜いた。どうやら刀身に血痕は付いていないようだが、しかし彼はその刃先をペロりと舐めると、笑みを漏らした。

「ふむ、どうやら手傷は負わせたようでごさるな」

「そうか……」

信龍は、ほつと息をついて、浮かしかけた腰を再び下ろした。

京流の剣を修める信龍であるが、一徳斎の恐るべき手並みを見せつけられ、改めて真田忍者の恐ろしさを痛感した。はたして自分は、この老人と本気で立ち合って勝てるのだろうか……？

そして、真田の術中に落ちたかもしれない武田家の行く末を案じると、信龍は憂鬱な気持ちになった。

「一徳斎、話の続きはまた今度だ……」

「よかろう、しかし今の間者に、我らが秘事を聞かれてしまったなあ……」

そうつぶやくと、一徳斎は虚空にむけて、まるで下男に使いでも頼むような気軽な調子で言った。

「手負いじゃ、あとをつけて仕留めよ」

すると、どこからともなく返事が返ってきた。

「御意」

真田屋敷の板塀の隙間から、一匹の山猫が足を引きずるようにして這い出てきたのは、まさにそのときであった。

掛け合いをしていたあの鶯は、とつくにどこかへ飛び去っている……。

続く。

越後の蛟竜とその男、織細につき（2）

甲府城下にある真田屋敷を出て、少し南に下ると、通称鍛冶小路と呼ばれる通りに出る。

その名の通り、武田家に納める武具や馬具などを鑄造・鍛錬する鍛冶職人の多く住まう町を南北に縫っている。今、この鍛冶小路の埃っぽい道端を、一匹の山猫が人目を避けるようにして歩いていた。猫は、どうやら怪我をしているらしく、後ろ足を引きずるようにして小路を下り、ときおり立ち止まっては用心深く辺りを窺っていた。

近頃は、合戦続きで鍛冶も忙しい。おかげで小路には人通りが絶えないが、しかしくすんだ毛並みを持つこの何の変哲もない猫に不審を抱くものはいないようであった。

猫はやがて小路を東に折れ、藤川を渡った先の杣入り道に、とぼとぼと分け入った。

その先には、甲府鍛冶たちが祀る金山神社がある。

さて、この猫のはるか後方をまた、編笠を目深にかぶった二人の武士がゆるゆると歩いていった。

一人は、がっちりとした体格の若者で、もう一人は系瓜へちまのような長い顔に白鬚はくしゆを垂れた仙風ただよわせる老人である。彼らは、懐手ふところのまま、いたって緩慢に歩を進めているのだが、不思議と迅い。

しかもその姿は、やや臃おほろであった……。

「きやつめ……、本当は我らの尾行に勘づいているのではないかと、若いほうの男が言った。

「なにゆえ、そう思われます？」

「二、三度、目が合った」

「ほづ……」

彼らの会話は、常人には聞こえない。風がそよぐほどの微かな声で囁いているのだ。

「あれは、若いおなごの目であつたな。秋波が妙に艶めかしかった」
若い男は、涼やかに目で笑つと、道端に生える青草の茎を引き抜いてそれを口にくわえた。白雲の遊ぶ蒼昊に、ふいつふいつという雲雀のさえずりが吸い込まれる……。

「いずれにせよ、我が真田屋敷に忍び入り、父上の太刀をかわして逃げ去つたほどの者だ。こつも易々と我らに後をつけさせているのがどうも氣に食わん」

「はつはつは、若は剣呑性ですなあ、それは杞憂にございましょう。何と言つてもあなた様は、真田家中にまず並ぶ者なき手練中の手練、現にこうして陽炎のごとく氣配を消しておられます。私とて長年、大殿様に仕えた身、腕に幾らかのおぼえもございますれば、敵に氣取られるような不覺はまずございますまい。そつご心配めさるな……」

「そつか……」

若い男は、それつきり黙つた。

この男、真田一徳斎の三男で、名を、武藤喜兵衛という。後に、上田の合戦で二度までも徳川軍の心胆を寒からしめた智將、真田昌幸の前身であつた。

閑寂とした檜原を切り通した参道を抜けると、いくぶん見通しの利くゆるやかな斜面に出た。そこに錆朱色をした簡素な鳥居が立っている。件の山猫は、用心深く一度こちらをふり返つてから、その鳥居をするりとくぐつた。

「やはり、お社に入るか……」

喜兵衛たち二人も、少し間を空けて後に続く。

金山神社の御祭神は、伊弉冉尊が火之神と一緒に生んだ金山毘古、金山毘売という夫婦の鍛冶神である。

古より製鉄産業には、少なからず呪術的要素が付きまどつた。そ

のため、古来、鍛冶を生業とする者はみな丁重に神を祀ったのである。

「若、知っておられますか、金山の神は、死体を好むそうです」
「ほう、それは何故だ？」

「さあ……？ 恐らく金山神は本来、土の神ゆえ、死体と一緒に土が豊かになつて喜ぶのではございませぬか？ とにかく、死体好きの神様のために、鍛冶たちはせつせと屍を踏鞴場へ運び込み、支柱に括り付けて祀るのだそうでございますよ」

「ふん、死体好きの神様とは、なんとも面妖だのう……。そう言えば、踏鞴の神というのは一つ目、一本足と聞いたことがあるぞ。のう源与、まるで道鬼斎殿のようだとは思わぬか……」

そう冗談めかして言ったが、この老人はいたって真剣な顔で答えた。

「おや、知りませなんだか？ 山本勘助殿は、片目を失い片足を損じたことよつて神通力を得られたのでございますよ」

嘘か誠か、そう言つて飄然と笑うこの老人の名は、小笠原源与斎という。神変奇特の技を自在に操る、真田一徳斎子飼いの幻術師であつた。

さて、二人が追う山猫は、ぬらくらと金山神社の境内を横切り、拝殿とは反対側にある宮寺へ向かつた。

寄棟造の屋根を持つこの宮寺には、貧相な向拝を頂いた櫺子窓の扉があり、猫はその階段下にある浜縁にするりと潜り込んだのだ。

「おつ、あんな所に入りおつたぞ……」

神宮の拝殿に比して、大きな仏堂である。このような小さな神社に別当があるのは珍しいが、八年前、甲府の町を痢病の伝染が襲つたとき、町にあふれた死者を一時安置するため急拵えに造られたものであつた。

「そうか、この寺を隠れ家にしておつたか。ここは町の衆も忌諱し、滅多に人など来ませぬからなあ……」

源与斎が、神木の陰から宮寺を盗み見て言った。目の奥が不敵な笑みをたたえている。一方、喜兵衛のほうは難しい顔で腕組みしたまま首を捻った。

「……これは間違いなく仲間が潜んでおるであろうな、うかつに踏み込めば我らとて命が危うい」

「どうします、若？ 大殿は、きやつを仕留めよと申されましたが」「うつむ……」

喜兵衛は、少し考えてから、

「俺は、屋敷へ戻って人数をかき集めてくる、おぬしは、ここで見張っておれ」

と言った。そして言い終えた頃にはすでに姿を消していた。

去りぎわ、

「構えて、手出しならぬぞ」

という声が遠くのほうから聞こえたが、たちまち風が枝をなぶる音にかき消された……。

余談になるが、この小笠原源与斎という男、いろいろ調べてみたが、いまひとつ出自がはっきりしない。

一説には、高天神城主、小笠原源与八郎長忠のことではないかも言われるが、だとすれば彼は、上泉信綱の弟子、奥山休賀斎一門の兵法者ということになる。ちなみにこの源与八郎長忠の子が、新陰流の刀法に中国の槍術を取り入れて”八寸の延金”なる無敵の秘剣を編み出した、あの有名な剣豪、小笠原源信斎長治である。

小笠原源信斎の父が源与斎かどうかは別として、とにかくこの謎の人物は、唯一『甲陽軍鑑』の中にのみその姿を現す。

甲州に小笠原源与斎と申して軍配者あり。これは種々奇特きじくを仕つるひとなり。風呂へ入り、戸をひとに押さへさせ、ひとびとの存ぜぬやうに外へ出で、あるいは夜各々と咄し居て、山の見ゆる座敷なれば「向ひの山に火を幾立てん、各々このみ給へ」などといふ

て、ひとのこのむやうに立つるほど軍配をよく鍛錬仕つりたるひとなり

この記述を見るかぎり、小笠原源与斎という人は、兵法者というよりむしろ果心居士かしんこじのような幻術使いではないかと思われるのである。

ところで、幻術とは、いったいに手妻のようなものであると人々は考えがちだが、実際は、ただそれだけのものではない。目眩ましには違いないのだが、その技は、強靱な精神力をもつて修験の通力とし、思いのまま相手に幻を見せたいへん高度な外法の術である。例えば、木の枝に立った術者が「俺は人ではなく梟ふくろうだ」と一心に念じたしよう。不乱に念ずるうちやがて術者は、自分が本物の梟であると本気で思い込んでしまう。そしてその不動の信念はやがて悪念力となつて術者の姿を見る全ての者に伝染する。それは、一種の集団ヒステリーと言つてもよい。とにかく、術者自身を含め、周囲の人々が「いつとき人のようにも見えたが、あれはいかにも梟に違いない」と確信すれば、木の枝にうづくまる一個の影は人にあらず、紛れもなく一羽の梟なのだ。

はなはだ乱暴な説明ではあるが、有名な加藤段蔵の”呑牛の術”などもこの方法を用いたにすぎない。彼は、もちろん牛など飲んではいない。実際には、ただ一心に咒を唱えながら牛の横に立っただけなのだ。

さて、話はもとに戻るが、この小笠原源与斎という男、自分の技に絶対の自信を持っていた。なので武藤喜兵衛が去り際に「手出し無用」と忠告したのを端っから聞き流している。

彼は、ご神木の陰から姿を現すと糸瓜顔をつるりと撫で、宮寺のほうへ悠然と歩んでいった……。

「ふふふ……、いずこの乱波かは知らぬが、まずは腕試し、腕試し、怨敵退散、怨敵退散………」

源与斎は雑木の生い茂る宮寺の裏側に回り込むと、そこにどつきと腰を据え、手に隠形印を結び、もそもそと咒を唱えはじめた。

「つなだ ときによりすぐればこれみな幻化なり、なだ 八大竜王、ば 難陀、なだ 娑伽羅、しやから 和修吉、わしゆきつ 徳叉迦、とくしゃか 阿那婆達多、あなはだつた 摩那斯、まなし 優鉢羅、うはつら 護法善神、みなわれに金剛力あたえたまえ、なうまく　さんまんだばだなん　なんどはなんど　そわか……………」

程なくして、神域の荘嚴な景色がぐにやりと歪みはじめた。

それは何と例えればよいのか、風景を映しだした一枚の鏡を徐々に折り曲げていった感じである。空間がねじれ、歪み、そしてまた元に戻ったとき、源与斎の姿が忽然と消えていた。その手並みは、空にかかる虹がいつの間にか姿を消しているのに似ている。

そして彼がいた場所には、茶色の斑紋が毒々しい一匹の蟒蛇が、のつたりととぐるを巻いていたのであった。

蟒蛇は、金色の眼を輝かせ、宮寺の縁の下にずりりと潜り込むと、仏堂の下まで這ってゆき床板の破れからぬうつと鎌首をもたげた。

予想に反して、仏堂の中はがらんとしていた。武藤喜兵衛が懸念する間者の一味などどこにも見当たらない。ただ、妙齡の巫女が一人、蜘蛛の巣の絡みついた須弥壇の前に横座りして、足の怪我の手当をてしていた。

源与斎は驚いた。

なんと、我が屋敷に忍び込み、まんまと逃げおおせたは、あのような細きおなごであったか。

年の頃は、二十一、二といったところか……、わずかに伏せた瞳が憂いをおび、全身の肌が透きとおるように白い。

何やら神秘的な雰囲気をもった女である。その巫女が、紅花で染めた緋袴の裳裾を根本までたくし上げ、すらりと伸びる玉肌の足に血止めの膏藥を塗りつけているのである。

その姿、仕草、匂い、どれをとっても美しい。

源与斎の变化した蟒蛇は、その淫靡な構図に陶然となり、吸い寄せられるように床の隙間から体をひねり出した。そして身をくねらせながら徐々に巫女の足下へと這い寄っていったのである……。

一方、巫女は蟒蛇の接近にも気づかぬ風で、患部にサラシを巻くためゆつくりと膝を立てた。とたんに、うつすらと若草の繁る股間が源与斎の視界いっぱいにひろがる。彼は、思わずごくりと生唾を飲み込んだ……。

これはよい、ひとつ殺す前に慰んでくれよう。

そう欲情したとたん、蛇は蛇でなくなった。女の色香に源与斎の幻術が破れたのだ。彼は、いつの間にか一人の老人の姿に戻り、ゆらりとそこにたたずんだ。その仙人のような姿を見上げ、しかし巫女は、驚く風でもなく婉然と微笑んで言った。

「……男というのは実に憐れな生き物だな、座を冷まさず修行してやっと会得した秘奥の術が、女の股ぐらを覗いたくらいであっけなく破れるとは、ふふふ、それではあまりにも可哀相だ、どうだご老体、死ぬ前にひとつ私の体を抱かせてやろうか」

巫女は手の甲で口元を押さえこころと笑った。源与斎は苦い顔になりその巫女を睨み据える。

「おい女、貴様はいずこの手のものだ？」

巫女は、すうつと立ち上がった。

と……、どこから取り出したものか、塗りの剥げかかった鬼の面をつける。とたんに、鈴を転がしたようだった女の声が、地獄の底から沸き上がるしわがれ声に変わった。

「我は相州乱波、風魔一党の頭なり」

「げっ、風魔小太郎か」

源与斎は思わず仰け反った。そしてその瞬間、彼は見たのである。光の届かない仏堂の天井に、真っ黒い影が幾つも幾つも、まるで蝙蝠のように逆さまにぶら下がっているのを……。

彼は、恐怖に目を見開いた。影の正体は、黒装束に身をかためた風魔党の忍者であったのだ。

やがて、おののく源与斎の頭上から、白刃を煌めかせながら無数の抜き身が降ってきた……………。

武藤喜兵衛が家来を引きつれ駆け戻ったとき、金山神社の宮寺はすでに空っぽだった。

ただ仏堂のカビ臭い床板の上で、小笠原源与斎の生首が丁重に三宝に乗せられていた。源与斎の首は、一枚の紙切れをくわえていた。喜兵衛がその紙切れをむしり取って読むと、こんな事が書かれていた。

武田大夫殿ノ秘密シカト承ツテ候。此ノ儀大上様ニ急度御注進仕リ候也

続く。

越後の蛟竜とその男、織細につき（3）

夏々^{かつかつ}と愛馬に揺られて凱旋する武田信玄の姿を見定めてから、風魔小太郎は帰国の途についた。

いかにも信玄に相違ない。魔性に憑かれおるのは見てとれるが……。

山野にはすでに真つ白い卵^うの花が咲き、それを蒸すような五月雨が潜々^{さんさん}と打っていた。

小田原へ戻る道すじとして、小太郎は、河内路をえらんだ。

河内路は別名、駿州往還^{すんしゅうおうかん}とも呼ばれ、古くから甲斐と駿河をつなぐ主要経路として軍馬はもちろん、商人や身延山参詣^{みのぶやま}の旅人なども頻繁に往来した。

小田原へ帰るにはかなりの大回りとなるが、この河内路を小太郎たちは、追つ手を振り切るため馬で駆け詰めに駆けた。

河内路は、富士川の清流に沿って切り開かれた道で、甲斐九筋^{かいくすじ}のうちでは割となだかなほうである。小太郎は、御坂峠での惨劇を思い起こし、あえて遠回りしてでも軽快に馬を飛ばせるこの道をえらんだのだ。

ところが途中、甲州兵の哨戒する営所がいくつもあり、小太郎たちはやむを得ずこれを強引に斬り破って通った。おそらく真田が手を回したものであろう、屯所には鉄砲衆まで配置される物々しさだった。

結局、無事小田原へ帰りついたのは、小太郎を含めわずか五人に過ぎなかった……。

碧瀾^{へきらん}たゆたう相模沖の海面をなでて、心地良い黄雀風^{うせつふう}が吹きつけてくる。

黄雀風とは、この季節、海の魚が変じて黄雀になるといいう言い伝えからこの名で呼ばれる爽やかな南東風のことだ。

その潮風に、てかてかと日焼けした額をなぶらせ、矢の如く馬を駆る壮年の武者がいた。彼が見事な虎葦毛の馬に鞭を入れるたび、追いつがる家来たちがどんどん後ろへ引き離されてゆく。

「ひーっ、我らと御屋形様とでは、馬が違いまする」

騎射笠を傾け必死に追いつがる家来たちの馬は、すでに息が上がっていた。

ここは、大磯の浜……。

そして、駉々しんしんと馬を駆るこの男の名は、北条氏政。彼は、今年三十四歳になる。押しも押されぬ相模の戦国大名、後北条家の当主であった。

ざざあんっという潮騒が、馬蹄の響きをかき消す。

彼は、時折むしように海が見たくなるのだ。

今日も家来数人を引きつれ、彼が寄進して修復させた国府六所の宮を視察した帰り、ふと海鳥の聲に誘われたのか突如馬首をめぐらせると一散にこの浜へと駆け下ってきたのであった。

遠く波打ち際を見透せば、もくもくと白い煙が晴天にとけてゆく。漁村の女たちが総出で、塩釜に満たした海水を煮詰めているのだ。

氏政は、子供の時分よりこの豊かな相模の海が好きであった……。

一般に、この北条氏政という武將は”凡庸”と評価されがちである。

理由の一つとして、親が立派すぎたことが挙げられるだろう。先代の北条氏康は、あの武田信玄や上杉謙信と互角に渡り合ってきた名將である。なかでも古河公方と扇谷・山内両上杉氏の連合軍八万余を相手に、わずか八千の寡兵でこれを打ち破った河越夜戦などは、数多ある戦国期の合戦の中でもひとときドラマチックなものとして歴史ファンの心に残るのではないだろうか。

しかし、風雲のロマンチシズムはさておき、冷静になって分析し

てみると、北条家五代のなかで最も勢力版図を拡大した功労者はこの四代氏政であろう。相模、伊豆はもとより、最盛期には上総、下総、上野、下野、武蔵、常陸と駿河の一部を含め、その領土は合わせておよそ二百四十万石にものぼった。

『北条五代記』の言を借りれば、

見しは昔、北条氏政は関八州に武威を振るい、氏政を恐れぬ敵はいなかった。隣国はみな敵であり、諸国の境に城を築き日夜朝暮に戦いが繰り返された。……氏政は四方八方の敵と数年間戦い、他国の片端を切り取り多くの城を攻め落とす。しかし、自分の領国内の城一つ敵からの攻撃を許したことはない。

というふうになる。

さらに彼の場合、例えば妹婿の今川氏真などとは違い、たいへん良い家臣たちに恵まれた。ふつう、後見していた先代当主が死ぬと、たちまち家臣団の結束の箍たがが緩んでしまうのが戦国武家の常である。しかしこの後北条家にあつては、小田原落城まで家臣団が盤石の結束をほこっているのだ。

氏政は、

民を撫育し国の政道を正しく守り仁義を専らとし給ふ。その故、関東の諸侍二心なく二代の主君と仰ぎ忠を致さんとした。氏政は関八州を治め、合戦のさい忠ある侍にはその深浅に従つて、国郡郷一村、太刀かたな、金銀小袖等を与え、その上褒美の感状を添えたのである。

氏政の評価を貶めたのは、なんと言つても彼が豊臣秀吉の小田原征伐をふせげなかったという外交的失策であろうが、しかしそれは結果論であつて、群雄割拠の時代が終焉を迎えようとするなか、秀吉が目の上のこぶである北条家を許すはずがなく、豊臣政権に弓引

かぬよう弱体化させ、あわよくば潰してしまうつもりであつたろうし、これは氏政でなくとも同様の立場に置かれればみな遅かれ早かれ同じ運命をたどつていたに違いない。

ともかく後世になつて受けた評価ほど氏政は愚将ではなく、むしろ他の戦国大名たちの後継者から比べれば才氣あふれる英傑の資質を持っていた。

さらに氏政は文筆にも優れ、また彼の手跡の美しさには江戸期の能筆家さえも呻つたという。

そんな彼の辞世は、

ふきとふく風なうらみそ花の春紅葉の残る秋あらばこそ

ともあれ、今この物語の時点では、氏政はまだ父氏康の手の内で動く一個の駒にすぎなかつた。

しかし領国を臨む広大な海原を遠望しながら、彼の胸中には、坂東の田舎大名で終わつてなるものかという風雲の志がくすぶつていたのもまた事実であつた……。

「お屋形さまあ！」

遠くから野太い声で呼ばれ、氏政は手綱を締めて馬を制しながら街道の方を見上げた。

すると白砂青松はくしゃせいしょうたる景色を縫つて武者が一騎、勢いよくこちらへ駆け下りてくる。その遠目にも大兵と分かる騎影を見て、氏政は思わずくすりと笑つた。

「なんだ太郎左か、慌ててどうした？　ほら可哀相に、馬が泡をふいておるではないか」

氏政の元に駆けつけるや、乗ってきた馬さながらにぶるいいななと嘶いて見せたのは、以前、斉藤主馬之助と一緒に安房の海賊衆と戦つたあの豪傑、清水太郎左衛門政勝であつた。

「た、ただいま、甲斐へ遠見に行つておりました風魔小太郎が、御

城に帰還いたしてござります……」

太郎左衛門が息も絶え絶えにそう言うと、氏政の顔がぱつと輝いた。

「おお、そうか！ 風魔は生きておったか。よし、さっそく城に戻るぞ」

言うが早いか氏政は、馬腹を蹴って颯爽と馬を躍らせた。家来たち慌ててその後が続く。

太郎左衛門は、苦しそうな顔で喉をひゅつと鳴らした。

湿気を含んだ部屋の空気にまじって、かすかに麝香じやこうのにおいが漂う……。

ここは、小田原城本丸にある北条氏康の居館。
薄暗い部屋の中央に床が敷かれている。

そこに老いたさむらいが一人、夢うつつのままうつとりと風の音に聞き入っていた。斜陽の古河公方とその権威にあぐらをかく管領上杉氏を追い散らし、関八州に百年の計を打ち立てた戦国大名、北条氏康その人であった。

昨年暮れに病を得てより氏康の容態は日増しに悪くなっていった。今はもう起き上がる事さえまれで、氏康がその姿を評定の場に見せる事はもうなかった。しかし”後本城様”として未だ北条家に君臨する彼の元へは、重要案件の裁定をうかがうため家臣たちがひっきりなしに出入りしていた……。

久しぶりの晴天である。

部屋の障子窓に、まるで影絵のように風にしなう松のこずえが映し出されていた。

風魔小太郎は、美しい染がすりの小袖に着替え、部屋の片隅で神妙に額ずいていた。氏康が閉じていた目をゆっくりと開く。

「……もそつと、これへ」

「はっ」

小太郎が、氏康の枕元へ膝をにじり寄せる。

三ヶ月前、小田原を發つた頃にくらべ氏康は格段に老いた、と小太郎は思った。頬はこけ、目の回りが落ち窪んで骸骨のように見える。その皺の寄つた目尻からつうつと涙が伝い落ちた。

「小太郎よ、よくぞ生きて歸つた。わしはそなたを死地へ送り込んでしまった事をずっと後悔しておつた。しかし今こうして再びその元気な顔を見ることができ、やっと胸のつかえが下りた心持ちじゃ」

「畏くも、私のような乱波者にそのような勿体なきお言葉……」

「いやいや、無事でほんとうに良かった」

甲斐を探索中、小太郎は経過報告のため、たびたび手下を小田原へと走らせている。しかし、そのことごとくが戸沢白雲斎によつて殺害されていたため、小田原では小太郎たち風魔党の消息がつかめず、もはや武田方に討ち取られてしまつたに違いなしと囁かれていたのであつた。

「無用なご心労をお掛けいたしましたことは、この小太郎めの不覚重々恥じ入っております」

「いや、さぞかし困難な仕事であつたろう、まことに大儀であつた

……して、首尾はどうじゃ？」

「はい……」

小太郎は、甲斐で見聞きしてきたことを詳細に語つた。初めのうち、彼女の報告に黙つてうなずいていた氏康であつたが、話が進むにつれその表情は一変し、にわかに苦渋の様相を呈した。

「……………なんと、信玄は魔道に墜ちたと申すか」

そう言つたきり、氏康は再び目を閉じてしまつた……。

「父上、氏政にござります」

「うむ、入れ」

北条氏政が帰城したのは、風魔小太郎が氏康のもとを辞去してまもなくのことであつた。氏政が部屋に入るなり、氏康は厳しい表情のままこう告げた。

「武田家との同盟の話は、なかった事といたす」

氏政は驚いた。甲斐との同盟の話はすでに水面下で着々と進んでいる。氏政は、秘密裏に武田家の重臣、内藤昌秀と接触を図り、同盟するときの条件などを模索し始めていたのであった。

しかし、ここが北条氏政という人物の優れたところである。

「仰せのままに」

一言も反論せず平伏したのであった。

優れた当主の嫡子、もしくは氏政のように家督は譲られたものの未だ前当主が厳然たる権力を握っている場合は、親に逆らってはいけない。

蛙は口から吞まると言うが、偉大な親に逆らったばかりに身を滅ぼした武将は数知れない。武田義信しかり、豊臣秀次しかり……。一方、親の存命中はその命に肅々と従い、自分の時代がやって来るのをひたすら待った武将もいる。徳川秀忠しかり、そしてこの北条氏政がそうだ。

氏政とて一人の歴とした武将である。それなりに構想や哲学もあるし野望も持っている。しかし彼は、氏康の存命中、忍耐を持って自分を殺し盲目的につき従ってきたのである。

やがてはその権力をそっくりそのまま貰い受ける。それまでの辛抱じゃ。

そう自分に言い聞かせて……。

「しかと申しつけたぞ」

「かしこ畏まつて候」

氏政は、ただちに宿老や奉行衆を招集し評定を開いた。

末座に列した風魔小太郎から甲斐での報告を聞き終わると、誰もが驚き、またそれぞれに思惑をめぐらせた。

そんな中、家老の松田憲秀がぐっと身をのり出す。

「して……、後本城様は何と？」

「うむ」

氏政の穏やかな目が、ぎらと底光りを放った。

「同盟の話、つつがなく進められるようにと」

瞬間、小太郎は心の中であつと叫んだ。あの親に忠実な氏政が嘘を言ったのである。

氏政はさらに続ける……。

「信玄を操るは真田弾正じゃ。きやつは策謀をめぐらす名人なれど、猿猴捉月、しよせん天下を治める器にあらず。我らはまず武田の天下取りに合力し、しかるのち、信玄死するを待つてその天下を奪い取る。これが後本城様の内意である」

北条の重臣たちは、強者ぞろいだが押し並べて単純でもある。初代宗瑞（早雲）の頃から蹇蹇匪躬として北条家を支えてきた北条幻庵などは、感心して何度もうんうんとうなずいた。

「うむ、さすがは後本城様じゃ。刻舟の謙信などと組んでおつては我らが天下に打って出るなど、百年河清を俟つようなもの。わしは賛成するぞ」

すかさず、大道寺政繁が相づちをうつ。

「幻庵殿の申される通りじゃ。信玄は不倶戴天の敵なれど實力のある大名。我らが謙信を牽制し後顧の憂えを断つてやれば、やつは必ずや織田、徳川を打ち破り天下を掌握するに違いなし。そして都合の良いことに、すぐその天下を手放して世を去るのじゃ。こんな有難い話はない、まさに千載一遇の好機到来じゃ」

氏政は、心の中でほくそ笑んだ。

京の都を一顧だにせず、ひたすらに関東を死守するという宗瑞以来三代続いた北条家の気質に、この四代目は疑問を抱いていた。天下を睥睨せずしてなんの武士か……と。

今ようやく、北条家は真の意味で代替わりしようとしている。そして家臣団は、例えそれが氏政の謀だとしても、みなその志しに賛同しつつあるのだ。

あとは父上の死を待つばかりじゃ。

この年の十月に、北条氏康は死んだ。

死の半月ほど前から意識が混濁し、あるいは不自然な^{いじみ}酈をかいて眠り続けたが、いよいよ死の直前になって、灯滅せんとして光を増す、の言葉通りにわか意識を取り戻した。彼は、氏政以下おもだった家臣を枕元に呼びよせ、それぞれに遺言を授けていった。

そして最後に余人を避け、風魔小太郎一人にこんな事を語って聞かせた。

「小太郎、わしはどうやら無駄に馬齢を重ねたらしい。氏政は、愚直なほど驥尾^{きび}に付してきたが、内心では宗瑞（北条早雲）殿の志しに背いていたのじゃ。わしはそれに気づかなかった。北条家は、あるいは滅びの道をたどるかもしれぬ。まあ、それは今となつては食い止められぬ、全ては八幡大菩薩のお導きじゃ。ただひとつ気掛かりなのは、由良（早川殿）の事じゃ。わしは、子の中であれが一番愛しい。小太郎、わしの最後の頼みじゃ。由良が兄（氏政）の野望に巻き込まれぬよう守つてやってくれぬか……」

小太郎の手を握りしめ、涙ながらに訴える氏康に向かって彼女は大きくうなずいて見せた。

「承知仕つてござります。この小太郎、神文鉄火、一命を投げ打つても由良姫様をお守りする事をお誓い申し上げます」

「よしなに、何とぞよしなに……頼んだぞ、小太郎」

漣^{れんれん}と涙を流した二日後、関八州に武威を振るい坂東武者の王国を夢見た北条氏康は、静かに寂滅を唱えた。

享年、五十七歳……。

威ありて猛からず、家臣にも領民にも愛された偉大な英雄であつた。

そしてその年の暮れ、上杉謙信の居城、春日山城に一通の書状が届いた。

その、相越同盟の手切れを宣告する絶交状には、威風堂々と北条

氏政の花押が印されていた。

続く。

越後の蛟竜とその男、織細につき（４）

春日山城を頂く山顛を、香不斷に焚くがごとく白い寒霞が覆い、冬風ぎの空から身を切るような冷氣がひしひしと下りてくる。

山ひとつ丸ごと要塞化したこの城は、関東管領、上杉謙信の居城である。

本丸の虎口へと至る道は迷路のように曲がりくねり、途中に設けられた物々しい砦の数々が敵の侵入を拒んでいる。家臣たちが屋敷をかまえる大小多数の曲輪は、みな幾重にも土塁や空堀でまもられていた。

まさに金城鉄壁の城である。

しかし謙信は、一度たりともこの城で敵と戦ったことはない。何故なら、攻め込まれる前に必ずや敵を滅ぼしているからである。

彼は、自らを軍神の化身と公言してはばからなかった……。

うす暗い室内の空気を、ゆらゆらと炎が舐めている。

護摩を焚く炎だ。

整然と法具の並べられた護摩壇の前に、沙門と見ゆる壮年の男が結跏趺坐していた。

この男が護摩炉に乳木を投ずるたび、火焰がぱあつと燃えさかる。その火明かりに照らし出された男の顔は、菩提樹の下で瞑想にふける釈尊がごとく半眼を閉じていた。

この男こそ、越後の龍としてあの信長さえも畏怖させた戦国大名、上杉謙信である。

「お屋形さま……」

わずかに外の光が漏れ差し込む護摩堂の扉をへだて、野太い声のためらいがちに話しかける。

「……よろしゅうござりまするか？」

「うむ」

と、謙信は答えた。

「椎名備前がふたたびお屋形さまに背き、瑞泉寺の一揆勢と結んで富山城に立て籠もっておりますが」

「うむ」

謙信は、眉一つ動かさずそう答える。すると扉の向こうの家臣は、それっきり無言で立ち去ってしまった。しかしすぐさま別の家臣がやってきて扉の前にひざまずく。

「お屋形さま、佐竹義重が再び小田城を侵したと、天庵が泣きついてきておりますが」

「うむ」

この家臣も謙信のいらえを聞くなりすぐに立ち去った。しかし、すかさずまた別の家臣がやってきて神妙に告げる。

「お屋形さま、内藤昌秀が兵を率いて石倉城に入り、軍容をととのえている向きにござりまする」

「うむ」

さらに別の家臣が入れ替わるよにやってくる。

「お屋形さま、北条氏政が武田と結んだは、どうやらまことのようにござりまするぞ」

「うむ……」

この後も、同盟国の離叛やら救援の要請などが続々と謙信の元へ寄せられる。しかし彼は、いかなる凶報を耳にしても、ただ一言「うむ」と鷹揚にうなずくだけで殊更に感情を見せなかった。

やがて護摩堂の外から人の気配が絶え、ただ護摩木のぱちぱちと爆ぜる音ばかりが耳につくようになったころ、謙信はおもむろに法衣の袂で顔を覆い、よよと泣き崩れた。

「ああ、なぜじゃ、なぜ皆でわらわを裏切る。わらわは国人衆のため同盟国のため民百姓のためと思うて骨身を削り、身を粉にして戦つておるというに、人の心というものは何故にこつも移ろいやすいのじゃ。手をひるがえせば雲となり、手をくつがえせば雨となる…

…。ええい、憲政のしまさごときやつ頼みに応じ、関東管領職など拝したこの身が怨めしい」

そうして骨太の肩を振るわせ、しくしくと泣き崩れるのであった……。

謙信の幼名は、虎千代という。

寅年に生まれたことから、この名がついた。父は越後の守護代長な尾為景、母は古志長尾一族の娘である。

生まれたばかりの虎千代は、二人の兄に似ず泣き声に力のある健児であつた。世は戦国の真つただ中、男子は強いに越したことはない、竜は一寸にして昇天の気ありと為景はよろこんだ。

しかし虎千代の父と母は知らなかったのである。

この赤ん坊が、男児でありながら完全なる女性の心を持って生まれてしまったことを……。

虎千代は長ずるにつれ二歳上の姉と自分とを比べ、その待遇にさまざまな違いがあることを疑問に思い始めた。

なぜ、姉は「姫」と呼ばれ、自分は「若」と呼ばれるのか？

なぜ、姉は華やかな振袖を着ているのに、自分は菖蒲韋模様の袴をはくのか？

なぜ、姉が和歌を詠んでいるとき、自分は論語を素読しなければならぬのか……、なぜだろう？ と彼は悩む。

母に問えば「それは、そなたが弓矢の家に生まれた男子だからです」と答える。彼にはその言葉の意味がさっぱり分からなかった。

やがて、そんな悩める日々が虎千代を気鬱の病にさせてしまう。そして心配した父為景は、彼を春日山林泉寺に預けてしまうのだ。

虎千代、七歳のときである。

長尾家にはすでに晴景という立派な嫡子がいた。ゆえに虎千代を、およそ侍らしからぬ女々しい心を持ったまま無理に武将として育て上げる必要はなかった。かえって後々悪臣に担ぎ上げられ騒動の火

種になるならば、いつそ僧にでもしてしまおうと為景が考えたのも無理からぬことであつたのだ。

さて、林泉寺の住職は天室光育^{てんしつこういく}といつて、越後でも一、二を争う曹洞宗の名僧である。彼は虎千代を一目見るなり、その精神と肉体の乖離^{かいり}を見事に看破した。

「よくお聞きください。不動尊というは般若菩薩の輪身にございます。大威徳明王はこれすなわち文殊菩薩、軍荼利明王もまた金剛蔵王菩薩の化身にございます。よろしいですか、御仏の自性たる如来が、大慈大悲の心を持って衆生^{しゆじやう}済度^{きふど}なされるとき、それは菩薩の姿となつて人々の前に現れます。しかし、いざ御仏の言に従わぬ煩惱多き者どもに対されたときには、憤怒の相を持つ明王の姿となつて力ずくでこれを屈服させるのです」

この高德な僧は、眩しそくに目を細めながら柔和な口調で虎千代をこう諭した。

「御仏も、人も、場合によつては本性を隠し、鬼神となつて戦う必要があるのでございますよ」

聡明な虎千代には、天室光育の言わんとしている事がなんとなく理解できた。

「禅師の仰ること、分かるような気がいたします」

「そうですか。なれば、ただひたすらに只管^{しかん}打坐^{たざ}しなされ。さすればあなた様にもいずれ転迷開悟なされる時がまいりますよ」

その日から、虎千代は座禅に打ち込んだ。ひんやりとする禅堂の板敷きに座り静かに瞑想するとき、虎千代の心は明鏡のように澄み渡った。

わらわは、何の因果か女としての本性を持ちながら、姿形は男として生まれてしまった。されば、まことに生きにくい世の中であるが、御仏がわらわをこの世に使わしたからには、この身になにがしかの使命を託されたに違いない。それが何なのか分かるまで、わらわはここで修行を続けるのじゃ。

こうして禅の修行を続けるうち虎千代の迷いは次第に消え、それにともない彼は本来の聡明さを取り戻していった。やがて天室光育の手により孔子孟子の講釈がされるようになると、虎千代はこれを瞬く間に吸収していく。

また、このころ彼は初めて恋をした。

相手は、彼の守役をつとめる金津義舊かなづよしもとであつた。義舊は、後に上杉二十五将の一にも数えられる豪傑で、虎千代を立派な武將に育て上げ、それに仕える事を夢見ていた。もちろん虎千代は、義舊に自分の若恋たる思いを伝えることはできなかったが、その代わり彼は、義舊の望むとおり弓馬の道に精進した。虎千代の武芸が上達するたび、義舊はヒゲ面をくしゃくしゃにして嬉しそうに言った。

「若は、それがしの誇りにござります。はやく立派な武將におなりあそばし、この義舊めを供に戦場を駆けてくだされ」

こうして虎千代は、自身の思いとは裏腹にどんどん文武を身につけてゆくのである。

そして天文十二年、虎千代は十四歳で元服し、名を景虎と改めた。

景虎に人生の転機が訪れたのは、彼が十六になったときである。そのころ彼は、母方の親類である栃尾城主本庄実仍ほんじょうさねよりのもとに身を寄せていた。

ある日、すでに立派な若者へと成長した景虎の元へ、栖吉城すよしの長尾景信がやってきた。景信は、景虎にとって母方の叔父にあたる人である。

「ご立派になりましたな」

と景信は、この十六歳になる甥に言った。

景虎は、背はそれほど高くないものの筋骨たくましく、また近在の百姓衆から外法様げぽうさまと呼ばれるほどに容貌魁偉ようぼうけいゐであつた。ただし、心根はまったくの手弱女たおやめなのだが……。

しばらく他愛のない世情の話などをした後、景信はこのようなこ

とを切り出した。

「……実は、黒滝城の黒田秀忠があなた様のお命を狙っております。きやつは三年前、春日山城に攻め入り、あなた様の御兄上景康殿を斬っておりますが、この度はさらにあなた様を亡き者とし、そしてゆくゆくは守護代晴景様をも攻め滅ぼし自分がこれに取って代わろうと画策しておるのでございます」

景虎は、戦慄した。

初陣は二年前に果たしたがそれは形ばかりのもので、戦陣では常に金津義舊や小島弥太郎といった猛者たちに守られ、自身は少しも危ない橋を渡っていない。

しかし黒田秀忠が自分を殺すために攻めてくるとなれば話は別である。殺すか殺されるかの血みどろの戦いをせざるまい。

景信が言うには、守護代長尾晴景は生来病弱のうえ小心者で、家臣や国人衆はおろか守護である上杉定実にさえ見限られているらしい。このままでは黒田秀忠が兵を挙げたとき、長尾一族を裏切り秀忠に合力する国人衆が後を絶たないだろうと、景信は苦り切った顔で言った。

「大儀はこちらにございます。景虎殿、先手を打ってこちらからお攻めなされ。そのときには不肖この景信もお手伝いします」

その後も、長尾一族の家臣やら同盟する国人衆の使者やらが続々と景虎のもとを訪れた。彼らは一様に兄晴景の不甲斐なさを嘆き、そして景虎に決起するよう促したのである。

景虎は表面上平静を取り繕ってこれに対応し、そして夜になると床の中でしくしく泣いた。女である自分がなぜ戦などしなくてはならないのか、と……。

そんなある日のことである。

いつものように一人静かに禅定する景虎の心に突然、霊的な声が呼びかけてきた。

「我は須弥山しゆみせんにあつて仏法を守護する夜叉の王、毘沙門天なり」

その声を聞いたとたん景虎は金縛りにあつたように動けなくなつた。冷や汗がこめかみを伝いあごへと流れ落ちる……。

「景虎よ、波羅蜜はらみつを修めんとする者よ、今宵北の空を見やれ、さすればそこに禍々しき妖霊星ようれぼしを見つける事が出来よう、夜が明ければ東の空を見やれ、さすれば白虹はつこうが日を貫くさまを見る事が出来よう」

不思議と恐怖が薄らいだ。それどころか景虎は、己の中にふつふつと沸き上がってくる熱いものを感じながらこの声なき声を聞いていた。

「この国に兵乱尽きねば、世はますます仏法から遠ざかる。景虎よ、雲心月性うんしんげつせいの無欲なる者よ、今こそ破邪顕正はじゃけんしょうの剣をもつて悪鬼どもを討滅いたすのじゃ、そなたのことは、この毘沙門天が御仏に成り代わつて守護いたす……」

そこでこの不思議な声は終わり、景虎を包み込んでいた靈的な力も霧が晴れるように消え去つた。

そして景虎は、忽然と決意したのである。

そうか、わらわが御仏より賜つた使命は、ひたすらに悪と戦うことだったのじゃ。わらわは決心したぞ。死ぬまで己を男と偽り、鬼神となりて邪なるものどもを討ち滅ぼす、そして世に安寧秩序をもたらすのじゃ。それがわらわの使命である。

景虎は立ち上がるなり絶叫した。

「弓矢八幡、不動明王もご照覧あれ！ 我、長尾景虎は、禅定の弓、慧の矢にて戦国の巨魁どもを打ち滅ぼし、正法をもつてこれに従えたまうなり！」

この日を境に景虎は、豹変した。戦いの鬼となつたのである。

先に述べた黒田秀忠をあつと言つ間に滅ぼした後、兄晴景を追いやり春日山城主となつた彼は、越後はもとより越中や、くせ者ぞろいの揚北衆あがきたしゅうなどもたちまち従え、関東鎮撫のために幾度も三國峠を越え、川中島で五度までも信玄と戦い、そして今や戦の神、義に篤

い盟主として東日本の諸将から事あるごとに頼られる存在となったのであった……………。

今、燃えさかる護摩壇を前にして、謙信は一心に念じ続ける。

「我は毘沙門天の化身なり、我は毘沙門天の化身なり、我は毘沙門天の化身なり……………」

我こそは、毘沙門天の化身なり。

この上杉謙信という男の正体は、彼の心の内にひそむ女性の心が描き出した理想の男性像に他ならない。

彼女の理想とする男は、他のどんな男よりも強い。

彼女の理想とする男は、つねに正義を重んじる。

彼女の理想とする男は、ただひたすらに無欲である。

そして彼女の理想とする男は、決して女など愛さない……………。

かんうん

寒雲たれこめる冬空の下、護摩堂の扉はゆっくりと開かれた。

そして家臣たちは、謙信の野太い声を聞くのである。

「戦評定をいたす！」

続く。

越後の蛟竜とその男、織細につき（5）

正々の旗、堂々の陣。

凍てつくような利根川の流れを川霧が覆っている。その霧の向こうに縹渺と城が見える。

まやばし
厩橋城である。

その城は、利根川をのぞむ河岸に土塁や石垣を積んで防衛線とし、そこに物見の櫓をならべていた。

櫓には、旗が寒風にひるがえっている。

『毘』

これは上杉謙信が信奉する軍神、毘沙門天の頭一字をとったものである。

櫓の一つに、赤系緘の鎧に戦袍を羽織り、白布で頭を覆った壮齡の武者が、霧にかすむ利根川の対岸を睨んでいた。

越後の守護大名、上杉謙信その人である。

厩橋城は、彼の関東攻略に欠くことのできない重要拠点であった。万一、この城を敵に奪われると、上杉軍は関東各地へ転戦するための兵站線を断たれることになる。

だから、この厩橋城は、上杉、武田、北条が幾度となく血みどろの奪い合いをしてきた。今は謙信の持城で、城代として彼の配下である上野の実力者、北條高広を置いていた。

風がすうつと川面を薙ぐたび、そのときだけ一瞬、霧が晴れる。すると対岸にも城が見えてくる。

武田信玄が、この厩橋城を攻略するために築いた橋頭堡、石倉城である。二つの城は、これまで利根川の流れを挟んで睨み合っただちで、絶えず小競り合いを繰り返してきたのだ。

元龜三年正月。

武田の重臣、内藤昌秀が信玄の命を受け保渡田城ほだたより二千の兵を引きつれて出撃、石倉城に入城して厩橋城と対峙した。

いよいよ、天下を取るために動き出した武田軍が、まずは当面の妨害者たりえる上杉謙信を牽制しはじめたのだ。信玄は、今のうちに上杉軍の重要拠点を叩けるだけ叩いておいて、雪解けを待つて西上しようとする自軍の企てから謙信の目を遠ざけようと考えていたのである。

やがてそこへ武田と同盟する後北条家の家臣、寺尾左馬助の率いる千二百が援軍として駆けつけた。元いた城兵も加えると、両軍の兵力は合わせて約四千にのぼる。

北条氏政は、ここで武田と共同戦線を張り、謙信から厩橋城を奪って見せることによって、昨年暮れに成立したばかりの甲相同盟が本物であることを、謙信ならびに関東諸将へ誇示しようと考えていた。

武田を利用して天下をとる。

目下、氏政の思わくはこれにある……。

ずだあーんと、

川霧が晴れるたびに、百雷が一時に落ちたような轟音が寒気を震わせる。

武田、北条軍が、城前の河原に数十挺の鉄砲を押しならべて、厩橋城の石垣めがけ撃ちかけているのである。

当時の鉄砲の精度から考えて、大河をへだてた城へ向けて放った玉が敵兵に命中する可能性は全くと云っていいほどない。そもそも城壁まで届くかどうかもあり。しかし冬空をびりびりと震撼させる射撃の音は、相手の心臓をすくみあがらせ、戦意をそぎ取る事にかけては効果的であつたに違いない。

謙信は、櫓の上でこの音を聞きながら、ぶるぶると震えていた。それを家臣たちが見れば、頼もしい武者震いだと勘違いするであ

ろう。だが実際は違ふのだ。

彼は、かつて合戦が面白いと感じた時期もあった。戦場に身をゆだねるとき、彼は心の内に神の声をきいた。それは天からの啓示のごとく彼の意志を突き動かし、そしてその声に従って戦いさえすれば上杉軍は必ずといっていいほど勝利した。その常勝ぶりに人々は驚嘆し、そして彼のことを軍神の化身であると本気で信じたのである。

しかしそんな謙信も、今年で四十三になる。

いつまでたつても離叛と恭順をくり返す国人衆と、蛇心じやしん仏口ぶつこうの小ずるい関東諸将のために転戦に次ぐ転戦をかさね、謙信は心身ともに疲れ果てていた。だから敵兵が放つ鉄砲の音を聞いて武者震いするような血気は、彼にはもうないのである。

では、なぜ彼は震えているのか？

もとより恐怖心からであるはずがない。また、寒さのためというわけでもなかった……。

じつは上杉謙信は、幼少の頃より極度のアルコール中毒だったのである。

男性としての体と、女性としての心を併せ持つ彼は、その心身の懸隔けんかくに悩んだ末いつしか酒に溺れるようになった。己の苦悩を誰にも打ち明けることができず、酒だけが唯一彼の心の支えとなった。そして、不安に苛まれるまま酒をおるうち、彼は片時もそれを手放すことが出来なくなってしまうたのである。

陣中にあつても馬上にあつても、彼は酒が切れるとどうしようもなく体が震え、軍配や手綱を握ることさえまなくなつた。だから彼はいつも傍らに酒樽を置き、また馬に乗るときは鞍に酒壺ばじょうと馬上盞ばしやうさんを括りつけていた。戦の最中でも常に酒が飲めるようにしていたのである。

「誰かある」

謙信が呻くように言うと、すかさず前髪を垂れた若党が二人姿を現し、一人が謙信に大白の杯を手渡し、もう一人がそれに酒を注ぎ始めた。杯を受けるあいだも謙信の手は震え続け、白濁した酒がぼたぼたと床にこぼれ落ちる。しかし彼はそれを気に留めるふうでもなく、口を突き出し、杯に残った酒を一気に喉に流し込んだ。

「くっ　　むっ……………」

ただれた胃の中に、まるで真っ赤に焼けた鉄を飲み込んだように熱い感触がつーっと伝い落ちる。やがてその燃えさかる感覚は血管を通して体のすみずみまで行き渡った……。

謙信の震えがぴたりと止まった。

彼は、大仰な動作で再び杯を突き出す。若党が、再びそれになみなみと酒を満たす。謙信は、今度は一滴もこぼすことなくその酒をぐつと干した。丸まっていた彼の背が、まるで筋金でも入れたようにしやきつと伸びた。

二人の若党は、そんな謙信の姿をうつとりと見つめている。彼らは、俗に三十五人衆と呼ばれる謙信付きの小姓で、いずれも剣の腕に覚えがあり、また女と見紛うほどの美少年ぞろいであった。

やがて三度目の杯を空けた謙信の目は、もはや鬼神のそれとなっていた。

「丹後を呼べ！」

「ははっ」

やがて厩橋城代の北條高広が慌てて櫓の上に姿をあらわす。

「お呼びにござりまするか？」

彼は、謙信の目をまともに見ることが出来なかった。恐いのだ。この上杉謙信という男はいつたい何を考えているのか？ 彼はいつも悩む。謙信という戦の神のような男の、その本質がまったく掴めないでいるのである。

謙信は、せつかく信濃や上野へ攻め入り敵対勢力を追い散らして

も、その領地を切り取って経営しようとはせず、すぐに軍を引きあげてしまう。結果、いつとき屈服したかに見えたその土地の豪族がすぐに反旗をひるがえし、せっかく謙信が奪った城をあつさり取り戻してしまうのである。ずっと、これのくり返しであった。

高広には、ここところが全く理解できない。

戦国時代の武士というものは、そもそも大部分が農民兵であつて、言ってみれば彼らは隣国と耕作地の奪い合いをしているのである。そんな修羅の世界にあつて領地欲を持たず、ただ戦いのみに明け暮れるばかりのこの神懸かり的な戦の天才を、北條高広が理解できず、何やら気味悪くさえ感じたのも無理からぬことであつた。

ゆえに彼もまた、上杉家に対し何度も離叛を繰り返した武将の一人であつた。

そんな高広に、謙信は鉄鞭で利根川を指して言つた。

「見てのとおり、川を渡れる浅瀬は二箇所ある。おぬしは直ちに千の兵を二手に分けて川を渡るのじゃ。さすれば敵は待つてましたとばかりに鉄砲を撃ちかけてこよう」

ただし！ と謙信は言つた。

「霧の中、鉄砲の音を聞いたら、おぬしはすぐに退き鉦を打つて兵を引かせるのじゃ」

「はあ……」

「よいか、退く時におぬしらは芝居をせい。いかにも慌てた風を装い、得物を投げ出し悲鳴をあげ、算を乱して散り散りに逃げるのじゃ」

「そ、それで、その後はいかように……？」

「あとは、わしに任せろ」

「任せろ……と、申されますと？」

謙信は、鉄鞭の先をひゅんと高広の鼻先に突きつけた。

「丹後よ、わしは神の声に従つて采配を振るつておるのじゃ。分かるか？ 神仏が何をお考えなのか人間ごときが知る必要などない。

作戦はつねにわしの頭の中にあるゆえ、おぬしらは、ただ黙ってそれに従っておればよいのじゃ」

高広は紫色に変色した唇を震わせながら、ははっと畏まった。

「分かつたら早う行けい！」

「御意」

北條高広は、深々と一礼するや逃げるように櫓を降りていった。

上杉謙信は、戦のやり方についていちいち家臣と話し合ったりはしない。軍師もおかない。戦評定でも、まるで憑坐よりましが神靈に成り代わってお告げをするように、確信に満ちて、謙信が一方的に命令を言い渡すだけなのである。それが彼のやり方であつた。

「ふん、推参者めが……」

謙信は、櫓の上から身を乗り出し、城内にいる兵たちに向けて怒鳴り声をはり上げた。

「今のうちに火に当たつて体を温めておけい！ 他の城兵にもそう伝えよ！」

「ははっ」

たちまち、使番が四方に散つていった。

厩橋城の、利根川から見て上流側と下流側にある二つの城門から、北條高広の手勢がどつとくり出したのは、それから間もなくのことであつた。二手に分かれた兵がそれぞれの渡河点へ押し寄せると、その対岸ではすでに武田・北条の連合軍が隊列をととのえ待ちかまえていた。

ようするに、われらは囷か……。

高広は、一瞬恨みがましい視線を城の方へ送つたが、気を取りなおして軍扇を振り下ろした。

「それっ、かかれい！」

その声を合図に、身を切るような冷たい流れに嫌がる馬を無理やり乗り入れて、侍大將が先陣をきる。

「渡れい、渡れい！」

わあーっと喚声を上げながら上杉兵が腰まで水に浸かり川を渡り始める。利根川は、一寸先まで川霧で濛々とかすんでいた。対岸から見ると、その霧の中をまるで障子戸に竹林の影を投影したように、林立する無数の槍が迫ってくるのが確認できた。

「放てえ！」

とたんに、鉄砲の一斉射撃が始まる。

があーんという鼓膜を破る轟音が霧の中をつらぬいた。視界が悪いなかでの、めくら撃ちである。撃ち出された鉛玉は、ひゅんひゅん風を切り、でたらめな方向に飛び交った。それでも体を撃ち抜かれた上杉兵の悲鳴があちこちから聞こえた。

北條高広は、あらかじめ謙信に言い含められていた通り、撤退の下知を飛ばした。

「引け、引けい！」

たちまち上杉軍は総崩れとなり、刀槍を川の中へ放り出して我先にと潰走をはじめた。それを見た北条軍の大將、寺尾左馬助が勢いづいて自軍の兵を督戦する。

「追えい、追えい！ 一人も生かして帰すなあ！」

「殺せや、殺せ！」

たちまち北条の軍兵が、水を蹴って敗走する上杉兵を追いはじめた。

これを見た武田兵も、競争心を煽られ声高に騒ぎ出す。

「ええい、相模の奴ばらに先を越されてなるものか。我ら甲州兵の精強さを見せてくれるぞ！」

「上杉兵を討ち取って首を上げよ」

まさに暴虎馮河、武田、北条両軍ともに、我先にと川を渡り始めたのであった。

石倉城にある一番高い櫓から戦況を眺めていた総大將の内藤昌秀は、霧のため見通しが利かない戦場で、今現在いったい何が起きているのか把握できずに苛立っていた。わき上がる喚声と、退き鉦、

陣員の音が入り乱れ、かなり混乱していることだけは分かる。しかし肝心の、自軍の兵の動きがよく見えない。

やがて物見の武者が駆け戻ってきてた。

「お味方が、敵を追撃してほとんど川を渡っておりまする」

「なにい、馬鹿者！ わしは、こちら側に渡河してくる敵だけを討ち取れと命じたはずだ。うぬら、直ちに引き返し、武田の兵だけでもよいから連れ戻せい！」

「ははっ」

伝令將校たちが慌てて駆け去る。

これは、もしやすると謙信の術中にはまったかもしれない？

昌秀がそう思ったときである。

不意に、櫓に突き立てた『八幡大菩薩』の旗が、ばたばたと音を立て始めた。と同時に強い風がごうつと吹いて、川面の霧が勢いよく横に流される。

そして、霧がゆっくりと晴れていった。

やがて鮮明に見渡せるようになった戦場を眺め、昌秀があつと叫んだ。

厩橋城の城門から、今まさに上杉軍の主力が、堤防をやぶった濁流のごとく一斉に出撃するところであつた。

どーん、どーん、という陣太鼓の響きに、うおーっという鯨波が重なって、地鳴りのように河原一帯を震わせる。そんな中、ずぶ濡れになった武田、北条の兵馬は、意気盛んな上杉兵によって、次々と討ち取られていったのである。

しゃにむに槍を振り回す北条兵が馬で踏み潰され、川を渡って逃れようとする武田兵が後ろから矢で射殺される……。その哀れな悲鳴や絶叫が、石倉城にいる昌秀のところまではっきりと聞こえてきた。

やがて頃合いを見計らい、謙信みずからが出陣すると、それまで死に物狂いの抵抗を続けてきた者たちも、たちまち逃走し始めた。

半刻も経たないうちに、武田、北条軍は壊滅した。

そして上杉軍が石倉城に突入したとき、すでに内藤昌秀の姿はなかった。

占領した城の粗末な屋形に腰を下ろした謙信は、すぐに北條高広に命じて酒樽を用意させ、余人を遠ざけて一人、酒杯を傾けはじめた。

しばらくして、座敷の襖がすうつと開く。そこには薄絹の単衣をまとっただけの三人の若党が、声もなく神妙に額ずいていた。

「来い」

謙信が言つと、彼らは静々と座敷へ入り、帯を解いて前をはだけながら謙信の傍らにはべった。みな女と見紛うような前髪の美少年で、薄らと化粧までどこしている。そのうちの一人が謙信に酌をはじめると、もう一人が狂おしく謙信の口を吸い、残る一人はうつとりと謙信の膝にしなだれかかった。

酒のせいではなく、鬼神のような謙信の目が、次第に充血してくる。

不意に彼は、若党の一人を乱暴に押し倒して、その上に覆いかぶさった。

「ああ……殿」

と、その時……。

「お屋形様、ちょっと宜しゅうござりまするか？」

突然、姿なき声が謙信に語りかけ、彼は苦虫を噛み潰したような顔で身を起こした。

「……………月斎か、なんの用じゃ？」

「ご無礼とは存じながら、火急の用にてまかり越しました」

「胡乱者め、姿を見せよ」

謙信が忌々しげにいうと、

「これに……………」

いつのまにか座敷のすみに僧形の男が片膝ついてうずくまってい

た。黒い道服を着た枯木のような老人である。その、一間先の床板を見つめるような瞳には、白目しかなかった。

「実は、信玄が今川氏真に向けて刺客を放ったようにござります」

「ふん、そんな事が……」

謙信は、足下に転がっていた杯を拾い上げながら笑った。すかさず若党がそれに酒を注ぐ。

「氏真は北条の娘と一緒に、風魔どもが厳重に護衛しておろう」

「ところが、こたびの武田との同盟で、北条は氏真を見捨てる事に決めたようにござりまする」

「……なに？」

謙信は、しばらく虚空を睨みながら何事かを考えていたが、やがて手元の酒をくつと飲み干して言った。

「わしは北条、武田の同盟に対抗するため、家康と結んで駿河を攻め取ろうと思っておる。そのためには、今川氏真に生きていてもらわねば困る。あやつの存在こそが、我らが駿河へ侵攻する大儀名分となるからじゃ」

謙信は、軍事行動を起こすためには必ず大儀名分が必要だと考えていた。彼はいつも、戦を仕掛けるための尤もらしい理由を願文に記し、神社仏閣に奉納してから出陣した。

今川氏真が謙信に宛てた『信玄の手から駿河を取り戻して欲しい』という書状は、謙信が駿河へ侵攻するための絶好の口実となる。

「よいか月斎、いずれ氏真は相模を逐われ、わしか家康を頼って来るはずじゃ。そのときまで、やつの首を武田の乱波どもに渡してはならぬ」

「はっ」

「手練の者を引きつれ、ただちに相模へ向かえ」

「御意」

月斎が返事をすると同時に、三人の若党があつと叫んだ。

座敷から、たちまち月斎の姿がかき消え、かわりに黒い羽を広げ

た蝶が数匹、つむじ風のようにひらひらと舞い狂っていたからである。

月斎は、希代の幻術師であった。

「ふん、外法遣いめが……」

この男、中西月斎は越後の乱波、軒轅のきんぎんの首領である。

軒轅は、謙信の耳目となって情報収集を行うほか、敵国の要人しものを仕物にかけたり、他国から来た間者をいぶり出して殺したりと、諜報・暗殺を専門に行う忍者集団であった。

そして今を去ること二十数年前、禅寺にこもる謙信に毘沙門天が語りかけたのは、実はこの中西月斎の仕業であった。しかし当の謙信は死ぬまでその事を知らず、自分には毘沙門天が憑依していると本気で信じ続けたのであった……。

続く。

刺客大名今川氏真と戦国夫婦善哉（1）

ここ数日、半晴半陰のすっきりしない花曇りが続いている。
かさかけ
笠懸山の緑は日増しに濃くなつてゆくが、それでも時折思い出したように寒さが戻り、芝上に散つた白い桃の花びらに忘れ霜の降りることがある。

早川にある今川氏真の居館は、しかし騒然としていた。

去年の暮れごろから囁かれていた事であつたが、ついに後北条家より氏真のもとへ、北条領からの退去を促す印判状が届いたのである。

武田信玄と北条氏政のあいだで甲相同盟の誓紙が取り交わされたのは、昨年十二月のことであつた。信玄は、亡き氏康にこそ秘かに畏敬の念を抱いていたものの、その子氏政に対しては未だ弱卒と侮つていた。よつてこの同盟は北条側が大きく譲歩したかたちとなり、氏政にとって義理の弟にあたる今川氏真の追放も、武田側に言われるがまま、やむなく承諾してしまつた不本意な項目の一つであつた。

もちろん、今川家はこれに憤いきどおつた。

今川氏と後北条氏は、もともと縁浅からぬ間柄にあつたからである。

北条家初代早雲は、元は今川氏親の軍師であつたのだ……。

今川氏親がまだ龍王丸と名乗つていた頃、今川家に家督争いが持ち上がった。龍王丸の父で当主の今川義忠が、突然敵に討たれて死んだのである。家臣たちは、すぐに後継者をめぐつて争いを始めた。
このとき龍王丸と家督を争つたのは、かれの又従兄弟にあたる小お鹿範満しかのりみつという人であつた。彼は、上杉定正の後押しを受け、当時まだ六歳だつた龍王丸を廃除するような勢いであつた。

このとき、にわかに争いへ介入し、見事にこれを調停してのけたのが、龍王丸の叔父にあたる北条早雲であったのだ。

その後、早雲は、あくまで当主の座に固執する小鹿範満を攻め滅ぼし、元服して今川氏親となった龍王丸を新たな当主として据える事にみごと成功した。そして、家督争いが勃発したときには一介の浪人者にすぎなかった早雲を、氏親は軍師として迎え、興国寺城を与えたのである。

やがてこの城を拠点に早雲は伊豆を奪い、そして相模に彼の王国を築いたのであった。

言ってみれば、後北条氏は今川家臣から身を起こした家柄であり、また今川氏もこの忠臣の功によって窮地を脱し、後々まで存続しえた戦国大名なのである。

そのようなわけで、早川殿の館では、この北条氏政が突きつけた印判状をめぐつて、議論が飛び交い、情報が錯綜さくそうし、事態はいよいよ紛糾していたのであった。

「もし……………、殿？」

早川屋敷の奥の間で、可愛らしい女性の声が遠慮がちに囁く。声は、幾分おっとりしているが、少し舌つ足らずなようだ。

しかし返事がないので、次の一声は少し大きくなった。

「もうし、もうし」

床の間を背に、むずかしい顔で腕組みしていた一人の武士が、その声にはっとして顔を上げた。

「……………うん、呼んだか？」

今川氏真である。

彼は、武田信玄に駿河を逐われて以来、妻の実家であるこの早川の地に腰を落着け、気配きさまな浪人生活を送っていた。端から見れば、父の甲い合戦もせず実に不甲斐ない武将であるが、当の本人は焦りもしていなければ、また自分を情けないとも思っていないかった。実

際、仇はあの織田信長であるので、討ち果たすと言っても容易な事ではないのだ。家来たちの手前、まあそのうち見ておれ、くらの事は口にするが、本気で事をなそうなどとは露ほども考えていなかった。

「まあ……」

ふたたび、あの笑みを含んだ可愛らしい声がした。

氏真のかたわらで、彼の顔を覗き込むようにしていたその女性は、振袖のたもとで口を覆いさも可笑しそうに、ほほほと笑った。

氏真の室、早川殿である。

北条氏康の娘である彼女は、かつて相模、甲斐、駿河の三国が同盟を結んだとき、その証として今川家に嫁いでいた。以来、この甲斐性のない夫に対し、寄り添うように付き従ってきた、氏真にとつてはまさに女房冥加に尽きる女性である。

歳は、そろそろ三十路に手が届くというのに、その容貌や仕草が少女のように可憐であった。

「こんなに近くで、お呼びいたしておりますものを……」

「いやあ、すまん。つい考え事に夢中になってしまった」

「そんなに怖いお顔をなさつて、いったい何をお考えなのですか？」

訊きながらも、彼女には既に答えが分かっていた。氏真もそれを承知しているので、少し困ったような顔になったが、正直に言った。「他ならぬ、義兄上から届いた書状のことよ。左京が骨を折って板部岡江雪斎殿と談判してくれたのだが、結局、久翁寺で執り行われる父上の十三回忌仏事が済むまでは猶予を与えるという確約を得たにすぎなかった。北条家としても武田の目がある以上、わしを相模へ置いておくわけにはいかぬようじゃなあ……」

氏真は、深くため息をついた。

ちなみに左京とは、今川家臣、朝比奈泰朝あさひなやすともの事である。かつて掛川城主だった彼は、このとき備中守を名乗っていたが、氏真と同年で、まるで実の兄弟のように気心の知れた彼のことを、氏真は未だ

に左京と呼んで頼りにしていた。

「それで？」

早川殿は、その鈴を張ったような瞳を輝かせて、再び氏真の顔を覗き込んだ。

「殿は、この先、一体どうなされるおつもりでございます？」

「……うむ」

その、心の裏側まで見透してしまいそうな彼女の視線から逃れ、そつと目を閉じながら氏真は言った。

「わしはなあ、お由良……。父上の法要が済んだらすぐに三國峠を越えて、上杉謙信の元へ寄寓きぐうしようと思つておるのだ」

「まあ」

早川殿は、少し驚いたように目を睜ひらった。そして即座に言った。

「お止めなさりませ」

氏真は、吃驚びっくりして早川殿の顔を見つめた。

「お由良、いま何と申した？」

「越後の関東管領など頼りにするのは、もうお止めなされませと申し上げたのでございます」

早川殿は、ぴんしゃんと背筋を伸ばしながら、こほんと咳払いをした。つられて氏真も姿勢を改める。

「よろしいですか、殿、信玄と正面から角突き合せている以上、上杉謙信の元へなど行けば、殿はたちまち喧嘩の矢面に立たされてしまうのですよ。謙信は、殿に泣きつかれたから兵を挙げるのだと諸国に触れまわるであらうし、そんな殿を煩わづがって信玄が武力で排除しに来るのは目に見えておりますもの。我らは、思いもかけず火中の栗を拾う事となるのでございますよ」

「ううむ、そうであらうか？」

「そうでございますとも」

可愛らしい声ではあるが、きつい言葉が遠慮会釈なく、ぽんぽん飛び出す。

いつもの事である。

氏真は、何も言い返す事ができず、うーんと唸ってしまった。

昔から早川殿は、氏真に対し表向きのことまで堂々と口をはさんでくる。この気質は、どうやら寿桂尼じゅけいにから受け継いだものではないかと、氏真は睨んでいる。

今川義元の母である寿桂尼は、かつて女戦国大名とまで言われた女傑であつた。

義元が桶狭間おけはざまで討ち死にした後も、武田信玄がすぐに駿河を攻めなかつたのは、どうやら『駿府の尼御台』と呼ばれた彼女をはばかつての事と思われる。事実、彼女が死んだ永禄十一年の暮、信玄は待ちわびていたように、さっそく駿河へ牙を剥いてきたのである。

そんな寿桂尼が、実の孫以上に可愛がつたのが由良姫、すなわち早川殿であつた。

寿桂尼は、氏真に政治的力量が不足していることをいち早く見抜いていたので、いずれ家督を継ぐであろう彼には、絶対忠実でなおかつ肝の据わつた優秀な補佐役が必要だと考えていたのである。

天真爛漫てんしんらんまんでありながら聡明で、しかも情の濃い由良姫は、氏真を陰ながら支える補佐役としては真に適任といえた。だから寿桂尼は、暇さえあれば早川殿を手元に置き、自らが経験によつて培つた帝王学をたたき込んで、ちよつとした女軍師のように育て上げてしまつたのである。

実際、早川殿の忠告は、ほとんどの場合、当を得ていた。

彼女は言う。

「ねえ、殿、この際ですから、いつそ三河殿を頼つてみてはいかがでしょう？　かつて三河殿は、私たちが掛川城に籠もつた折、駿府はいずれ殿にお返しするという条件で開城を迫りました。今こそあの時のお約束を楯に取り、みなで浜松城へ押しかけてやろうではないですか」

早川殿は袂で口を覆い、愉快そうにころころと笑つた。一瞬、つ

られて笑いそうになった氏真であつたが、しかしやはり困惑の色は隠せない。

「……はて、あの狡猾な家康相手に、そのような道理が通用するものであろうか？」

「大丈夫です。諸国に乱波を放ち、今川は家康との旧約だけを頼りに三河へ落ち延びる、とさんざん触れまわつてやれば良いのです。そうすれば三河殿も、我らを無下に追い返したりはしないでしょう。そんな事をすれば、家康とは何と薄情で、しかも戦時の約定を違える信頼できない男だと諸国に喧伝するようなものでございますもの。東国の覇者を夢見る三河殿としては、近隣国からの評判はやはり大切なものでございますから……」

ねえ、そうでございますよう？ と、早川殿は自信たっぷり、しかし愛嬌をこめて、しんなりと小首を傾げて見せた。その愛らしい仕草に惹かれ、氏真はついつい頷いていまう。

「うむ、考えてみればお由良の申す通りじゃ。さつそく左京や家来たちにも諮り、そのように段取りいたすでしょう」

これも、いつもの事であつた。

「ねえ……、殿」

ここで早川殿は氏真の元へとにじり寄り、その広い胸にしなだれかかつて言つた。

「まさか……、由良をひとり、ここへ残して行つたりはなさいませんね？」

氏真は、まさに凶星を指されて、ぎくつとした。とたんに早川殿が、顔を起こして氏真を見上げる。

「まあ」

そして睨んだ。

「やつぱり！」

実は、先程から氏真が思い悩んでいたのは、これであつたのだ。四年前、信玄に駿府を逐われて掛川城へ逃げ込んだ折、味方があ

まりに混乱していたため、早川殿は輿にも乗れず裸足のまま山道を駆け抜けたのだ。愛する妻に、またあのような苦労をさせるかと思うと、氏真は胸が痛み、いつそのまゝ実家である早川の地に、彼女だけ残して行こうかと考えていたのである。

しかしどう考えても、早川殿が承知するはずがなかった。

現に、いま彼女はとも怒っているようである。

「……わずか十歳のときに今川家へ嫁いで以来、私がこの世でただ一人お頼み申し上げる御方は、殿しかおりませんものを……、ああ、それなのに」

そう言つて、目にうつすらと涙を浮かべるのであった。

うつむ、これは旗色が悪い。

こういう状況で女性を宥めるた^{なだ}だ一つの方法は、やはり現代も戦国時代も同じである。

氏真は、早川殿の肩をぐいと抱きすくめると、有無をいわず口を吸った。

あつ。

早川殿は、一瞬身を強ばらせたがすぐに力を抜いて氏真に身を任せた。彼は、そのまま板敷きの上に愛妻を押し倒す……。

「由良……、お由良」

「ああ、殿、いけません」

言いながらも、早川殿は氏真の首にきつく腕を巻きつけた。

かつて、駿河の太守であつた頃には、昼間っからこんなはしたない行為をするなど思いもよらぬ事であつたが、今は自由気ままな浪人の身である。氏真は、早川殿の白い首筋に口を這わせながら、振袖の裾をまくり上げ、太ももの間に手をすべり込ませた。

「あつ！」

早川殿が少し大きな声をあげた。

この館はけつして狭くはないが、なにせ多数の家来たちが揃つてここに起居しているので、あまり大きな声を出されると聞こえてしまふ。氏真は、あわてて早川殿の頭を引き寄せると、その熟れた唇

に自分の唇を重ね合わせ、あえぐ声を封じた。

甘い唾液がふんわりとお互いの口へ流れ込み、氏真の指先に触れる部分が、たちまち濡れた……。

やはりわしは、お由良がいなければダメだ。妻には苦勞をかけるが、どこまでも一緒に連れて参ろう。

その無言のつぶやきが彼女の心に届いたのか、きつく閉じられた彼女の瞳から、つうつと涙が伝い落ちた……。

続く。

剣客大名今川氏真と戦国夫婦善哉（2）

房事のあと、ふたつみつづ睦言を交わただけで今川氏真は部屋を出ていった。その背中に切ない秋波を送りながら、早川殿は悩ましげに乱れ髪をすく。

女は、もっと余韻を楽しみたいのだ。

やがて彼女はのろのろと身繕いしてから立ち上がり、障子戸を開け放って縁に出た。

まだ冬の名残を感じさせる冷たい春風が、麗らかな陽光の温もりと混ざり合い不思議な感触となつて彼女の頬をなでる。

早川殿は、八重咲きの乙女椿が咲き乱れる庭先を一渡り見渡してから、濡れ縁の上に静かに居ずまいを正し、そしてまるで池の鯉でも呼ぶように、ぱんぱんと二回手を打った。

「これ、おゆうや。おゆう」

しばらくして、いつの間にか石灯籠の陰にゆうが蹲すまたっていた。

「ゆうなら、これに」

肩の線がいかに華奢な、十五、六の乙女である。彼女は黒髪を根本から結いあげ、あの艶やかな辻が花染めの小袖にたすきを掛けていた。

「ほほ、相変わらず愛ういのう。どうじゃ、乱波の真似まねごとなどもう止めて、わらわの侍女まかたちにならぬかえ」

「お戯れを……」

ゆうは、この切れ者でありながらどこか無邪気な女軍師あまじの主が、苦手であった。その早川殿が、婉然と微笑みながらゆうに手招きをする。

「もそつと、こちらへ」

「はい」

ゆうが腰を屈めたまま小走りに駆け寄ると、早川殿は、懷から取り出した金銀泥きんぎぬの柙扇あしあふぎを広げて口元を覆い隠し、人目を憚るように

ひそひそと話し始めた。

「甲斐から戻ったばかりのそなたに、またぞろ仕事を頼むのは気が差すが……、三河の家康の動静がどうも気に掛かる。あの男、今ひとつ何を考えているやら分からぬところがあるでなあ。いよいよ信玄が上洛にむけて動き出すという報せはすでに浜松城へも届いているはず。そのような時に我が殿が頼っていつて、はたしてあの男は我らに害を及ぼさぬものか、その辺のところを見極めてきてほしいのじゃ。頼めるかや？」

「承知仕りましてございます。では早速」

「これ、おゆづ」

すぐさま踵を返し駆け去ろうとするゆうづを、早川殿が呼び止めた。「何か？」

「斉藤殿が、そなたの帰りを首を長うしてお待ちかねじゃ。三河へ旅立つ前に、ひと目お会いしてさし上げなされや」

ゆうづは苦い顔で軽く会釈してから無言で立ち去った。それを見て早川殿は扇子で口を隠し、可笑しそうに笑った。

「わらわにも、あのような年頃がござったわ、ほほほ」

と、その時。

早川殿は、さっきまでゆうづが畏まっていた石灯籠の脇に、別の人影がひざまずいていることに気づいてはつとなった。その者は、くすんだ柿色の忍び装束を身にまとい、二尺ほどの直刀を斜めに背負っている。

あきらかに忍びの者であった。

早川殿は、その不敵なちん入者をきつと睨み据え、しかし落ち着き払った声で誰何した。

「これ、いつからそこにおった？ そなたは何者じゃ？」

「……姫様、お久しゅうございます」

ゆつくりと持ち上げたその者のおもては、おどろおどろしい鬼の面であつた。その姿を見たたん、早川殿は懐かしそうに目を細め口元をほころばせた。

「おお、風魔小太郎ではないか、久しいのう」

「由良姫様も、ご健勝でなによりです」

地獄の底から沸き上がるような悪声である。小太郎と初めて会った者は、この声を聞いただけで震え上がる。しかし早川殿は、少女のように浮き浮きした面持ちで膝をにじり寄せ、無邪気に小首を傾げてみせた。

「我らの一行が、掛川城から天竜川を越えて戸倉城へ落ちのびるとき、そなたらの一党に助けられて以来じゃ。……して、今日は何ぞ面白い話でも聞かせてくれるのかえ？」

「……本日推参つかまつたのは余の儀にあらず、駿河殿のお命を狙う武田の刺客が潜んでおると、姫様に御注進申し上げるためでございます」

「ほう……、刺客のう」

「はい。真田弾正子飼いの忍びと、……それに、凄腕の甲賀者が一人」

早川殿は、畳んだ扇子の先で膝元の床板をとんと打って、身を乗り出した。

「それは、御坂路でそなたたちを襲った戸沢白雲斎とか申す乱波者であろう？」

しんなりと潤んだ瞳が、好奇に満ちてきらきらと輝いている。小太郎は、少なからず狼狽して呻いた。

「姫様、何故それを？」

ほほほ、と早川殿は笑った。小太郎が甲斐へ赴く道中の御坂峠で戸沢白雲斎にあやうく殺されかけた話は、ゆうから詳細に聞いていた。

「わらわは、何でも知っておるぞえ。信玄がすでに死人だという事

も、真田の隠居が裏で暗躍しておる事も……」

小太郎は、心の中であつと叫んだ。彼女は、甲斐に潜んでいる間じゅう、ずっと誰かに付きまとわれているのを感じていた。それは、明らかに武田の忍者とは別の気配であつた。彼女は、何度もその者を探り出し始末しようと試みたが、ついにそれは果たせなかった。彼女は、その事をずっと気味悪く思っていたのである。

あれは、今川の忍びであつたか。

小太郎は、得心すると同時に、北条氏康の斎女いつきむすめであつたこの美しい夫人が、実はただ者でないことを知つた。

小太郎は、平伏して言つた。

「不肖、この風魔小太郎、武田の刺客から由良姫さまをお守りいたします」

「それは、兄上のさしがねかえ？」

「……いえ、これは亡き大聖院さまの御遺言にて」

「父上の……」

早川殿は、しばらく何事かを思案していたが、やがてその切れ長の美しい瞳を険しくすると、小太郎に向かつて言つた。

「あい分かつた。父上の御遺言とあらば留め立ていたすまい。ただし、これだけは言うておく。我が殿のお命はこの由良がお守りもうし上げる。わらわの指図で大覚寺党の忍びが動いておるゆえ、決して邪魔だていたすな」

「心得ましてございます」

「小太郎」

「はっ」

早川殿は、また元の無邪気な顔に戻つて言つた。

「ふふふ……、その無粋な面を取つたらどうじゃ」

「……………姫様の仰せとあらば」

風魔小太郎は、塗りの剥げかかった鬼面の端に両手を添えると、ゆっくり顔から外した。やがてその内から、絶世の美女の寂しげな面貌があられる。

早川殿は、その顔を見下ろし、ほうとため息をついてから小首を傾げて微笑んだ。

「相変わらず美しいのう……。どうじゃ、風魔党の跡目など誰かにゆずって、わらわの腰元にならぬかえ？」

「お戯れを……」

氏康が没して以来笑うことのなかった小太郎が、久しぶりに笑顔を見せた。

かいもなき大僧正の官賊がよくにするがのいたおす見よ

武田信玄が甥である今川氏真を駿河から逐つたのは、彼が文弱な武将だったからというのが通説である。たしかに氏真には、和歌や蹴鞠などに傾倒する性向があった。

後世、松平定信が著述した『閑なるあまり』にも、

日本治りたりとても、油断するは東山義政の茶湯、大内義隆の学問、今川氏真の歌道ぞ……

とあるように、氏真が一時、歌に血道をあげていた事は有名だったようである。

しかし『甲陽軍鑑』の中でたびたび”剛勇”と称えられているように、今川氏真という男は、ただ文弱なだけの武将ではなかった。

彼は、塚原卜伝より免許を得て、自ら今川流をうち立てた、超一流の剣法者だったのである。

その剣は、戦場往来で斬り覚えに覚えたなどという粗野なものではなく、確かな剣理の積み重ねによって練られた、至極甚深の技であつた。氏真の剣技の冴えは、戦場で一度でも彼と斬り結んだことのある者ならば骨身にしみて分かっているはずだ。

合戦は負け続きであつたが、けっして凡庸な侍ではない。

もつとも、父である今川義元などは、

「剣は一人の敵、学ぶに足らず」
と言つて苦い顔をしたそうであるが……………。

広々とした白沙の庭で、自身の槍を中青眼に構えたまま、あさひな朝比奈やすとも泰朝はまなじりをつり上げていた。噛みしめた奥歯がぎりぎりと音を立てる。

見上げれば、空一面、斐紙ひしを貼り付けたような鈍色であつた。

泰朝と、三間の間合いをおいて対峙する齊藤主馬之助は、しかし飄然と佇んだまま木剣をだらんと右手に提げていた。その涼しげな顔には、笑窪さえ浮かんでいる。

泰朝が、一声吼えた。

「うおーっ！」

そして彼は、役者が六方を踏むように地面をだんっ、だんっと踏み鳴らしてから、槍の石突きをぐつと持ち上げた。

かすみげだん霞下段の構えである。

この構えは、相手の脛すねを払い、また払うと見せかけて穂先を跳ね上げ喉を突くなど、千変万化に自在な攻撃をくり出す必殺の構えである。主馬之助は、それを見て静かに両手を振りかぶり、そしてゆつくりと木剣を青眼に構えた。淀みのない見事な動きである。

泰朝は、こめかみに汗を這わせつつ、歯のあいだからしゅうーつと息を吐き出した……………。

長物には七分の利があると言われているように、槍と剣の戦いでは、槍を使う者の方が圧倒的に有利であつた。しかし泰朝は、槍の長い間合いを生かして攻め掛かることが、どうしても出来ないでいた。

主馬之助の佇まいには、一分の隙もないように見えたのである。

「……………いかがした、左京？」

ひろしき広敷の縁に胡座あぐらをかいて二人の立合を見下ろしていた今川氏真が、朝比奈泰朝に声を掛ける。目が笑っていた。氏真は、齊藤主馬之助

がこの館にやって来てからというもの、またぞろ兵法好きの血が騒ぎだしたようで、暇さえあれば家来を主馬之助と立合わせ、それを見分して楽しんでいたのである。しかし彼の家中で、主馬之助と互角に渡り合える者は一人もいなかった。

朝比奈泰朝も、もう何度も主馬之助に挑んでは敗れている一人であつた。

「むむむ……」

彼は、低い唸り声を発し、じやりつと砂を踏みにじりながらゆっくり回り込もうと試みた。目は、憑かれたように主馬之助を睨み据えたままだ。

突然、一陣の風がびようと吹いた。

馬場の方から曇天に向かつて黄塵こうじんが舞い上がり、主馬之助が一瞬目を細め空を見上げた。

得たり！

泰朝が摺り足すで一氣に間合いを詰める。

「りゃあーっ！」

彼は、呪縛から解き放たれたようにだんと踏み込んで槍先を突き出した。鈍い反射光にぼうつと光る劍鉞けんぼつが、唸りをあげて主馬之助に襲い掛かる。

朝比奈泰朝は、戦場で数多くの将兵と槍を交えた経験から、技に独自の工夫を凝らしていた。彼は、刺突する拍子に合わせて先手を内側にひねり込んでいたのだ。そうする事によつて槍がしなり、切っ先が螺旋状らせんにくねりながら敵を襲うのである。

しかし主馬之助は、白蛇のように絡みつく槍先を、すつと後ろに下がってかわした。泰朝は、すかさず槍を手元にたぐり寄せ、踏み込んで第二撃を見舞う。槍は、突くよりも引くときの俊敏さがとめられる。くり引いては突き、また引いては突く。その怒濤の連続攻撃は、しかし主馬之助の刺し子の胴着にわずかに掠ることしか出来なかった。

主馬之助は、泰朝の渾身の槍を完全に見切っていたのだ。

次第に焦りを感じ始めた泰朝は、攻撃を変化させた。

下段から、みぞおちへ突き上げる槍先を、主馬之助がわずかに体を開いてかわすと、今度は激しく一步を踏み込みざま槍を水平に旋回させ石突きで横面を薙ぎ払おうとする。これを、上体を反らせて主馬之助がかわすと、再び旋回させた穂先で逆袈裟に斬り上げる。

しかし技に変化をつけたことで、泰朝の動きが大味になった。

彼が、さらにくり引いて入身で脛を払おうとした刹那、主馬之助も大きく踏み込んで木立でがっとう槍の柄を押さえ込んだ。

「むむっ！」

そして泰朝がひるんで槍を引き抜こうとしたとき、けら首の辺りを足で踏みつけ完全に動きを封じてしまったのだ。

あっと思つたときには、主馬之助の真つ直ぐ伸ばした右腕から突き出された切っ先が、泰朝の喉元にあつた。彼は、槍を放り出して飛び退いた。

「ま、参つた……。自身の槍なれば少しは太刀打ちできると思つたが。それがしごとき腕前では斉藤殿の相手になりもうさぬわ」

そう吐き捨てるように言つて、泰朝は額の汗を拭つた。

主馬之助は、足下に転がる槍を拾い上げながら満面の笑みで言つた。

「あいやー、そいなごどながんめよ。備中守さまの槍も、まんず見事でござんした」

謙遜が下手な男である。泰朝は、ぶすつとした面持ちで主馬之助の手から槍を引つたみると、氏真の方に恨みがましい視線を向けた。氏真は、にこにこしている。

椿の咲き乱れる植え込みの奥から、呼子鳥の啼く声がした。雲の切れ間から、やわらかな陽が差し込みはじめる。

氏真は、意を決したようにぱんと膝を打って、腰を浮かせた。

「よし、主馬之助殿。一度、私とやってみよう」

晴れ晴れとした笑顔で言った。

「……え」

入れ替わるように、主馬之助の顔から見る見る笑みが消えていった……。

続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1324e/>

撃剣乱舞 / 斎藤伝鬼 ~ おゆうさんって、かっこいい

2010年10月10日19時16分発行